

丸山遺跡

国道153号線箕輪バイパス建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1990年

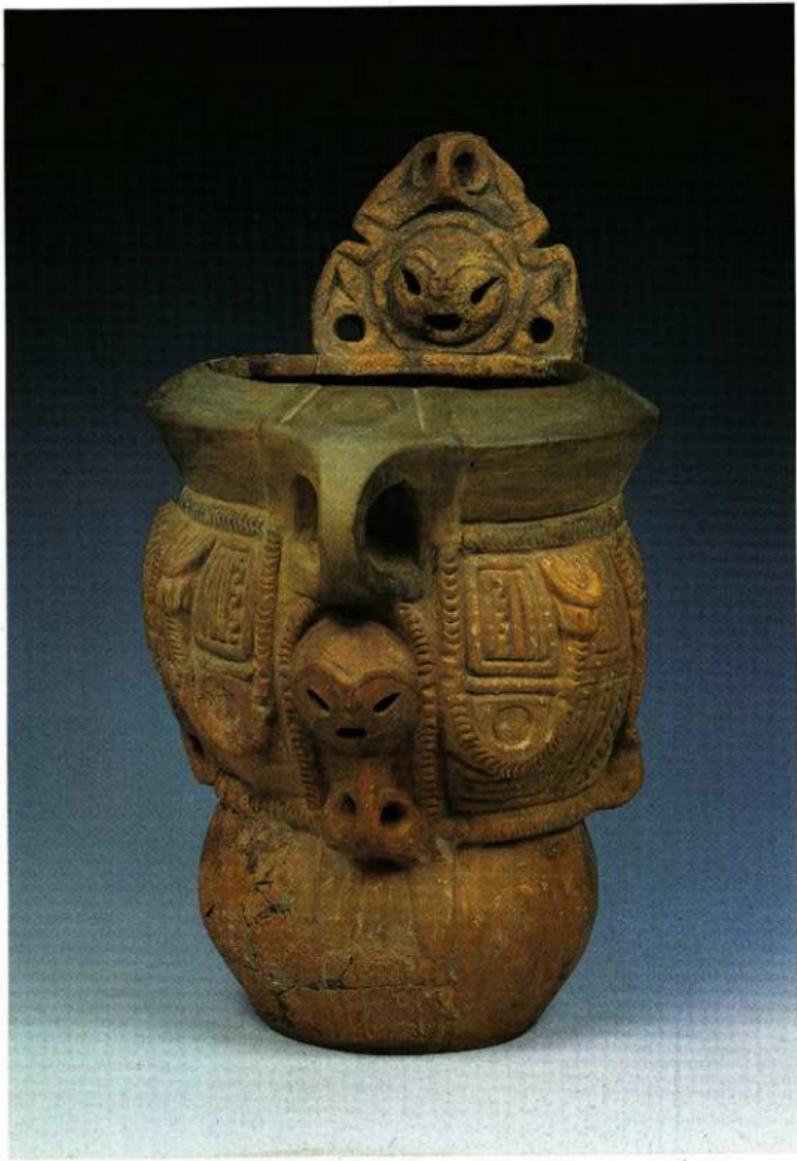
長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会

丸山遺跡

国道153号線箕輪バイパス建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1990年

長野県伊那建設事務所
箕輪町教育委員会



面部把手付土器（8号住居址出土）



6号住居址出土土器



1号住居址出土土器



18号住居址出土土器

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

丸山遺跡は、沢区のほぼ中央部、町立箕輪北小学校の西側段丘上にあります。周辺は、西天竜用水路の開設によって一帯が水田地帯となりましたが、近年における人口増加の傾向もあってか、住宅地に変わりつつあります。

ここは、以前から多くの遺物を探集できるところとして知られており、町の重要な遺跡の一つがありました。今回、国道153号線・箕輪バイパスが同遺跡内を通過するのに伴い、発掘調査を実施して、記録保存を行うことになりました。調査は、二ヶ月余に渡って行われ、縄文時代や奈良・平安時代のまことに多くの遺構や遺物が出土し、多大な成果を収め、無事終了することができました。特に今回は、大変珍しい「顔面把手付土器」が、ほぼ原形に近い状態で出土しました。町内にも、まだこのようなすばらしい文化遺産が眠っていることを改めて認識し、これらの保存・保護に、より一層努力していくことが、私達に課せられた責務と考えております。又、今回の成果に付きましては、本書の中で詳細に記しておりますので、多くの研究者に広く活用され、郷土の歴史解明の一頁となれば幸いと存じております。

最後になりましたが、この調査にあたり、深いご理解とご協力をいただきました沢区の皆様方をはじめ、長野県伊那建設事務所、調査に従事された団員の方々に心から感謝申し上げ序といたします。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪1098-5番地に所在する丸山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、長野県伊那建設事務所より委託を受け、箕輪町教育委員会が行ったものである。調査は、平成元年5月29日から7月29日まで実施し、引き継ぎ整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
 - ・土器の復元－福沢幸一
 - ・石器の石材鑑定－樋口彦雄
 - ・遺構図の整理－井上武雄・根橋とし子・宮脇陽子
 - ・遺物の実測・トレース－赤松　茂・井上武雄・根橋とし子・宮脇陽子
 - ・土器拓影－井上武雄・根橋とし子
 - ・挿図作成－赤松　茂・井上武雄・根橋とし子
 - ・写真撮影・図版作成－征矢　進・赤松　茂・井上武雄
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。

住居址・掘立建物址－1：60、土壤・炉・カマド－1：40、集石炉－1：30、
トレンチ－1：30
遺構図のスクリーントーンは、次のものを表す。
細点－炉・カマドの火焼状況
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。

縄文土器・土師器・須恵器－1：4、縄文土器拓影図－1：3、土製品－2：3、石器－
2：3、1：3、1：6、鉄器－2：3
遺物実測図のスクリーントーンは、次のものを表す。
細点－須恵器断面・斜線－石器火焼状況、網点－炭化物付着状況
6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。
7. 本書の執筆は、赤松　茂・根橋とし子・樋口彦雄・宮脇陽子が分担した。
8. 本書の編集は、赤松　茂・石川　寛・井上武雄・柴　登巳夫・根橋とし子・樋口彦雄・宮脇陽子が行った。
9. 縄文土器については、伊那市職員飯塚政美氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
10. 写真撮影については、征矢　進氏にお願いし、ご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

11. 総括については、調査団顧問である赤穂高校定時制教頭丸山敏一郎氏にご教示いただいた。
記して感謝申し上げる。
12. 出土遺物及び図版類は、すべて笑輪町教育委員会に保管している。広く活用されたい。

目 次

題 字	団 長 橋口彦雄
序	教育長 堀口 泉
例 言	
本文目次	
挿図目次	
付図目次	
図版目次	
第Ⅰ章 遺跡の立地.....	1
第1節 位 置.....	1
第2節 自然環境.....	2
第3節 歴史環境.....	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	5
第1節 調査に至る経過.....	5
第2節 調査団の編成.....	5
第3節 調査口誌.....	7
第Ⅲ章 遺跡の状態.....	15
第1節 調査の方法と結果.....	15
第2節 層序.....	15
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	17
第1節 繩文時代.....	17
1 住居址.....	17
1号住居址.....	17, 3号住居址.....23, 4号住居址.....28,
5号住居址.....	32, 6号住居址.....36, 8号住居址.....44,
10号住居址.....	52, 11号住居址.....57, 12号住居址.....58,
13号住居址.....	63, 14号住居址.....65, 15号住居址.....69,
16号住居址.....	70, 17号住居址.....72, 18号住居址.....74,
19号住居址.....	80, 20号住居址.....81
2 土 壤.....	84
2号土壤.....	84, 3号土壤.....84, 4号土壤.....84, 5号土壤.....84,

6号土壤	84,	9号土壤	84,	10号土壤	84,	11号土壤	84,
12号土壤	84,	13号土壤	86,	14号土壤	86,	15号土壤	86,
16号土壤	86,	17号土壤	86,	18号土壤	86,	19号土壤	86,
20号土壤	86,	21号土壤	86,	22号土壤	90,	23号土壤	90,
24号土壤	90,	25号土壤	90,	26号土壤	90,	27号土壤	90,
28号土壤	90,	29号土壤	90,	30号土壤	90,	31号土壤	91,
32号土壤	91,	33号土壤	91,	34号土壤	91,	35号土壤	91,
36号土壤	91,	37号土壤	91,	38号土壤	92,	39号土壤	92,
40号土壤	92,	41号土壤	92,	42号土壤	94,	43号土壤	94
3 集石							94
1号集石							94
4 造構外出土遺物							98
第2節 奈良・平安時代							99
1 住居址							99
2号住居址	99,	7号住居址	99,	9号住居址	101		
2 挖立建物址							104
1号掘立建物址							104
3 造構外出土遺物							105
第V章 まとめ							106

挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 周辺地形	14
第4図 基本層序模式図	16
第5図 1号住居址実測図	18
第6図 1号住居址遺物出土状況図	19
第7図 1号住居址出土遺物実測図1	20
第8図 1号住居址出土遺物実測図2	21
第9図 1号住居址出土遺物実測図3	22
第10図 1号住居址出土遺物実測図4	23
第11図 3号住居址実測図	24
第12図 3号住居址出土遺物実測図1	25
第13図 3号住居址出土遺物実測図2	27
第14図 4号住居址実測図	29
第15図 4号住居址出土遺物実測図1	30
第16図 4号住居址出土遺物実測図2	31
第17図 5号住居址実測図	33
第18図 5号住居址出土遺物実測図1	34
第19図 5号住居址出土遺物実測図2	35
第20図 6号住居址実測図・遺物出土状況図	37
第21図 6号住居址出土遺物実測図1	39
第22図 6号住居址出土遺物実測図2	41
第23図 6号住居址出土遺物実測図3	42
第24図 6号住居址出土遺物実測図4	43
第25図 8号住居址実測図	45
第26図 8号住居址遺物出土状況図	46
第27図 8号住居址出土遺物実測図1	47
第28図 8号住居址出土遺物実測図2	49
第29図 8号住居址出土遺物実測図3	51

第30図	10号住居址実測図	53
第31図	10号住居址出土遺物実測図 1	54
第32図	10号住居址出土遺物実測図 2	55
第33図	10号住居址出土遺物実測図 3	56
第34図	11号住居址実測図	58
第35図	12号住居址実測図	59
第36図	12号住居址出土遺物実測図	61
第37図	13号住居址実測図	62
第38図	13号住居址出土遺物実測図	64
第39図	14号住居址実測図	66
第40図	14号住居址出土遺物実測図 1	67
第41図	14号住居址出土遺物実測図 2	68
第42図	15号住居址実測図・出土遺物実測図	69
第43図	16号住居址実測図	70
第44図	16号住居址出土遺物実測図	71
第45図	17号住居址実測図	72
第46図	18号住居址実測図	73
第47図	18号住居址遺物出土状況図	74
第48図	18号住居址出土遺物実測図 1	76
第49図	18号住居址出土遺物実測図 2	77
第50図	18号住居址出土遺物実測図 3	78
第51図	18号住居址出土遺物実測図 4	79
第52図	18号住居址出土遺物実測図 5	80
第53図	19号住居址実測図	81
第54図	19号住居址出土遺物実測図	82
第55図	20号住居址実測図・出土遺物実測図	83
第56図	土壤実測図 1	85
第57図	土壤実測図 2	87
第58図	土壤実測図 3	88
第59図	土壤実測図 4	89
第60図	土壤実測図 5	92
第61図	土壤出土遺物実測図 1	93
第62図	土壤出土遺物実測図 2	94

第63図	集石実測図・出土遺物実測図	95
第64図	遺構外出土遺物実測図 1	96
第65図	遺構外出土遺物実測図 2	97
第66図	遺構外出土遺物実測図 3	98
第67図	2号住居址実測図・出土遺物実測図	100
第68図	7号住居址実測図	101
第69図	7号住居址出土遺物実測図	102
第70図	9号住居址実測図・出土遺物実測図	103
第71図	1号掘立建物址実測図	104
第72図	遺構外出土遺物実測図	105

付 図 目 次

付図 1 調査区全体図

図 版 目 次

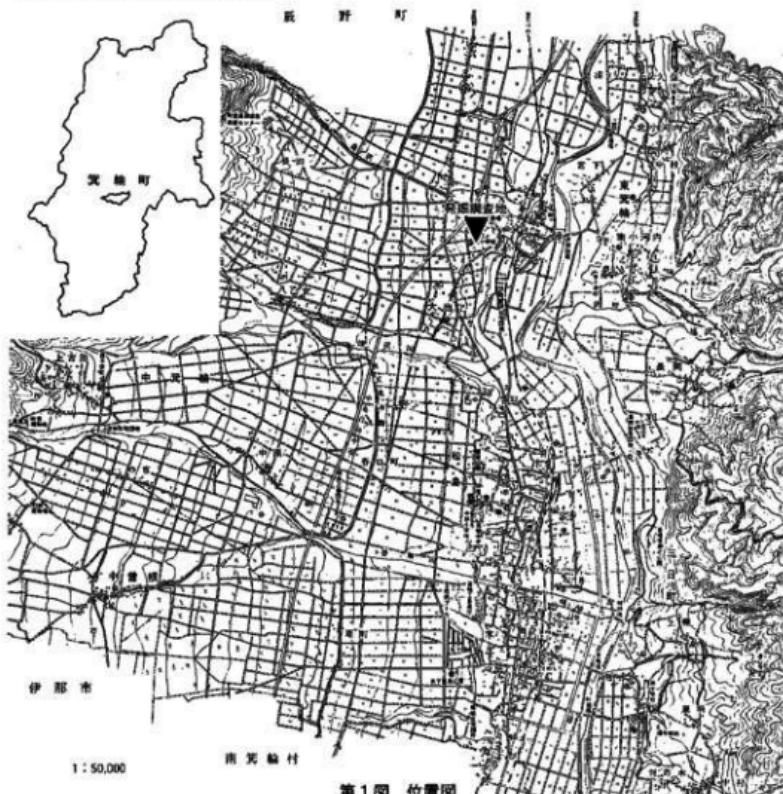
- 図版1 遺跡地遠景、調査地近景
図版2 調査地全景
図版3 1号住居址、1号住居址遺物出土状況
図版4 3号住居址、3号住居址埋甕埋設状況
図版5 4号住居址、4号住居址埋甕埋設状況
図版6 5号住居址、5号住居址埋甕埋設状況
図版7 6号住居址、6号住居址埋甕炉
図版8 6号住居址埋甕炉埋設状況、6号住居址遺物出土状況
図版9 6号住居址遺物出土状況
図版10 8号住居址、8号住居址埋甕炉
図版11 8号住居址埋甕炉埋設状況、8号住居址遺物出土状況
図版12 8号住居址遺物出土状況
図版13 10号住居址、10号住居址炉
図版14 11号住居址、12号住居址
図版15 12号住居址炉、13号住居址
図版16 13号住居址埋甕炉、13号住居址埋甕炉埋設状況
図版17 14号住居址、14号住居址埋甕埋設状況
図版18 15号住居址、16号住居址
図版19 18号住居址、18号住居址埋甕埋設状況
図版20 18号住居址遺物出土状況
図版21 19号住居址、20号住居址
図版22 集石・集石断面
図版23 2・3・4号土壤、5号土壤、6号土壤
図版24 9号土壤、10号土壤、12号土壤
図版25 21号土壤、24号土壤、26号土壤
図版26 27号土壤、28号土壤、30号土壤
図版27 31号土壤、32号土壤、33号土壤
図版28 35号土壤、36号土壤、37号土壤
図版29 38号土壤、39・40号土壤、42号土壤

- 図版30 2号住居址、7号住居址
- 図版31 7号住居址カマド、9号住居址
- 図版32 9号住居址カマド、1号掘立建物址
- 図版33 出土縄文土器1（1～5－1号住居址）
- 図版34 出土縄文土器2（1～4－1号、5－3号各住居址）
- 図版35 出土縄文土器3（1・2・3号、3－4号、4－5号各住居址）
- 図版36 出土縄文土器4（1～4－6号住居址）
- 図版37 出土縄文土器5（1～5－6号住居址）
- 図版38 出土縄文土器6（8号住居址）
- 図版39 出土縄文土器7（1～4－8号住居址）
- 図版40 出土縄文土器8（1～5－8号住居址）
- 図版41 出土縄文土器9（1～4－10号住居址）
- 図版42 出土縄文土器10（1・2－12号、3・4－13号、5－14号各住居址）
- 図版43 出土縄文土器11（1－18号住居址出土土偶、2・3－18号住居址）
- 図版44 出土縄文土器12（1～4－18号住居址）
- 図版45 出土縄文土器13（1～5－18号住居址）
- 図版46 出土縄文土器14（1－19号住居址、2－20号住居址）、出土石器1（石鎌）
- 図版47 出土石器2（石鎌）、出土石器3（石鎌）
- 図版48 出土石器4（石匙、スクレイパー、小型剥片石器）、出土石器5（ピエスエスキーユ）
- 図版49 出土石器6（石錐）、出土石器7（打製石斧）
- 図版50 出土石器8（打製石斧）、出土石器9（打製石斧）
- 図版51 出土石器10（磨製石斧）、出土石器11（磨製石斧）
- 図版52 出土石器12（石匙、横刃型石器）、出土石器13（磨石・凹石・敲石）
- 図版53 出土石器14（砥石）、出土石器15（石皿）
- 図版54 出土石器16（石皿）、出土土師器（7号住居址）
- 図版55 出土鉄器、調査参加者

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

丸山遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪1098-5番地他は、北緯 $35^{\circ} 55' 54''$ 、東經 $137^{\circ} 59' 07''$ の地点で標高713~715mに位置する。地勢を見ると、東西では標高にかなり高低差があるが、南北については大出区から松島区への国道を隔てて南側はやや低く、北側は各地区によって若干の高低差が認められる緩やかな傾斜地といえる。ここは、眺望もよく南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の南小河内区、長岡区が展望できる。天竜川との比高差は約40mを計る。



第1図 位置図

第2節 自然環境

笑輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円錐層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。

丸山遺跡は、この河岸段丘の突端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記の通り恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。



遺跡周辺地形

第3節 歴史的環境

箕輪町における天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡(1,2,6~13)と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在するもの(3~5)とに分けられ、共に地形・水利などの自然条件のよい場所に存在している。かつて、この広い扇状地は灌漑用水に恵まれず、山林・原野が多く耕地も川沿いの一部を除いては畠地が大部分であった。しかし、大正から昭和にかけて、西天竜幹線水路の建設とともに大規模な構造改善が行われ、その後は、上伊那を代表する水田地帯となっている。このような開発により扇状地や河岸段丘突端部に所在する遺跡の一部が破壊を受けているのではないかと推測される。今後もこの一帯における開発には、充分な注意を図り、遺跡の保護に努めて行かなければならない。

①丸山遺跡 縄文時代中期の土器片や黒曜石が散布しており、曾利I式の大型土器や石冠が既出している。

②熊野上遺跡 縄文時代の土器片、黒曜石の散布地として確認されている。

③五輪遺跡 縄文時代中期から中世にかけての複合遺跡で、昭和48年に発掘され、縄文時代中期の遺構、遺物が出土している。

④中道遺跡 中央道建設に伴う発掘により、縄文時代中期から平安にかけての複合遺跡であることが確認され、昭和63年度の町教育委員会の発掘で、縄文時代初頭の土壙群と、古墳から奈良時代にかけての遺構・遺物の他、中世の土壙墓も出土している。

⑤堂地遺跡 中央道建設に伴う発掘により縄文時代中期から平安にかけての複合遺跡であることが確認され、また町内で唯一の方形周溝墓も検出された。昭和62年度の町教育委員会の発掘で、奈良から平安時代にかけての遺構や遺物が出土した。

⑥大出遺跡 縄文時代中期の土器片や石器、平安時代の須恵器片などが確認されている。

⑦松島王墓古墳 上伊那唯一の前方後円墳で全長58m・高さ7.7mの規模を誇り、6世紀後半の築造と推定される。県内では唯一の車塚形式の古墳で、昭和40年に県史跡に指定された。

⑧本城遺跡 弥生から平安時代にかけての遺物の散布地として確認されている。

⑨中山遺跡 縄文時代中期初頭から中葉の土器片・石器の他平安時代の遺構、遺物が昭和60~62年の発掘で確認された。

⑩藤山遺跡 縄文時代中期初頭から中葉の土器片・石器が確認されている。

⑪上の林遺跡 以前より遺物の散布地として知られており、縄文・弥生・平安の遺構・遺物が55~57年の発掘調査によって確認されている。

⑫北城遺跡 弥生時代から中世にかけての複合遺跡で昭和47年度の発掘では中世の火葬基群が検出している。

⑬南城遺跡 弥生から平安時代の遺物の散布地として確認されている。



- | | | | | | |
|-------|--------|------|------|--------|------|
| ①丸 山 | ②熊 野 上 | ③五 輪 | ④中 道 | ⑤堂 地 | ⑥大 出 |
| ⑦王墓古墳 | ⑧本 城 | ⑨中 山 | ⑩藤 山 | ⑪上 ノ 林 | ⑫北 城 |
| ⑬南 城 | | | | | |

第2図 周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

長野県伊那建設事務所は、箕輪町を通過する国道153号線が通勤時を中心とする著しい交通渋滞に対処するため、南箕輪村との町村界より伊北インターチェンジまでの天竜川沿いにバイパスを計画し、昭和48年度より事業が進められてきた。箕輪町教育委員会は、町の南部に広がる箕輪遺跡に同路線が通過するのに伴って、昭和55年度に確認調査を、55・56・57・58年度には本発掘調査を実施して記録保存を行ってきた。そして、全体計画6,795mのうち起点となる木下南部より大出までの4,480mが完成し、平成元年3月に供用を開始した。

今年度、残りの区間の完成による全線開通を早急に進めるため、計画路線内に所在する埋蔵文化財の保護協議を、長野県伊那建設事務所と長野県教育委員会文化課と箕輪町教育委員会の三者で行った結果、沢の丸山と熊野上の二遺跡の緊急発掘調査を実施し、記録保存をすることとなった。路線が沢町営住宅団地の西北を通過するために、沢保育所の西まで広がると考えられる丸山遺跡の東端部を調査することは、遺跡の性格を知るうえでかなり重要視される調査である。また地元では、この一帯で土器や石器を採取できることが以前より知られており、開墾や耕作中にも多くの遺物を出土したという事実もあり、調査の成果に大きな期待が寄せられていた。

調査は、このような経過によって5月29日から7月29日までを調査期間とし、箕輪町教育委員会が長野県伊那建設事務所より委託を受けて、新たに調査團を結成し調査を実施する運びとなった。尚、調査地の一部が未買収のため、平成2年度以降にその調査を行って完了となる予定である。

第2節 調査團の編成

イ) 調査團

顧問 丸山 敏一郎 赤穂高校定時制教頭

団長 橋口 彦雄

担当者 柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員

調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢 幸一

調査員 宮脇 陽子

調査団員

荒川織光、石川清子、井上武雄、井上隆次、浦野 弘、大槻泰人、岡 章、岡 正
唐沢光国、小池久人、小島久雄、小平和子、小林信義、笠川正秋、清水すみ子、白鳥博臣
戸田隆志、中坪侃一郎、根橋とし子、野村金吉、林 荣市、松田貢一、松田幸雄
水田あき子、水田重雄、山岡ゆき子、

四) 事 務 局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長
上島富作夫 箕輪町教育委員会社会教育課課長
市川 健二 箕輪町教育委員会社会教育課係長
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤沼 悅子 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 調査日誌

5月29日（月）晴後雨

テントを設営し、発掘用機材を運搬した。田部と畠部のテストピット掘りをした。テストピット内からは、縄文土器片が出土している。田部は、かなりローム層が飛ばされているらしく、遺構は出ない。



5月30日（火）晴

午前、午後とも田部の上面確認を行う。排水路も作る。遺構は土壌を2基検出したほかは何もない。遺物は縄文土器片、石器が出土する。重機の都合で作業はなかなかはかどらなかった。

5月31日（水）快晴

堀口教育長、丸山顧問のご来席をいただき神事と、堀口團長を中心とする調査團の結団式とが行われ、團員の安全と調査の完遂を祈願した。上面確認、重機による表土はぎが行われた。西側の上段部は、土も黒色でかなり柔らかく、縄文土器片が多量に出土する。畠部の東側の上面確認が始まり、住居址2軒が検出される。土壌は、焼土がかなり検出された。

6月1日（木）晴

西側上段、東側の上面確認及び土壌1の全掘を行う。西側上段部は住居址のプランが確定できない。土の色の判断が難しい。東側はローム上面に遺構が確認できる。耕土が堅く作業は難航する。

6月2日（金）晴

引き続き上面確認を行う。3班は土壌1・2号の平面測量。重機による表土はぎ、排土作業は今日で終了。7号住内に土器3個体がつぶれて出土する。有孔飼付土器片も出土する。

6月3日（土）晴後雨

上面確認を行う。遺構確認面より、15cm程上の土がかなり堅く、小型重機により排土を行った。夕立のため、3:30に作業を終了する。

6月5日（月）曇

平安住居址の7・9号、掘立建物址1号、土壌2~5号、8号のプラン確認後、住居址はペルトを設定し、それぞれ掘り下げにはいる。掘立建物址の下には縄文住居址があることが予測



される。9号住からは刀子が出土する。

6月6日（火）雨後晴

午後から作業を実施する。19号住確認作業と上面確認作業をする。

6月7日（水）晴

1班は3号住の掘りをする。2班は9号住の柱穴探し及び周溝の掘りをする。3班は9号住の土層断面及びカマドの平面測量ほか。3号住からは縄文土器片が多数出土する。



6月8日（木）曇

1班は3、5号住の掘りをする。2班は9号住の掘りと掘立建物址の柱穴探しをする。3班は7号住の平面測量とカマドの解体及び11号住の平面測量をする。3号住内より埋甕が2個体出土する。縄文土器片、土師器片、須恵器片、黒曜石等が多数出土する。

6月9日（金）雨

降雨のため終日室内作業。

6月10日（土）小雨

降雨のため終日室内作業。

6月12日（月）晴

1、2班は2、3、5、9号住の掘りをする。3班は3、5号住のセクション及び7、9号住の平面測量を行う。2号住は一部貼床をしていると思われる。5号住より埋甕が出土する。終日土器洗い。

6月13日（火）晴

昨日に引き続き、1、2班は2～5号住の掘り及び9、10号土壤の堀りを行う。3班は9号住の平面測量を行う。2号住よりほぼ完全な形の刀子が出土する。調査地の北東隅に集石炉が検出される。終日土器洗い。

6月14日（水）晴

3～5号住の柱穴、炉の堀り及び2、17号住、集石炉の堀りを行う。上面確認作業も平行して行われる。10号土壤、2、3号住の平面測量外を行う。5号住のプランが明確でない。3号住は4本柱、4、5号住は5本柱であり、入口はいずれも南東側である。縄文時代の住居址の構造等について学芸員による学習会を、休憩時間



を利用して行った。

6月15日（木）曇

1班は10号住の掘りをする。2班は6号住及び12号住にベルトを設定した後掘り下げた。3班は3号住のレベリングと4号住のエレベーション、平面測量をする。10号住が消え、17号住を10号住とした。雨のため、午後は作業を中止する。



6月16日（金）雨

降雨のため終日室内作業。

6月17日（土）曇

昨日までの雨のため、シートに溜った水を抜く作業から始める。6、10、12号住の掘り。4、5号住の平面測量他を行う。3号住の埋甕の取り上げを行う。50cmと20cm程の2個体で唐草文が施してある。町誌を読む会の会員30人ほどが見学に訪れた。

6月19日（月）雨

雨のため終日室内作業。

6月20日（火）曇

6・10・12・14号住の掘りと上面確認作業をする。10号住は覆土が厚く約40cmで出土土器石器も多い繩文住居址であった。4号住は写真撮影のため清掃を行う。

6月21日（水）晴

昨日に引き続き、6・10・12・14号住の掘りと上面確認作業をする。6・10・12号住の平面測量外を行う。10・14号住の炉は石組炉である。

6月22日（木）曇

6号住の土器片集中群を明確にする作業及び平面測量を行う。6・10号住の柱穴掘りを行う。12号住の平面測量を行う。10号住、炉の掘り、3号住の掘り下げを行う。10号住の炉の石組の下の土器は炉の壁に張り付けられているのではなく、埋められている。2班は上面確認作業。西側の上面は開田時に掘削されており住居址も床面がかなり取られている。

6月23日（金）雨

降雨のため終日室内作業。

6月24日（土）雨

降雨のため終日室内作業。



6月26日（月）晴

終日上面確認を行うが調査地北側は土が堅く難航する。10・13・14号住の床面までの掘りと仕上げ作業を行う。6号住柱穴の掘りを行う。13号住は埋甕炉で甕の周囲を石で囲ってある。朝町長が、また午後婦人の役員30人ほどが見学に訪れた。



6月27日（火）曇後雨

10号住エレベーション、平面測量、6号住土器の取り上げ、上面確認、土器洗いを行う。6号住の土器は11ブロックに分け、さらにその1ブロックを小ブロックに分けて取り上げた。北側へ上面確認を進める。住居址と土壤が確認された。午後4:00雨のため中止する。

6月28日（水）雨

降雨のため終日室内作業。

6月29日（木）曇

上面確認、6号住土器の取り上げ、10号住レベリングを行う。調査地北の3分の1は削られていて、遺構が確認できない。終日土器洗いを行う。若草園の職員が見学に訪れる。

6月30日（金）晴

上面確認、各住居址の清掃、6・13号住の土器の取り上げ、14号住の埋甕の半カット、10号住炉内及び集石炉の仕上げを行う。明日行われる見学会の準備をする。午前中SBCの取材があった。14号住の埋甕は逆位で高さは50cm位である。収入役が見学に訪れた。

7月1日（土）曇後晴

現地見学会を行う。100人ほどの見学者が訪れる。1・2班はそれぞれ15・18号住の掘り、集石炉の仕上げを行う。

7月3日（月）雨

降雨のため終日室内作業。

7月4日（火）曇後雨

前日の雨のため、全員で水抜きの作業から始める。3班は調査地北側のグリット設定を行う。1班は1・18号住の掘りを行う。2班は8・15号住の掘りと集石炉の仕上げ作業をする。1、18号住及び8、15号住は切り合っているため、プランの確定は困難なところもある。雷雨のため午後2時に作業を中止する。



7月5日（水）晴後雨

1・18号住及び掘立建物址のプランがほぼ明確になったため、1班はベルトを設定し掘り下げるに入る。2班は8・15号住を床面まで掘り下げる。3班は集石炉の測量を行う。箕輪東小学校の5・6年生が現地学習に訪れる。



7月6日（木）晴

前日に引き続き1・18号住及び8・15号住の掘り、集石炉の測量を行う。18号住グリッドBC-8・9地点より完形と思われる土器が各1個出土する。土器片も多数出土する。箕輪北小学校5年生、箕輪東小学校職員が現地学習に訪れる。

7月7日（金）晴

引き続き1・18号住のベルトをはずしと8・15号住の土器の精掘、16号住の掘り、集石炉の測量を行う。8号住の炉付近から顔面付土器が出土する。町内外の報道機関が取材に来る。また乳棒状の磨製石斧も出土する。

7月8日（土）晴

1・18号住のベルトをはずし、16号住の掘りを行う。測量は集石炉及び8号住を行う。調査も住居址の掘りは終了間近い。後は測量のみである。18号住からは1個体になりそうな土器片が5個分ほど出土した。箕輪北小学校の6年生が現地学習に訪れる。

7月10日（月）雨

降雨のため終日室内作業。

7月11日（火）曇時々雨

雨が多く、水抜きとシート掛けに追われてしまう。8号住の顔面付土器を取り上げる。顔面裏側の模様なども立派で感嘆した。1・18・19号住の掘り、土壤の半カット、及び全掘、測量も行う。18号住の遺物の測量も行う。終日土器洗い。箕輪北小学校の4年生、笠原町議、が現地学習に訪れる。また南信日々の記者も取材に訪れる。



7月12日（水）雨

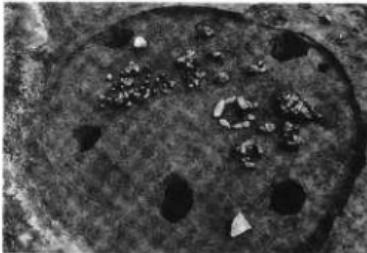
降雨のため終日室内作業。

7月13日（木）雨

降雨のため終日室内作業。長雨のため現場の状況を2回見に行く。

7月14日（金）晴

1・8・19号住の掘りを行う。調査地最北西の畠のトレンチを設定する。1号住の土器の平面測量を行う。18号住は土器取り上げと写真撮影のための清掃作業を行う。34号土壤から石皿が出土する。3日続いた降雨でシートにかなりの水が溜り、水抜き作業が大変だ。遺構の中も水に満っていて乾くまで作業ができない。



7月15日（土）曇

1・19・20号住の掘り。調査区境界の整備、土壤の全掘、トレンチ設定、10号住が内の平面測量、集石炉の測量を行った。10号住の火には全面に焼土が検出された。発掘作業も残るは測量だけとなり、全員での作業は本日で終了となる。箕輪東小学校の1～4年生が現地学習に訪れる。

7月17日（月）雨後曇

降雨のため終日室内作業。

7月18日（火）曇後雨

昨日の雨の水抜き作業をし、集石炉の測量と土器洗いを始めるが又また雨が降り出し急ぎシートを掛ける。現場のコンディションが悪化したため作業を中止する。午後は室内作業を行う。

7月19日（水）晴

写真撮影のための清掃、集石炉、埋甕、埋甕炉などの測量を行う。小人数のためシート外し、シート掛けなどが手間取る。埋甕炉内からは、焼土は検出されなかった。

7月20日（木）晴

1号住の掘り、集石炉の測量、19号住の遺物分布の測量、6・13号住の平面測量、6号住の埋甕炉の全掘、5号住の埋甕の半カット及び取り上げを行う。5号住の埋甕は3号住と文様が似ている。底部より10cm程のところで壊れていた。13号住の埋甕は逆位で、口縁部がかなりハの字の形に開いており土器が結構大きいため取り上げが難しく延期となった。

7月21日（金）晴後雨

6・13・14号住の平面測量、14号住の埋甕の取り上げ、6号住の埋甕炉の取り上げ、集石炉の測量を行う。14号住の逆位の埋甕の口縁は取り上げ時に壊れてしまった。6号住の炉の埋甕は口縁部付近にすばらしい文様が施されている。



午前中は非常に暑く、午後は夕立にあってしまつた。

7月22日（土）晴後雨

6・13・20号住の平面測量、集石炉の測量を3組で分担して行う。土器洗いを行う。13号住の埋甕がの埋甕はかなりもろく慎重に取り上げを行う。後2~3日で終了の予定である。



7月24日（月）晴

引き続き残りの測量を行う。集石炉の測量及び掘りを行う。18号住の平面測量及び埋甕の半カットと測量、1号住及び8・15号住の平面測量も行う。集石炉の石は500個余りで火熱を受けてもろくなっていた。18号住の埋甕は沈線の唐草文が施されている。

7月25日（火）晴後曇

集石炉、土壤、1号住、16号住の平面測量を行う。8号住の埋甕は甕が二重に埋められている。1号住ピット内より小型の有孔鈎付土器が完形品で出土する。

7月26日（水）曇

1号住のレベリング、18・19号住内土壤のセクション、19号住内土壤の掘り、8号住埋甕の甕の取り上げ、18号住内土壤の平面測量を行う。土壤がかなり検出されて、掘りに手間取る。8号住の2重の埋甕は両方ともかなりもろく、外側の甕はバラバラにしてうちがわの甕は縄を巻いて取り上げに苦労した。

7月27日（木）晴

1号住エレベーション、19号住の平面測量、土壤の掘りを行う。終日土器洗い。非常によい天気で作業が進む。

7月28日（金）晴

土壤平面測量。1号住エレベーション、19号住のセクションを取る。

7月29日（土）曇

調査地の全測を行つ。かなりの暑さや降雨に見舞われた発掘調査であったが、これで現場での作業は完了となる。



7月31日から室内にて土器洗い、注記、実測、拓本、トレース、執筆等の整理作業を開始した。



第3図 周辺地形

第Ⅲ章 遺跡の状態

第1節 調査の方法と結果

今回の調査は、前章で述べているように遺跡包蔵地が広範囲に渡ると予想されるため、遺跡地内に予定されている全工事面積を調査対象とした。調査以前の現地は水田と畑地であり、畑地は開墾などによる地形の変化を受けていないと考えられるが、地盤の切盛りで整地されている水田においては、遺跡の保存状態はあまり良好であるとは考えられなかった。そして、現地視察を行って協議をした結果、開田工事で大きく削平されている水田を除く2,000m²のうち、未買収地120m²を外した1,880m²の全面発掘調査とすることとし、実施した。

調査はまず畑地・水田にかかわらず、2m四方の試掘坑8ヶ所を手掘りし、土層堆積状況と遺構の確認を行った。その結果から、遺構が確認された10~15cmまでの表土（耕作土）を大型重機によって除去し、その後は手作業により遺構の確認と内部の調査、測量・写真などの記録を行った。尚、表土が堅く、上面確認作業の困難な箇所には、小型重機を導入して作業の能率・向上に努めた。確認された遺構については、遺構の時期差に関係なく住居址・土壙などの種別ごとに発見された順に番号をつけた。グリットは4m四方とし、主軸を南北方向に併せて設定し、南北はローマ数字で東西はアルファベットを用いて標記した。また標高は、熊野上地積にある水準点からベンチマーク移動を行い、調査地の南端部にベンチマーク（713.722m）を落とした。検出遺構の概要是次の通りである。

- ・竪穴式住居址20軒（縄文時代17軒、奈良・平安時代3軒）
- ・掘立建物址1棟（奈良・平安時代）
- ・土壙40基（縄文時代35基、奈良・平安時代5基）
- ・集石1ヶ所（縄文時代）

尚、調査地北西部に自然地形の残る畑地があり、トレンチによる遺構確認を行ったが、遺構の存在が認められなかった。

第2節 層序

天童川西岸上の扇状地における地質構造は、耕作土などの黒褐色腐食土一ローム層一砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的であり、河岸段丘の突端部に位置する丸山遺跡もこれを基本としている。

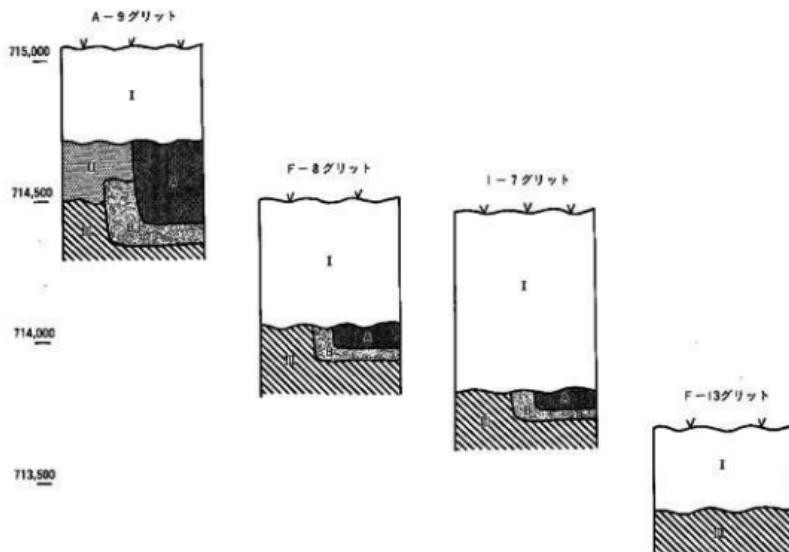
I層—表土層。水田や畑地として使用されていた耕作土の他、開田工事によって人為的に移動

された置き土や水田敷きもⅠ層としてまとめる。

II層—暗茶褐色土層。粘性はやや有り、Ⅰ層と比べると締りはやや強く、縄文土器片や黒曜石をまばらに含んでいる。この層の上部で奈良・平安時代の遺構（A）が、また下部で縄文時代の遺構が確認された。共に、その掘り込みが次のⅢ層まで及んでいる。

III層—黄色土層（ローム層）。粘性・締りが共に強い。畑地では、この層の上部が遺構確認面である。

A-9グリットを中心とする一帯は調査地の西側に広がる一段高い水田の一画であり、開田の際に盛り土となった部分と考えられ、削平による破壊がなく上記の堆積状況を顕著に示していた。そのため、Ⅱ層中にみられる遺構（A・B）の確認と切り合い関係がわかった。そしてそれより50～60cm下段にあって調査地の北半分を占める畑地は、Ⅱ層の堆積がなくⅢ層の上面で遺構の確認ができ、F-8とI-7とで見ると西から東へ緩やかに傾斜していることがわかった。またⅠ層を見てみると、Ⅲ層の上10～15cmの水田敷きと思われる硬い層があり、かつては水田として使用した形跡があり、その開田時においてⅡ層とⅢ層の上部を削平してしまったものと解釈した。更に、調査地の南半分を占める水田は畑地よりも70～80cm下段にあり、開田による削平がかなり進行し、遺構のほとんどが破壊され、自然地形の残る東端部においてもその一部が辛うじて残っていたに過ぎなかった。



第4図 基本層序模式図

第IV章 遺構と遺物

第1節 繩文時代

1 住居址

1号住居址

遺構（第5図） 調査区の西側、A-6・7、B-6・7グリットに位置し、18号住居址に切られる。本址の南から東側にかけてはⅡ層下部での検出がみられ、半分は遺存状況が良いが、北から西側へかけての残り部分には大きな削平が見られ、壁はおろか床面まで破壊されていた。幸うじて検出された柱穴から規模・形状を判断せざるを得なく、それは、直径5.8～6mの円形を呈すると思われる。主軸は炉の位置及び柱穴の配置から推測して、N-7°-Eである。

また内部には、38～41号土壙が重複しているが、出土遺物や検出状況から判断して本住居址出現以前のものと考えられる。

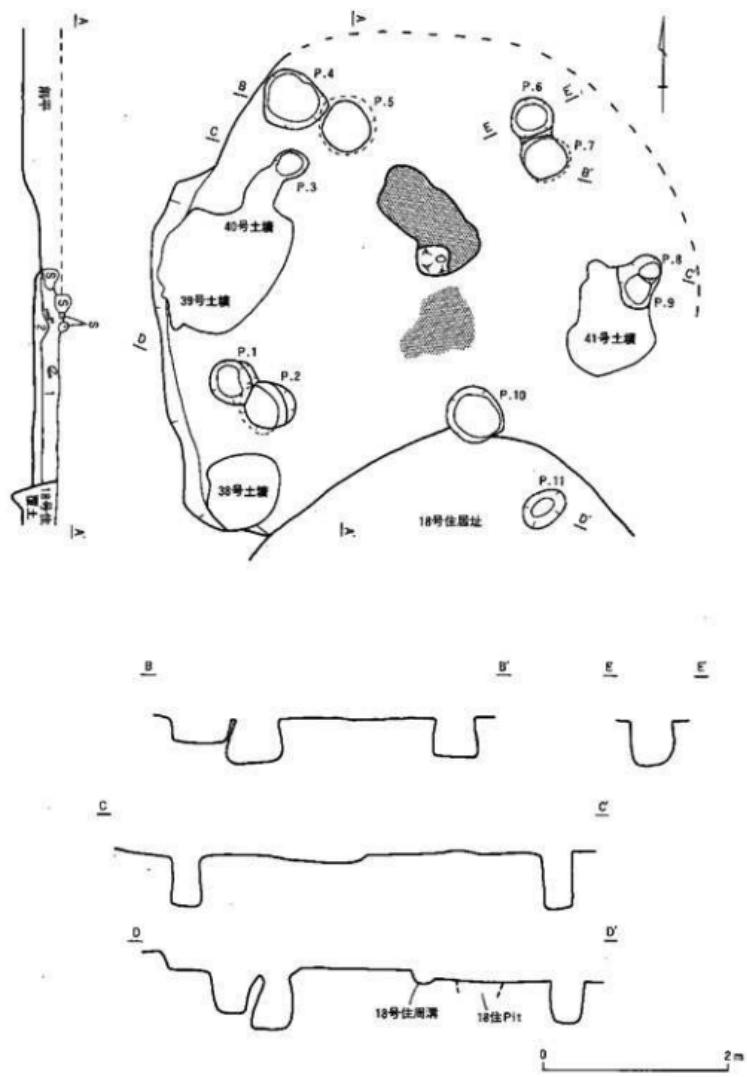
覆土は2分層される。1層は土器片や転石を多く含む暗茶褐色土で炭化物を疎らに含む。2層は個体となる土器を含む茶褐色土である。

壁高は、残りの良い西側で24cmを測り、床面は平坦で敷き締められて良好であり、標高は中央部で714.312mを測る。尚、周溝は認められなかった。

ピットは11穴あり、そのうち柱穴と思われるものはP1(50×50×43cm)・P3(40×32×56cm)・P6(48×44×48cm)・P8(36×24×57cm)・P11(50×38×46cm)の5穴で、2.4m～2.8mの間隔をおいて配置されるが、P1とP11との間は3.6mと他とはなれ、入口部と考えられる。また、このほかにP2(44×50×66cm)・P5(56×52×60cm)・P7(54×48×43cm)・P9(46×34×46cm)がほぼ等間隔に上記の5穴に隣接して配置される。更に、P2・P5・P7に関しては、袋状に掘り込まれている。この4穴も柱穴として捉えるならば、拡張を行ったのか、2軒の住居址の重複が考えられるが、後者を裏付けるものは認められなかった。

炉は、既に破壊されて原型はとどめておらず、中央やや北によりかすかに火床とされる凹地の中に焼土が見られる。そこに隣接し、焼土を伴わない凹みが認められるが、炉石は抜き取られたものかは不明である。

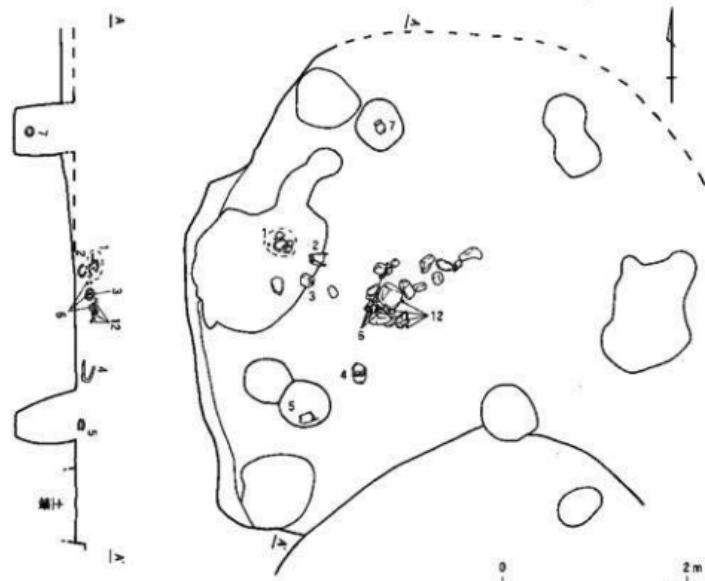
遺物（第7～10図） 土器では、深鉢（1～18）。石器では、石鏃（19）、石匙（20）、石錐（21・22）、横刃型石器（23）の出土がみられる。出土量は、土器片を中心として多く、そのほとんどが覆土中からによるものである。個体として捉えられる土器は、本住居址の中央より西側の床面に近い2層中から出土が集中している（第7図）。また、中央の集石部の下でそれに漬されたかのように、2個体（6・12）が出土しており、P5内部からの出土（7）も認められた。



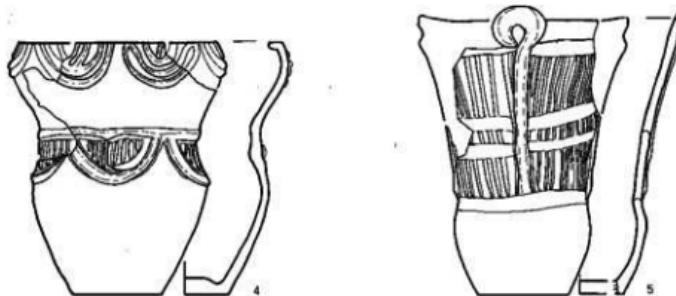
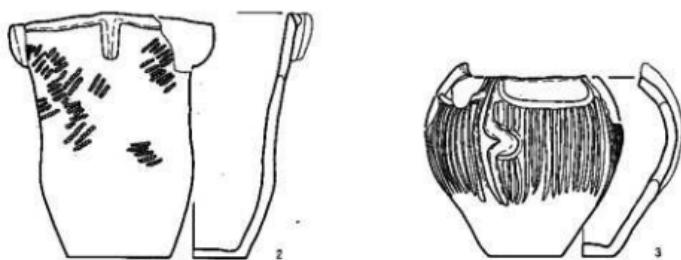
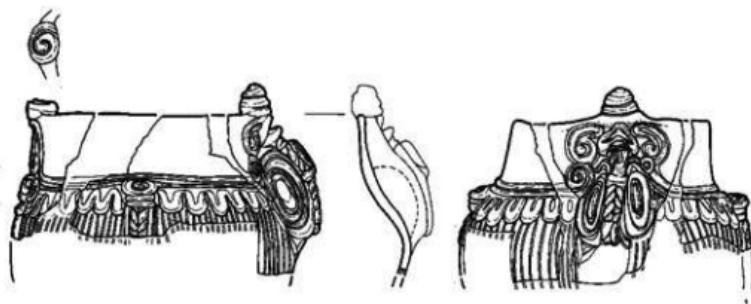
第5図 1号住居址実測図

1は、胴部は球状に膨らみ口縁部はほぼ直に立ち上がる形状を示すが、胴下半部が欠損するため全形はつかめない。文様は、隆線文区画による縱位の平行沈線文を基本とし、隆線装飾による把手を一ヶ所付く。2は、網文を地文とする円筒状のものである。3は、底部から口縁部にかけて括れをもたない樽型で、隆線区画による縱位平行沈線である。また口縁部に一ヶ所隆線が延長して突起となっている。4は、胴中上位で括れるキャリバー型を呈し、口縁部は隆線で連続する重弧文で、胴部も連続する櫛形文である。5は、胴部下位で括れて開く形態を示し隆線区画の縱位平行沈線文が施されて、中央に横位に2本の磨消し沈線が走る。また3と同様に、隆線が一本延長して突起を形成する。6・11・16は、単純ないし、やや波状気味の口縁部を呈するキャリバー型で、隆線による重弧文や交差による貼付文と櫛形文を基本とする。7は、小型の有孔鉢付土器で、穿孔は15である。8は、隆線による重弧文と4单位からなる把手が付く。9は、隆線区画の縱位沈線文と横位波状隆線文を施し、器形は円筒で口縁部はキャリバー型を呈すと思われる。14・17・18は、隆線と沈線による文様構成を行い、器形的には4、11に類似する。15は、口縁部が内湾せずに立ち上がる波状口縁を呈する。また、12・13は、他の出土土器より古い様相であり、混入品と考えられ、特に13は、3号住居址並びに19号住居址からも同一の個体の破片を出土している。

19の石鎚は、半加工品と思われる。20は、やや不整形で刃部は片面調整である。21は、基部・

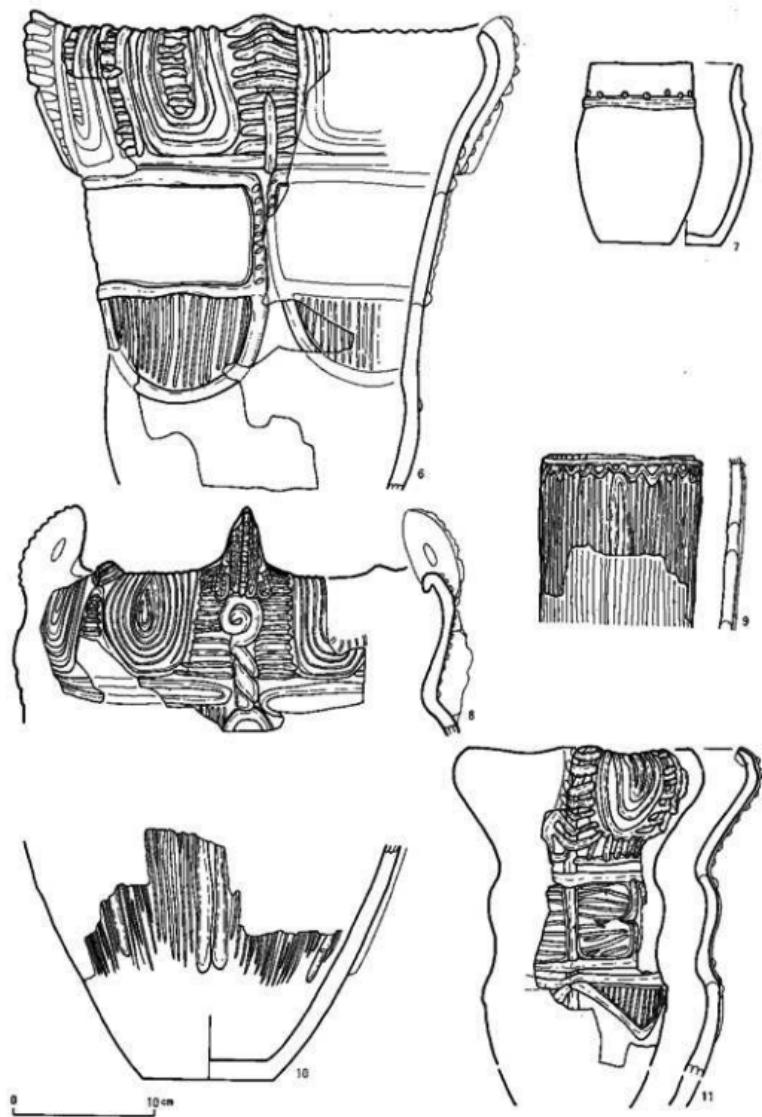


第6図 1号住居址遺物出土状況図

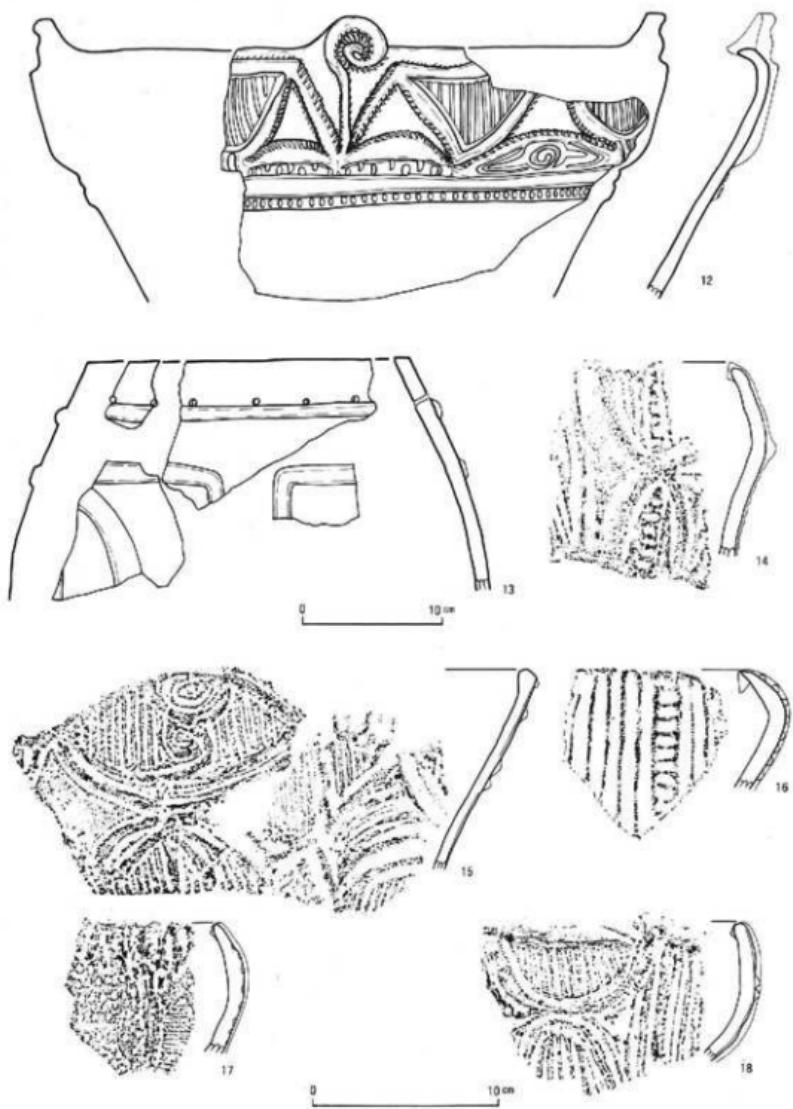


0 10 cm

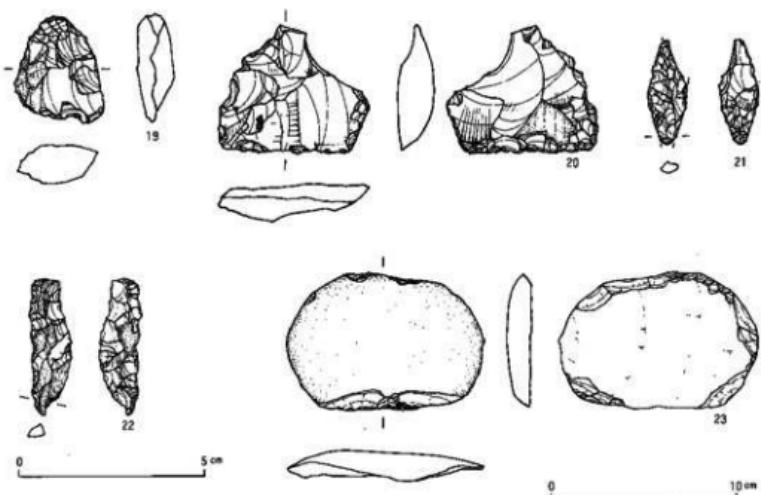
第7図 1号住居址出土遺物実測図1



第8図 1号住居址出土遺物実測図2



第9図 1号住居址出土遺物実測図3



第10図 1号住居址出土遺物実測図4

先端部を共に欠損する。23は、両刃で片面調整によるものである。石質は、19～22が黒曜石、23が砂岩である。

このような出土遺物からみて、土器については「曾利I式」ないし「梨久保B式」と称される一群の特徴を持つもので、縄文時代中期後葉のそれも初段階に位置づけられよう。

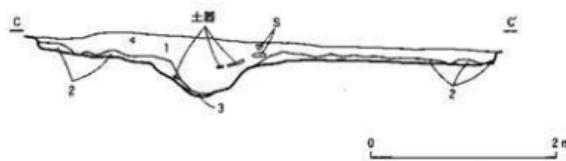
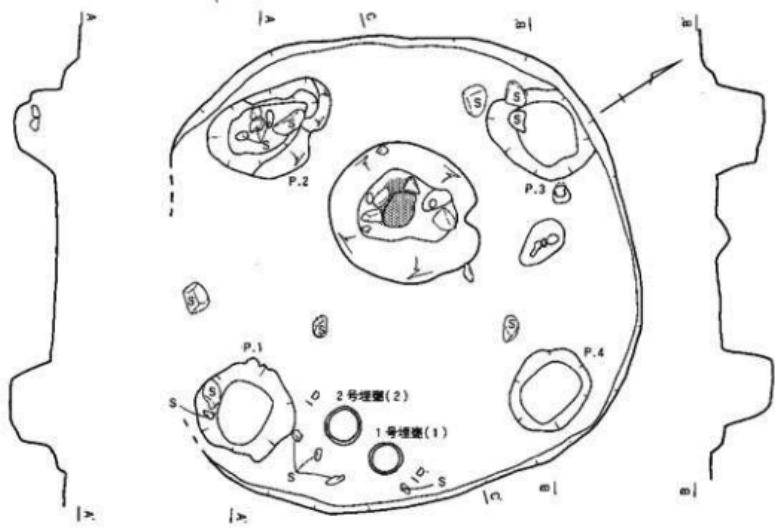
3号住居址

遺構（第11図）調査区の東側F-9・10、G-9・10グリットに位置する。III層確認面が本址の検出面であり、南東部は開田時の削平により破壊を受けている。規模は、直径5.1～5.4mを測り、ほぼ円形を呈する。本住居址の出入口部は、炉・柱穴・煙窓の位置から考えて南東部に当り、主軸はN-58°-Wを示す。

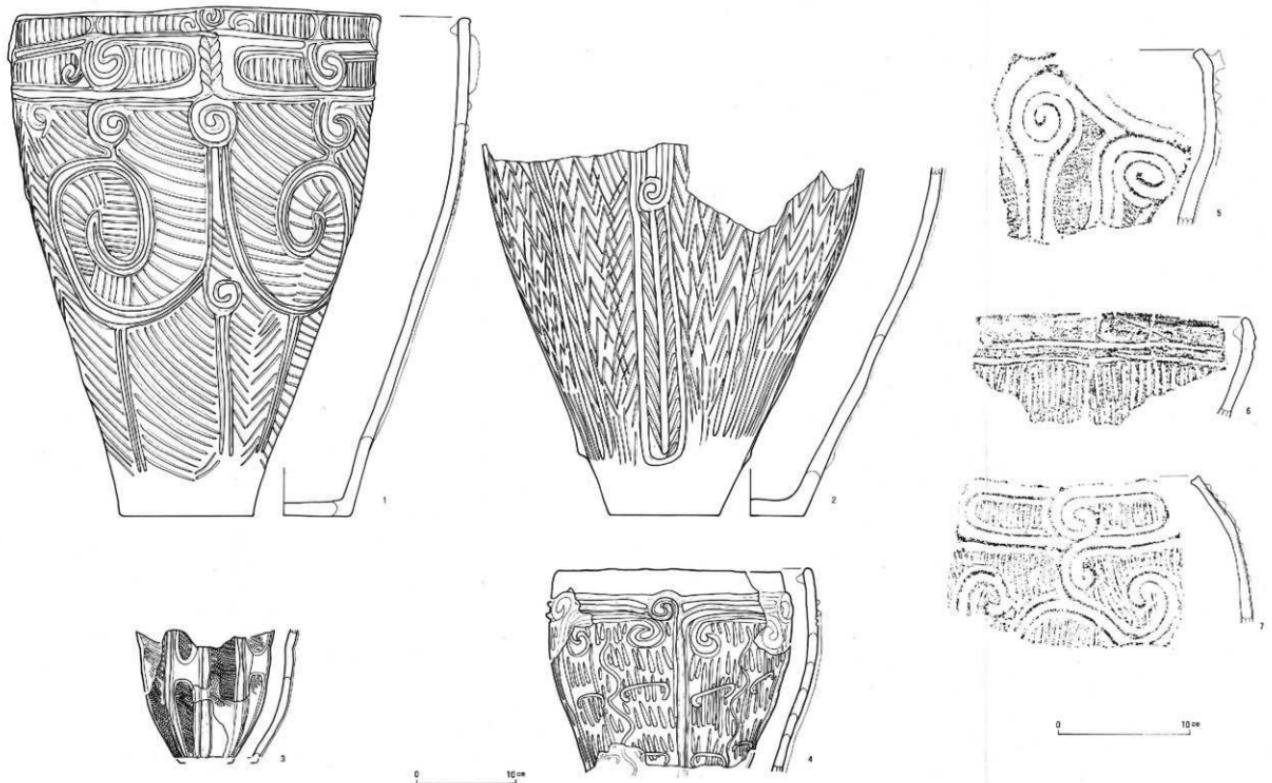
覆土は、3分層された。1層は土器や転石を多く含む暗茶褐色土、2層は茶褐色土で共に粘性、繊りは有る。3層は炉の火焼部で焼土層である。

壁高が10～15cmと浅いのは、上部が削平されたものと思われる。床は、平坦で全域的に敲き締められてしっかりとしている。また、床面には拳大から人頭大の転石が散らばっており、中には火焼状況を示すものも見られた。

柱穴は、P1 (100×100×50cm)・P2 (144×94×48cm)・P3 (122×84×52cm)・P4 (92×



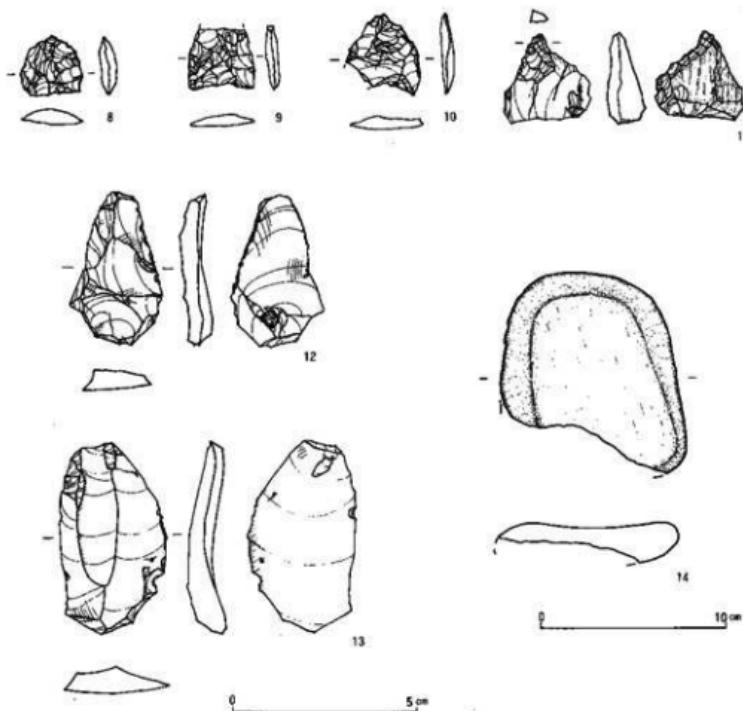
第11圖 3号住居址実測図



第12図 3号住居址出土遺物実測図1

80×55cm) の 4 穴で、形状はほぼ円形で大型である。また、P1・P2内には、転石の混入が認められる。

炉は、住居址の中央よりやや西側に位置する。170×148cm の規模で椭円形を呈し、深さは48cm を測り二段構造で掘鉢状に掘り込まれる。内部からは、火熱を受けて赤色を帯びた人頭大の転石が 4 個落ち込んでいた。恐らく炉を構成していた石と思われる。また、3 個体の土器の混入も認められた。更に壁面の火焼状況を観察してみると、床部に於て火焼状況が認められたが、使用頻度の激しさは感じられなかった。



第13図 3号住居址出土遺物実測図2

施設としては、P1の右側に1・2号の埋甕が正位で埋められており、蓋石は用いられてはいなかった。2号埋甕は、胴部中位より欠損している。内部覆土は1層は縮りがあまりなく明茶褐色土でロームブロックと炭化物を疎に含んでいる。2層は大型のロームブロックで、2号埋甕にのみ認められた。また埋土は、暗茶褐色土で縮りはあまりない（3層）。

遺物（第12・13図）土器は深鉢（1～7）、石器は石礫（8～10）、石錐（11）、ピエスエスキーユ（12）、使用痕のある剥片石器（13）、砥石（14）の出土がみられ、ほとんどが覆土中からに依るものであった。

1は、1号埋甕として用いられていたもので、樽形を呈し隆線による唐草文と斜走沈線文による文様構成をなし、口縁部に区画文帯をもつ。2は、2号埋甕で、胴上位より口縁部にかけて欠損しているものの、1と同様に樽形を呈すると思われる。文様は継位沈線区画で「ハ」の字状の沈線文を区画内に充填する。3は、隆線区画による縄文を地文する小型品である。4は、口縁部に無文帯をもつ樽形で、隆線区画による継位・波状、「C」字・唐草文などの沈線文を充填する。5は、波状口縁を呈する形状で縄文を地文とし、「加曾利E式土器」に近似している。尚、4・5は炉内部より出土している。6は、沈線文を主体としており、樽形を呈するかと思われる。7は1に近似するものである。

石器では、8～10が全て凹基無茎石礫である。11の石錐は、片面調整による先端部の作り出しを行っており、調整には連続性が観察できる。12は両側縁に使用痕と思われる細かな剥離が認められるが、頂・基部は打撃による不規則な剥離痕が認められることからピエスエスキーユとして扱った。13は、剥片の一側縁に使用痕が認められる。14は、中央が緩やかに回み著しく研磨されている砥石で、火熱を受けている。石質は、8～13が黒曜石・14が砂岩である。

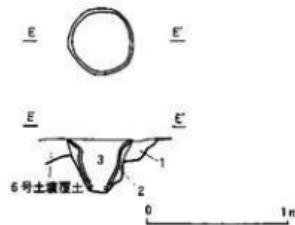
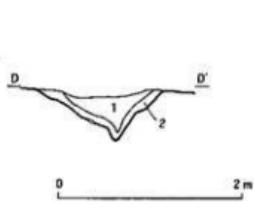
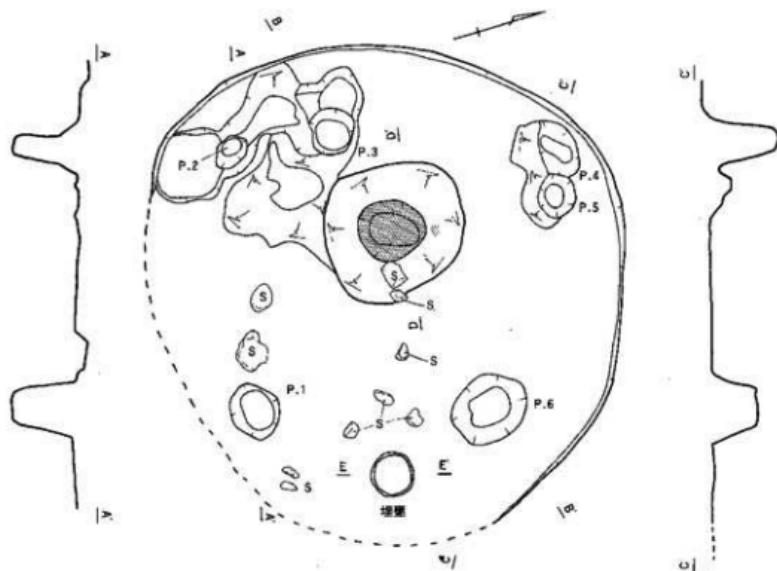
上記の土器を中心とする出土遺物の特徴から、縄文時代中期後葉に位置付けられよう。

4号住居址

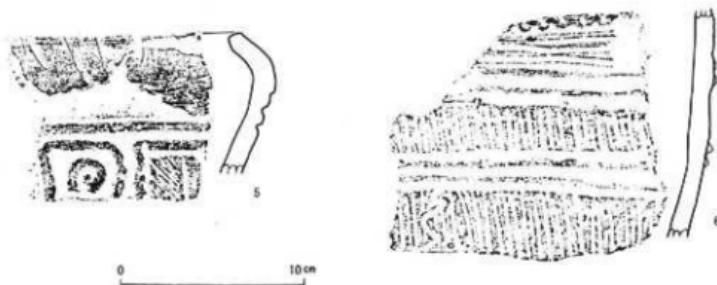
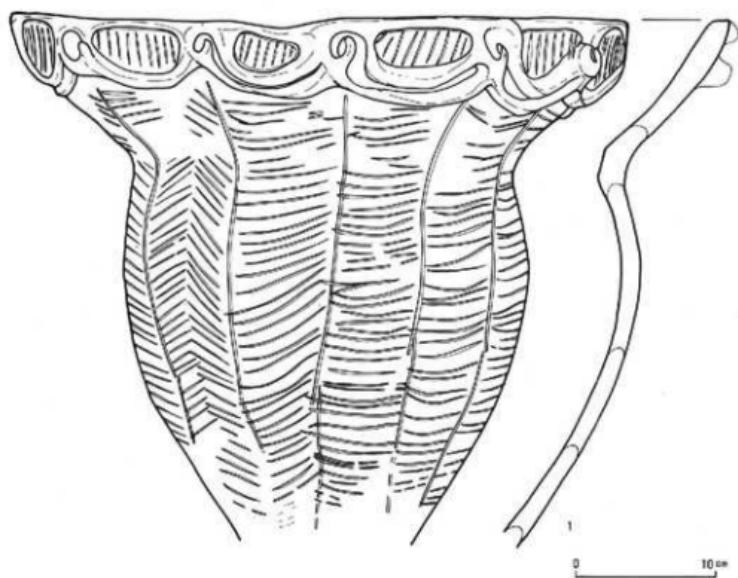
遺構（第14図） 調査区の東側、G-8・9、H-8・9グリットに位置する。本住居址は、遺構上面確認の際に床面の一部が露呈しており、破壊の進行が著しかった。規模は直径5.5mで、円形を呈する形状である。P1とP6のほぼ中間点に埋甕が設けられ、これを出入口とし柱穴の配置と炉の位置から考えて、主軸はN-74°-Wを示す。

覆土は、上記のような確認状況のため、分層は出来なかった。しかし、暗茶褐色土が床面直上にかすかに残っていた。

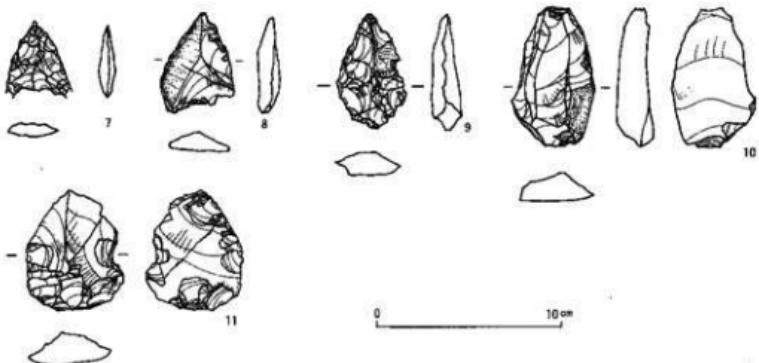
床は、全体的に硬く敲き締められているものの、P2・P3周辺部は硬い床がなく不整形な落込みがみられた。また、上部の削平が著しいため、壁の立ち上がりは3～5cmと僅かであり全体の3分の2が確認出来ただけで、南東部は硬い床の広がる範囲でプランを断定した。



第14圖 4號住居址實測圖



第15図 4号住居址出土遺物実測図1



第16図 4号住居址出土遺物実測図2

柱穴は、P1 ($62 \times 56 \times 65\text{cm}$)、P2 ($40 \times 28 \times 70\text{cm}$)、P5 ($44 \times 42 \times 61\text{cm}$)、P6 ($81 \times 72 \times 48\text{cm}$)の4穴で形状は円形であるが、大きさにばらつきがみられる。P5に隣接するP4 ($68 \times 40 \times 74\text{cm}$)も底面が敵き締められて、柱穴としての可能性が高く、柱の建て替えがあったとの考え方もできよう。P3 ($52 \times 50 \times 45\text{cm}$)は、規模形状共他の柱穴と類似するが、底面の敵きの状況が認められなかった。

炉は、出入口に対し、中央よりやや奥まった所に位置している。 $164 \times 150\text{cm}$ の規模で円形を呈し、深さは 53cm を測る。掘り込みは、二段構造で摺鉢状を呈しており、使用時は石組炉であつたと思われるが、炉石は抜き取られてその残骸の一部が内部に認められる。覆土は2分層され、1層は炭化物と焼土ブロックを疎らに含み、締りはあまりない。2層はローム粒子と焼土を含む明茶褐色土で、1層より締りは強い。また使用状況を観察すると、二段構造となっている掘り込みの下段部が火焼部であり、3号住居址と比べると火焼状況は著しい。

施設としてはP1とP6の中間点に埋甕が設けられている。土器は正位で埋められて、底部は欠損する。また、蓋石はなかった。暗茶褐色土（1層）とローム粒子を多く含む茶褐色土（2層）の2層を埋上とし、共に締りは強かった。覆土は、締りのあまりない明茶褐色土の単層であった。

遺物（第15・16図） 土器は深鉢（1～6）、石器は石錐（7～9）とビエスエスキーユ（10・11）の出土がみられ、出土量は少なかった。

1は、埋甕として埋設されていた大型の深鉢で、キャリバー型を呈して胸部は膨らむ。口縁部は陰線による文様区画を行い、胸部は縦位沈線区画した中を横位ないし「ハ」の字状に沈線を充填する。2・3も1と近似性があるものである。4は、樽形を呈する唐草文系の土器であ

る。5は、口縁部が無文帯を有し、陸線区画による沈線と唐草文を施す。6は蛇行懸垂文と横位・綴位の沈線文を施すものである。尚、2は炉、5はP4より出土している。

石器をみると、石鏃が3点出土しており、7と8は凹基無茎石鏃で9は凸基無茎石鏃である。また8は、加工中のものと考えられる。10は、使用痕と思われる細かな剥離が認められる。11は、一部に調整がみられる。石質はすべて黒曜石である。

上記の出土遺物から本住居址は、绳文時代中期後葉に位置づけられよう。

5号住居址

造構（第17図） 調査区の中央、D-9、E-9、F-9グリットに位置する。規模は、直径4.7mで円形を呈すると考えられるが、東側は9、10号土壙に切られ、南側は削平により破壊を受けており、正確な規模・形状は不明である。出入口は、P1とP5の中間点の壁際に設けられている埋甕の位置にあたり、これと柱穴の配置と炉の位置から考えて、主軸はN-42°-Wを示す。

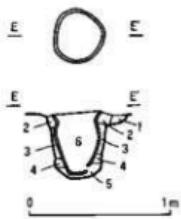
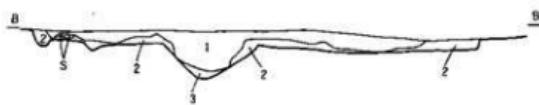
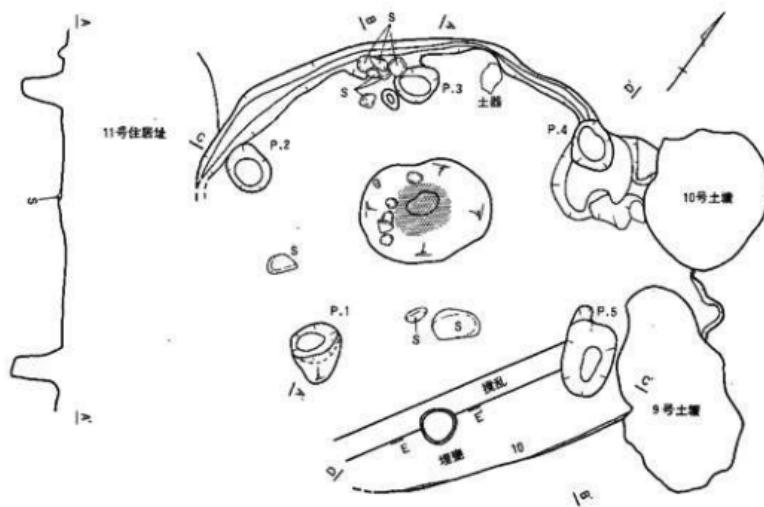
覆土は、上部の削平が進んでいるものの3分層された。1層は、炭化物を疎らに含み土器片を多く含む暗茶褐色土で、2層は、ローム粒子と土器片を多く含む明茶褐色土で、共に粘性・締りはやや認められた。3層は、炉の最下部にみられる焼土層である。

床は、埋甕から炉にかけての前部はやや軟弱であり、炉の後部は硬く敲き締められていた。また、P5から埋甕にかけて耕作による搅乱が走り、床と埋甕の一部を破壊している。壁高は、5~14cmと浅く、上部の削平が著しかったことがわかる。また、P2からP4にかけて壁下に周溝が設けられているものの、入口部の壁下にはそれが認められなかった。尚、床直上には拳大から人頭大の転石が疎らに出土しているが、特にP3付近の壁下に6個も転石がまとまっているのは、流れ込みの可能性が高いものと思われる。尚、床面中央部での標高は714.64mである。

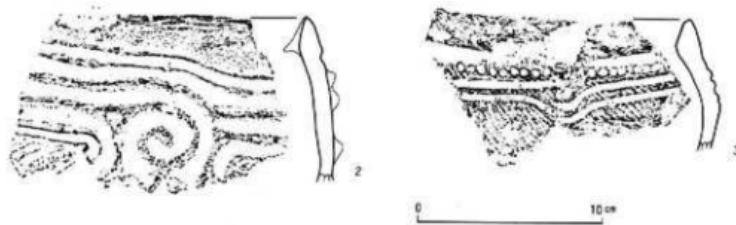
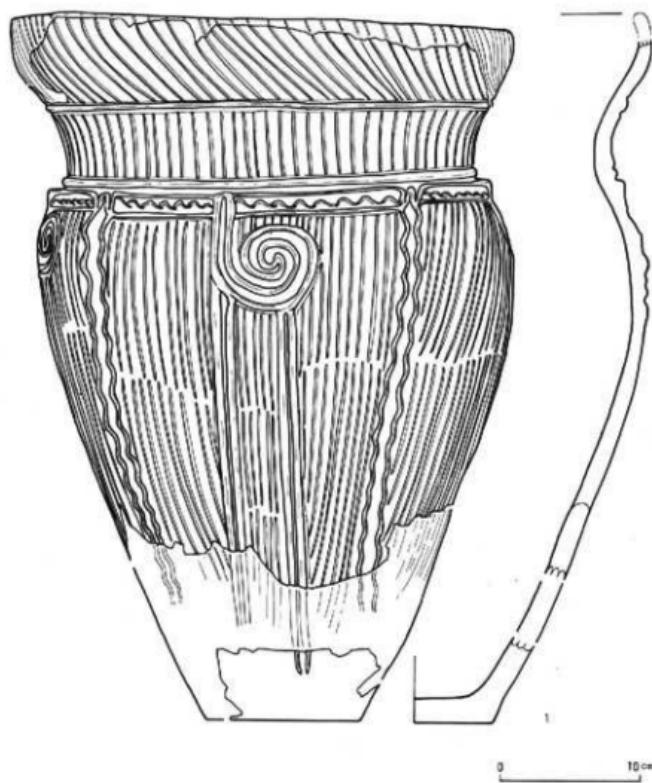
柱穴は、P1(53×34×46cm)・P2(52×43×53cm)・P3(50×38×46cm)・P4(56×46×45cm)・P5(79×53×60cm)の5穴による配列で、プランは梢円形に近い円形である。

炉は、出入口に対して中央部よりやや奥まった所に位置している。長径143cm・短径103cmの規模で梢円形を呈し、深さは46cmで摺鉢状に掘り込まれる。主軸方向に対して梢円形の炉の長径が垂直に交わって配置されている。また使用時は、石組炉であったと考えられるが、炉石は既に抜き取られており、炉と埋甕の間で火熱を受けた転石はその一つであると推定する。

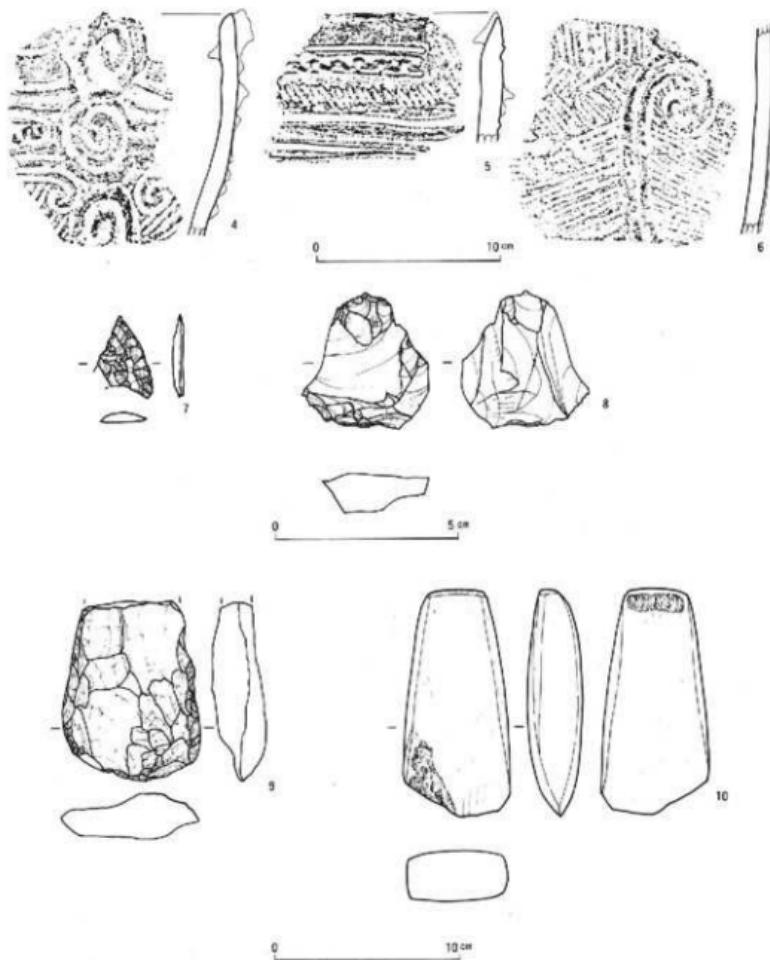
施設としては埋甕が設けられ、口縁部と肩下部が欠損しているものの、ほぼ完形に近く、正位に埋められていた。埋土は5分層される。1層は茶褐色土で締りはない。2層は暗茶褐色土で締りはややある。3層も暗茶褐色土であるが2層よりも締りはない。4層は茶褐色土で締りはない。5層は暗茶褐色土で3層に近い。また内部覆土は、明茶褐色土でローム粒子を多く含み締りはあまりない（6層）。



第17図 5号住居址実測図



第18図 5号住居址出土遺物実測図1



第19図 5号住居址出土遺物実測図2

遺物（第18・19図） 土器は、深鉢（1～6）、石器は、石鎚（7）、ビエスエスキーユ（8）、打製石斧（9）、磨製石斧（10）の出土がみられた。また、出土量は多かったものの大部分は覆土中からであった。

1は、埋甕として埋設されていた土器で、口縁部と胴下半部が欠損するものの、ほぼ完形に

近い。緩やかに括れる頸部から内湾ぎみに口縁部が立ち上がり、胴部はやや肩が張る形態である。文様は、口縁部と頸部が隆線で区切られて、前者は斜位に後者は継位に沈線を施し、胴部は、継位に2本の蛇行隆線文と唐草文から垂下する2本の隆線文とに区画された中を、継位沈線文で2~3段に分けて充填する。2・4~6は、樽形で唐草文を施すものである。3は、地文に網文を施し、横位に列点文と沈線文が施してある。

7は、圓基無墓石鐵の欠損品である。8のピエスエスキューは、頂・基部共片面からの打撃によるものである。9の打製石斧は擬形に属し、中央より欠損する、10は、定角式磨製石斧で刃部に一次調整痕が残るが、丁寧に磨かれている。また10は、床面直上より出土している。石質は、7・8が黒曜石、9が粘板岩、10がチャートである。

上記の出土遺物を概観して、縄文時代中期後葉に位置づけられよう。

6号住居址

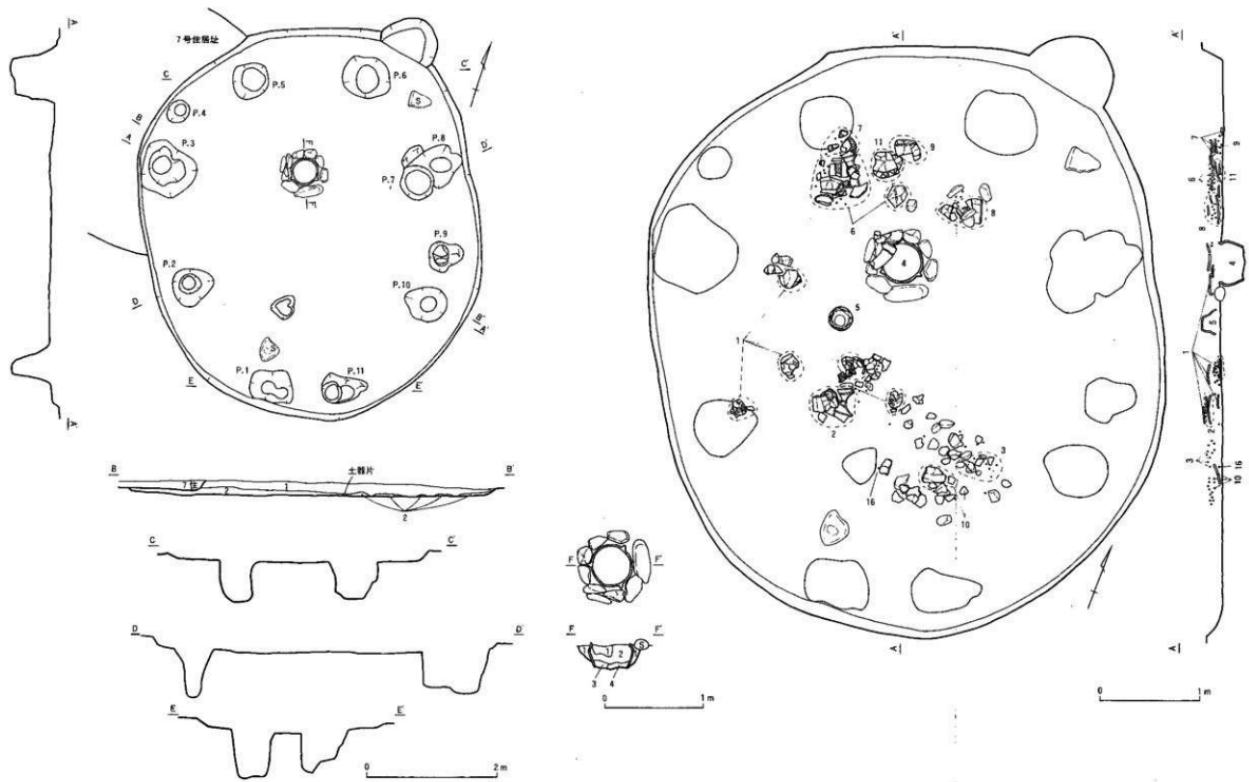
遺構（第20図） 調査区の東側、H-6~8、I-6~8グリットに位置する。III層確認面が本住居址の検出面であり、他の住居址と同様に上部の削平が考えられる。長軸5.9m・短軸5.1mの規模で、楕円形を呈しており、7号住居址によって切られてはいるものの、床まで破壊されておらず、全形を確認できた。出入口は、炉と柱穴の配置から考えて、P1・P11付近がそれに当たると思われ主軸は、N-17°-Wを示す。

覆土は、2分層された。1層は暗茶褐色土で、粘性・縮りはある。2層も暗茶褐色土で、粘性はややあるが縮りは1層と比べるとなく、ローム粒子を多く含む。また、1・2層とも、土器を中心とする遺物を多く含んでいる。

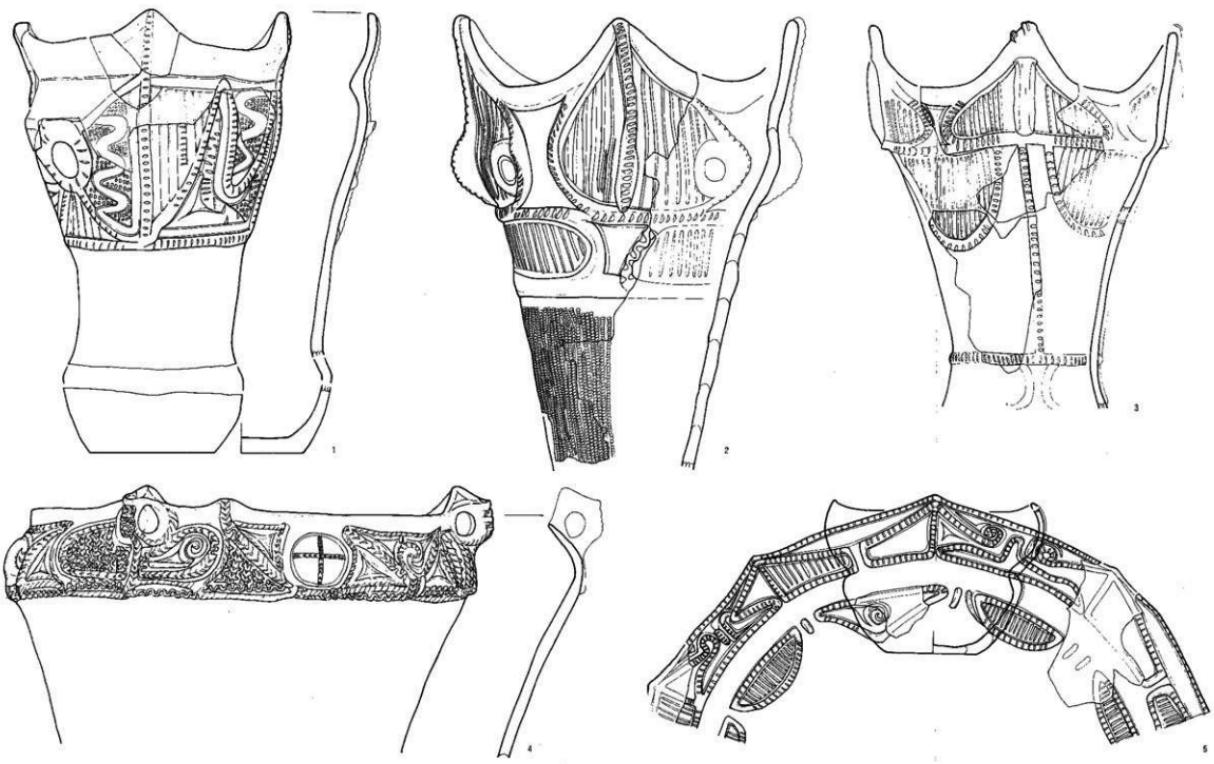
床は、全体的に敲きしめによる硬さは認められなかった。壁高については、平均して10cmと浅かった。また、周溝は認められなかった。床面の標高は、中央部で713.69mを測った。

柱穴は、P1(68×41×102cm)・P2(64×58×74cm)・P3(82×76×66cm)・P5(60×54×62cm)・P6(76×66×63cm)・P7(54×53×70cm)・P10(65×53×84cm)・P11(72×38×91cm)の8穴で円形を呈し、P1とP11を除いて1.8~2.0mの間隔で配置されている。他にP8(64×44×83cm)・P4(36×32×23cm)・P9(52×46×21cm)のピットを検出している。P8は、上記の8穴と同じく柱穴としての可能性が大きく、P7からP8への柱根の移動が考えられる。またこれと同様に、P3もプランこそつかめなかったが、底面からみて柱根の移動を思われる形状を示している。更に、P1・P11についても同じことが言える。

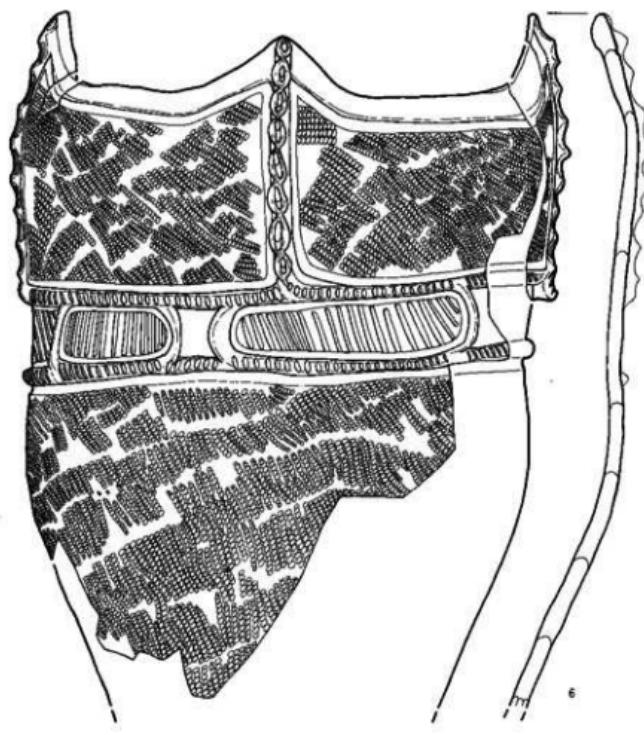
炉は、出入口に対して中央よりやや奥に位置しており、石囲みによる埋甕炉である。直径62cmの円形で深さ23cmに掘り込まれ、胴中央部より下半部を故意に欠いたと思われる大型の深鉢を埋め込み、拳大よりやや大きめの自然石9個で囲み固定している。炉内部の火焼状況を観察すると、土器は火焼による破損はほとんど受けておらず、また底面にも火焼状況を示さず焼痕



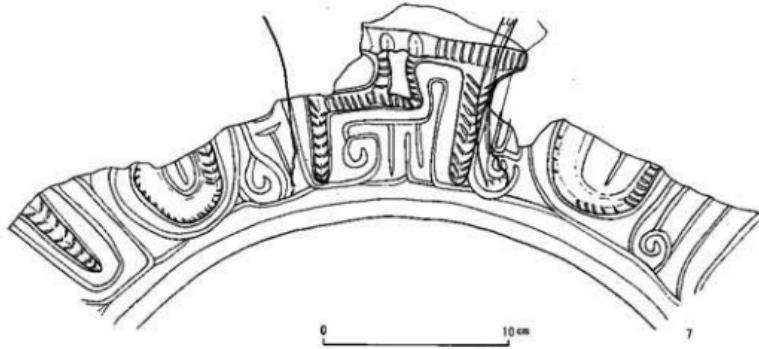
第20圖 6号居住址実測図・遺物出土状況図



第21图 6号住居址出土遗物实测图1

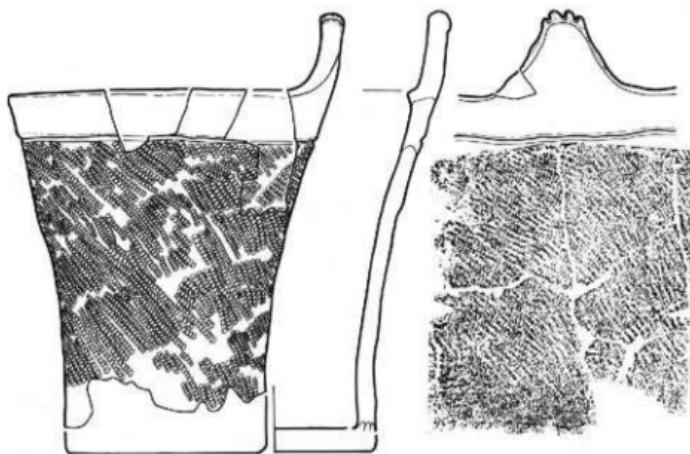


6

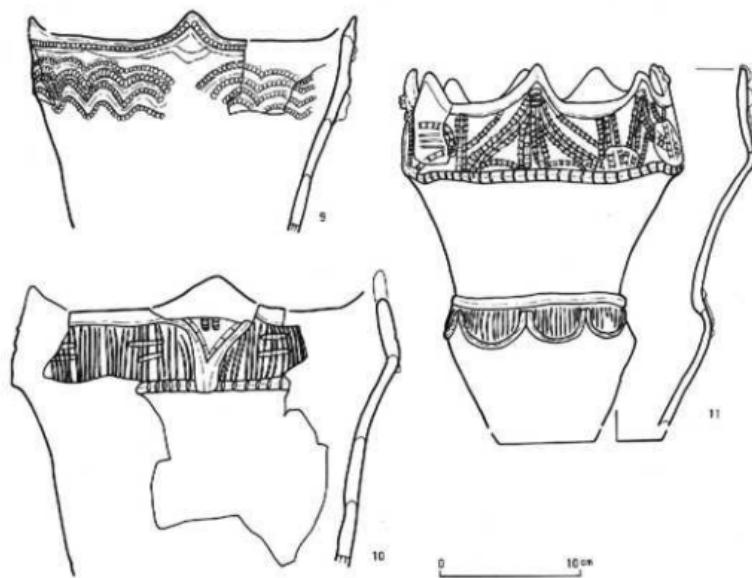


7

第22圖 6號住居址出土遺物實測圖2



8

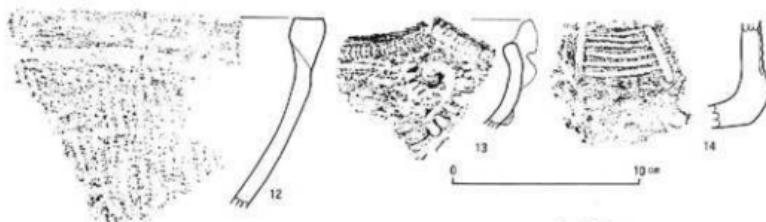


10

11

0 10 cm

第23図 6号住居址出土遺物実測図3

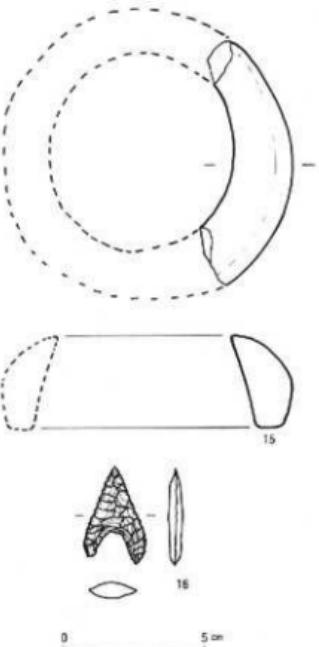


も認められなかった。埋土は、単層で焼土や炭化物を疎らに含む黄褐色土であり、締り・粘性はやや認められる（1層）。更に炉内部の覆土は4分層される。1層は暗茶褐色土で炭化物を疎らに含む。2層は茶褐色土で炭化物を疎らに含む。3層は茶褐色土でローム粒子を多く含む。4層は黄褐色土でほとんどロームに近い。また4層を除いて、締りは余り認められなかった。

遺物（第21～24図） 土器は深鉢（1～14）が、石器は石鏃（16）が出土しており、他に環状の土製品（15）の出土がみられた。覆土は浅いものの比較的土器の出土量は多く、特に床面から10cm前後の間にかなりまとまっており、個体として捉えられるものが多かった（第20図右）。

1は、やや内湾ぎみの波状口縁を呈し、胴下半部で括れてフラスコ状に膨らむ形状を示す。文様は刻み隆線で縦位に4区分され、隆線を中心には沈線・列点文で構成される。2は、大振り

な波状口縁で、ラッパ状に立ち上がる。刻み隆線で文様区画されて沈線を充填し、胴中位より縄文が施される。3も2と同じ形態をし、横彫文が連続して施される。4は、口縁部が「く」の字状に大きく内湾するキャリバー形で3単位取り付けられ、把手によって縦位に文様区分される。そして、刻み隆線を中心に文様構成される。埋甕炉として用いられていたものである。5は、波状口縁でキャリバー状の器形を呈し、刻み隆線での文様構成を行い、横彫文を有する。6は、やや内湾ぎみの波状口縁を呈し、地文に縄文を施し縦位鎖状隆線により4区分され、横円文を有する。7は、胴下半部で膨らみキャリバー形を呈する器形と考えられるもので、刻み



第24図 6号住居址出土遺物実測図4

隆線と沈線による文様構成をなしている。8は、緩やかにラッパ状に立ち上がる形態をし、突起を1単位有する。文様は縄文を地文としている。9は、頸部で僅かに括れて立ち上がる波状口縁を呈し、横位に弧状列点文を施すもので、薄手の土器である。10は、ほぼ9と同じ器形をし、縦位に沈線を施す。11は、8・9と同じで口縁形態をするものの、8単位からなる波状口縁を呈し、胴部は括れて下半部が膨らむ。文様は、口縁部が半截竹管状工具による押し引き文で、胴下部は連続する櫛形文である。

15の土製品は、約3分の1のみ残存するが恐らく環状を呈するものと思われる。16は、凹基無墓石縁で丁寧に作出されている。石質は頁岩で、6の土器内部より出土している。

尚、出土土器を概観して、埋甕炉として使用されていた6とその他の出土土器との間に時期差の可能性を指摘できようが、縄文時代中期中葉のそれも新しい段階のものとして捉えておく。

8号住居址

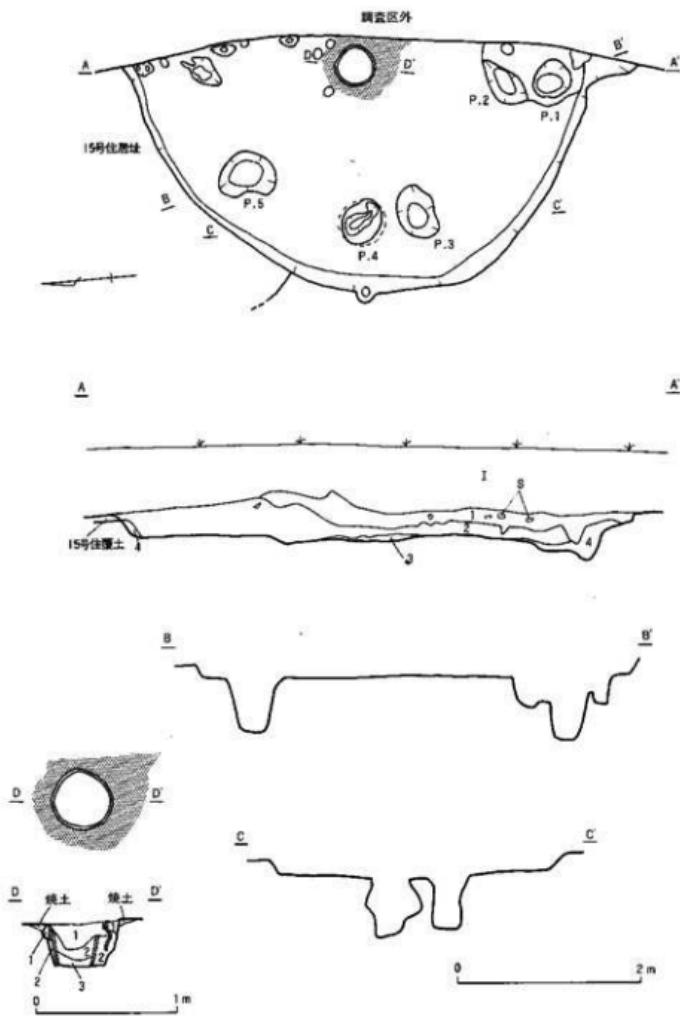
遺構（第25図） 調査区の末端I-5・6グリットに位置するが、本住居址が調査区外との境界線に位置すため、約5割の調査であった。そのため、正確な規模・形状は不明であるが直径5m前後の円形を呈するものと思われる。また、隣接する15号住居址を切っている。

覆土は、3分層された。1層は、土器及び転石を多く含む暗茶褐色土。2層は、ローム粒子を疎らに含み、土器を多く含む暗茶褐色土。3層は、焼土を多く含む赤褐色土。4層は、ローム粒子を多く含む明茶褐色土で、全体的に締りは強いが粘性はあまりない。

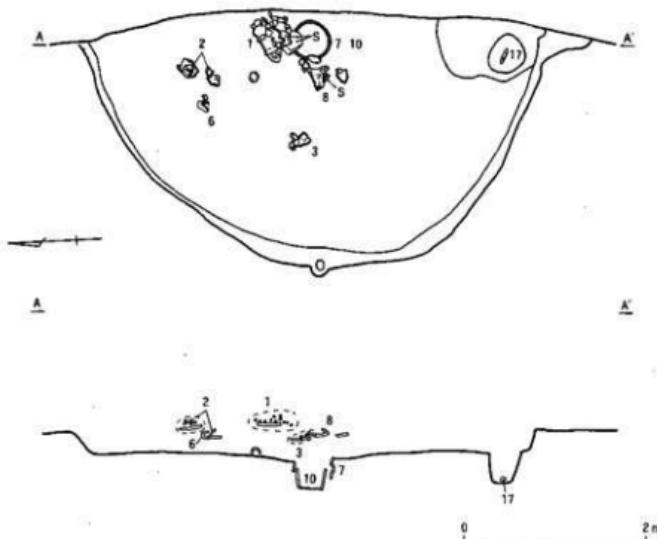
床は、全体的に硬さがみられたが、炉周辺部はやや軟弱であった。壁高は、15~20cmと平均してはいるものの、他の住居址と同様に上部の削平が考えられるため、築造当時の壁高とは言えない。また、ほぼ中央部の床面で、標高713.56mであった。

柱穴は、P1(40×38×68cm)・P3(64×38×46cm)・P5(60×42×60cm)の3穴が確認され、ほぼ円形を呈し約2.0m間隔で配置される。また、その他にP2(64×32×33cm)とP4(48×40×61cm)のピットを検出したが、特にP4は袋状に掘り込まれるもの、柱穴としての可能性がある。

炉は、土器を埋め込んで使用した埋甕炉であり、住居址のはば中央部に位置する。直径50cm、深さ32cmを掘り込み、口縁部と底部を欠いた深鉢を2個体を重ねて埋め込んで炉を作り出している。使用状態をみると、土器を囲んだ床面がかなり火焼を受けて赤褐色に変色をしている（スクリーントーン表示）。また、土器の内面も火焼により表面が剥げ落ちており、かなり脆い状態であった。これらの状況から判断して、使用頻度の激しさと使用期間の長さを指摘できよう。土器の埋土は、2分層できた。1層は、炭化物と焼土を多く含む茶褐色土で、2層は、ローム粒子を多く含み、焼土を疎らに含む黄褐色土である。共に締りは強かった。覆土は、3分層され、1層は、炭化物と焼土を多く含む黒褐色土で締りはあまりなかった。2層は、ローム粒子



第25図 8号住居址実測図

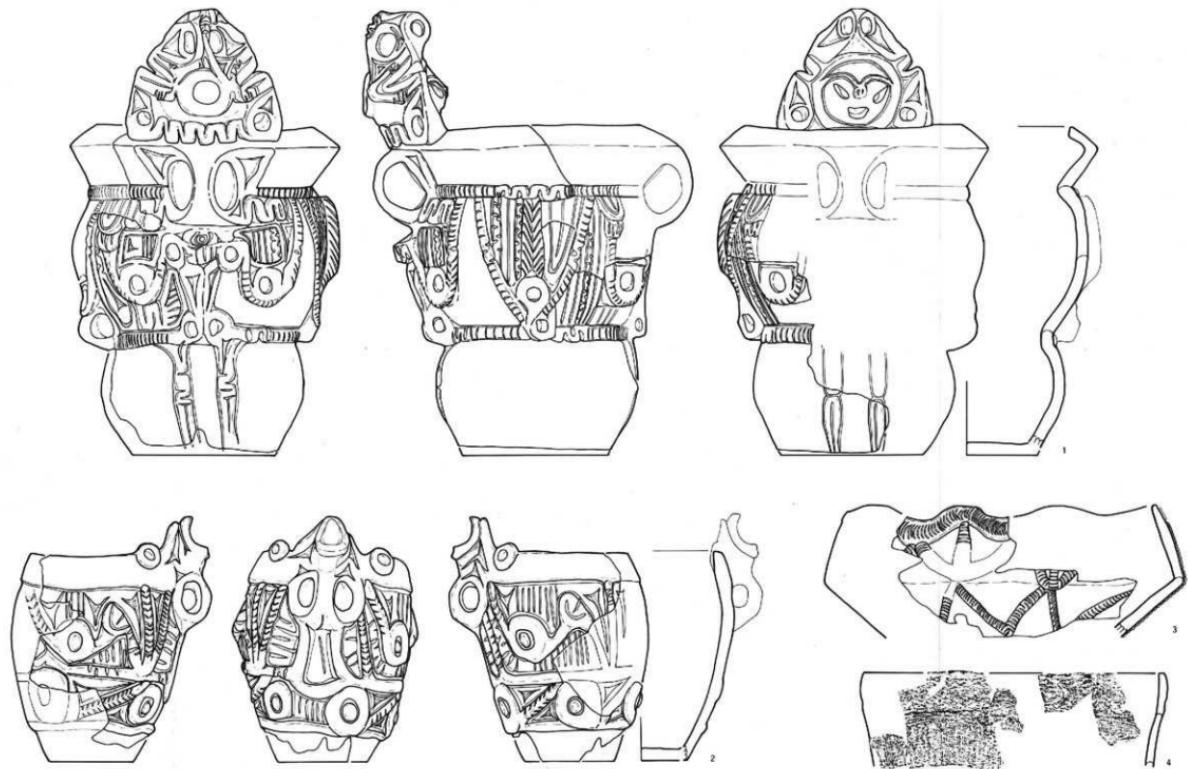


第26図 8号住居址遺物出土状況図

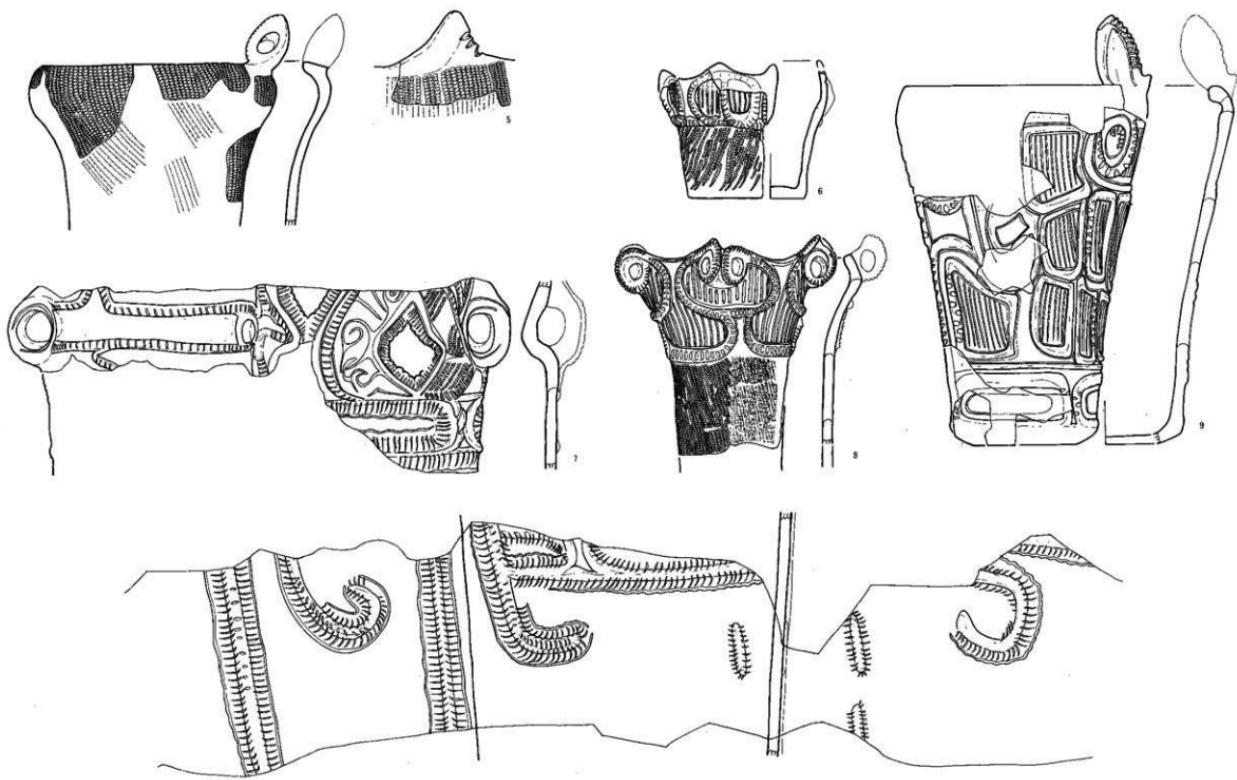
を多く含み、炭化物を疎らに含む暗茶褐色土である。3層は、粘性・締りとも強い黄褐色土で、ロームに近い土質であった。

遺物（第26～29図） 土器は深鉢（1～13）、石器は打製石斧（14）・磨製石斧（15～18）が出土している。出土量は、土器片を中心として多かったが、そのほとんどが覆土中からであった。個体となる土器の出土状況を見ると、炉の土器以外のものはすべて覆土中からであり、床面から20～30cm上に集中し、特に顔面把手付土器（1）は床面から35～40cmの間で出土している（第26図）。

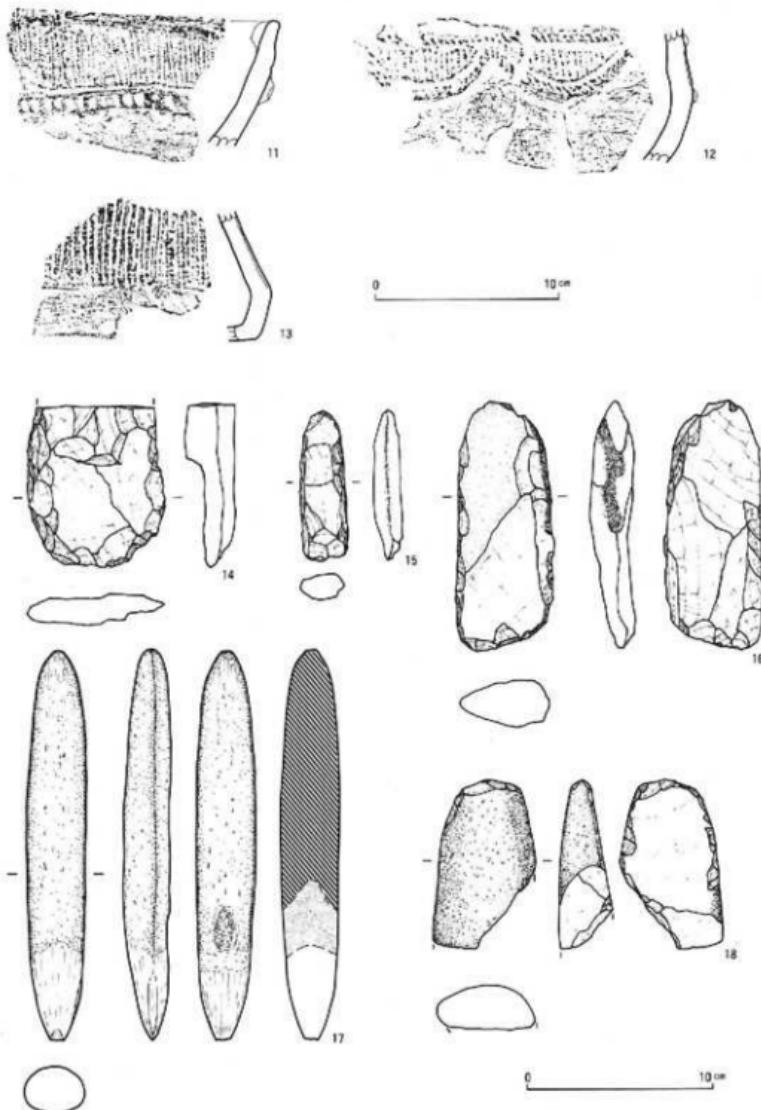
1の顔面把手付土器は、前方部と右側の一部を除いて、把手から底部までのほぼ完形に近い状態で出土している。口縁部は、「く」の字に曲がり頸部で括れ、胴中位は球状に膨らみ、下部でまた括れて膨らむ器形である。文様は、立体的な突起を中心に隆線及び沈線で構成され、装飾性に富んでいる。また、顔面把手の他、頸部に前方後方の2ヶ所に把手が付く。2は、樽形を呈し、1と同様に立体的な突起を中心に、隆線及び沈線で文様構成される。3は、緩やかな波状口縁を呈し、内側へ「く」の字状に屈曲するが全形は不明である。文様は、口縁部から頸部にかけて幅広の粘土紐を網目に貼り付け、幅広の爪形文を施す。4は、半截竹管状工具による縦位の平行沈線を施されたもので、「平出III A土器」の特徴を有する。5は、キャリバー形



第27图 8号住居址出土遗物素描图1



第28图 8号住居址出土遗物实测图2



第29図 8号住居址出土遺物実測図3

を呈し、器面は縄文で充填するもので、口縁部に1単位突起を有する。6は、波状口縁でキャリバー形を呈する小型品で、刻み隆線による区画文と地文に縄文を充填している。7は、埋甕炉として使用されていた外側の土器で、器形は不明であるが対象する2単位の把手を有する。文様は、爪形隆線文でおもに文様構成がなされ、地文に縄文を残し連続爪形文で区画文を形成する。8は、波状口縁でキャリバー形を呈し、4単位の把手と刻み隆線による区画文・縄文の文様構成を行っている。9は、キャリバー形を呈し、口縁部に1単位の突起を有するもので、隆線区画の縦線沈線文と立体的な円形文で構成される。10は、埋甕炉として使用されていた内側の土器で、胴部のみである。文様は、連続する爪形文が隆線わきに密に施され、山椒魚文と呼ばれる抽象文を構成している。その他、沈線文を主体とするもの(11・13)や、連続する櫛形文を有するもの(12)も見られる。

14は、撥形を呈する打製石斧で欠損品である。15・16・18は、乳棒状磨製石斧に属するもので、調整痕と思われる細かな打痕が側縁部を中心に認められる。17も、乳棒状磨製石斧に属するものと思われるが、槍先上に作出されて、刃部は鋭く研磨される。また、火焼を受けた形跡があり(斜線)、炭化物の付着も認められる(網点)。石質は、14が砂岩で15~18は緑泥岩。

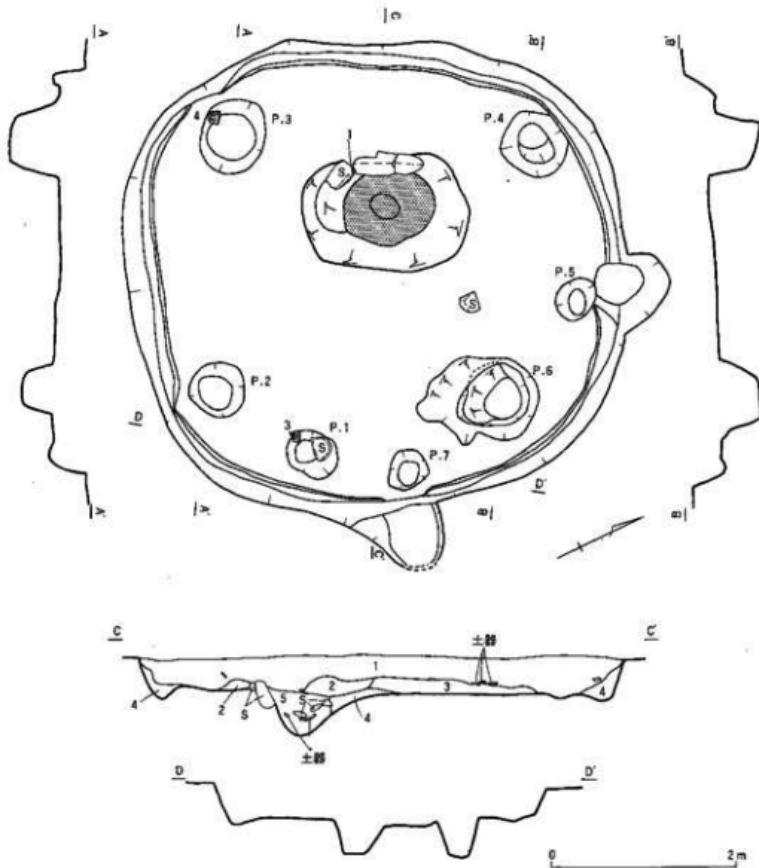
本住居址も6号住居址と同様に、炉址に使用されていた土器(7・10)とその出土土器、特に1の顔面把手付土器との時間的差異を感じられる。完掘できなかつたことで、他の遺構との重複はつきり確認できなかつた。よって本住居址は、縄文時代中期中葉に位置づけられようが、それも時間的幅があることを指摘しておこう。

10号住居址

遺構(第30図) 調査区のほぼ中央部、D-6・7、E-6・7グリットに位置し、Ⅲ層確認面が本住居址の検出面である。直径5~6mの規模で、円形を呈するものとして捕らえるが、やや隅丸方形に近い形状を示している。プランや柱穴の配置、炉の位置などから推測して、出入口はP1・P7付近の壁際と考えられよう。よって主軸は、N-58°Wを示す。

覆土は、深さもあり炉址まで含めて5分層された。1層は、暗茶褐色土で土器片を多く含み、炭化物を疎らに含む。2層は、暗茶褐色土で炭化物を含むが、1層と比べて締りに欠ける。3層は、暗茶褐色土で土器片とローム粒子を多く含む。4層は、やや暗い黄褐色土で、ローム粒子を多く含み、炉内部と壁際にもみられた。5層は、暗茶褐色土で炭化物を多く、また焼土も疎らに含み、焼けた転石と土器片を含む、炉址の覆土である。

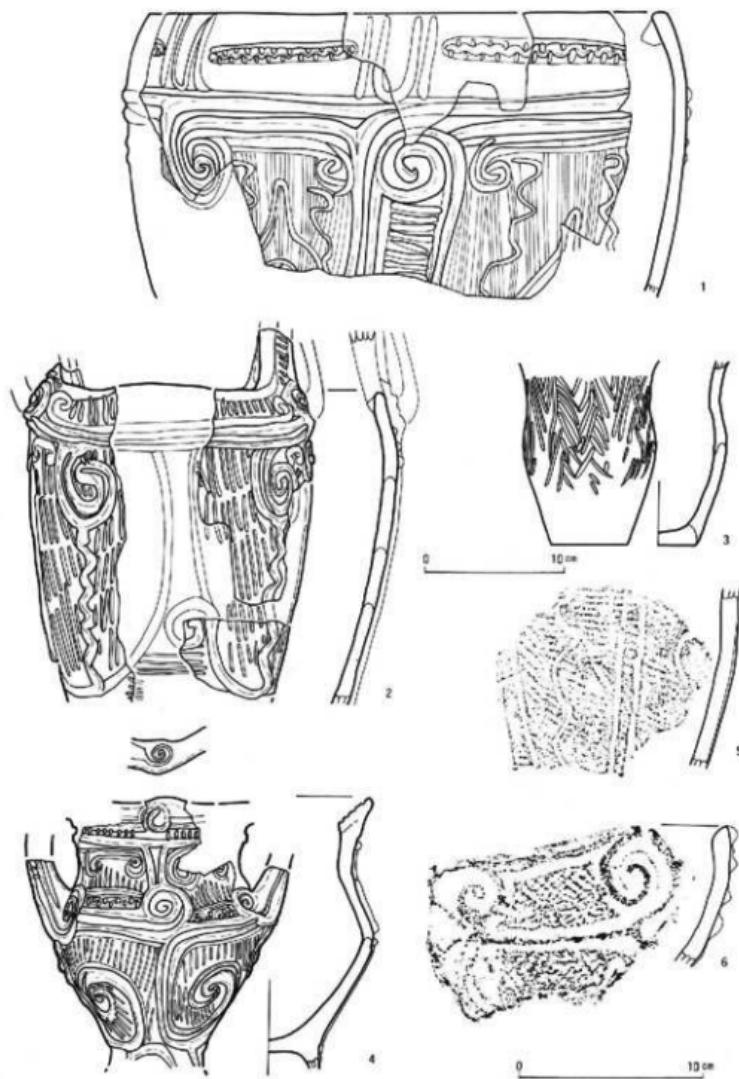
床は、全体的に硬く敲き締められていたが、P6付近がやや軟弱であった。壁高は、30~35cmと他の住居址よりも深かったが、調査区そのものが全体的に削平されていることを考慮すれば、更に深いのであろう。また、壁下に周溝がP7・P3・P5際で一部途切れているものの、ほぼ一周するように巡らされている。尚、床面中央部での標高は、713.78mを測る。



第30図 10号住居址実測図

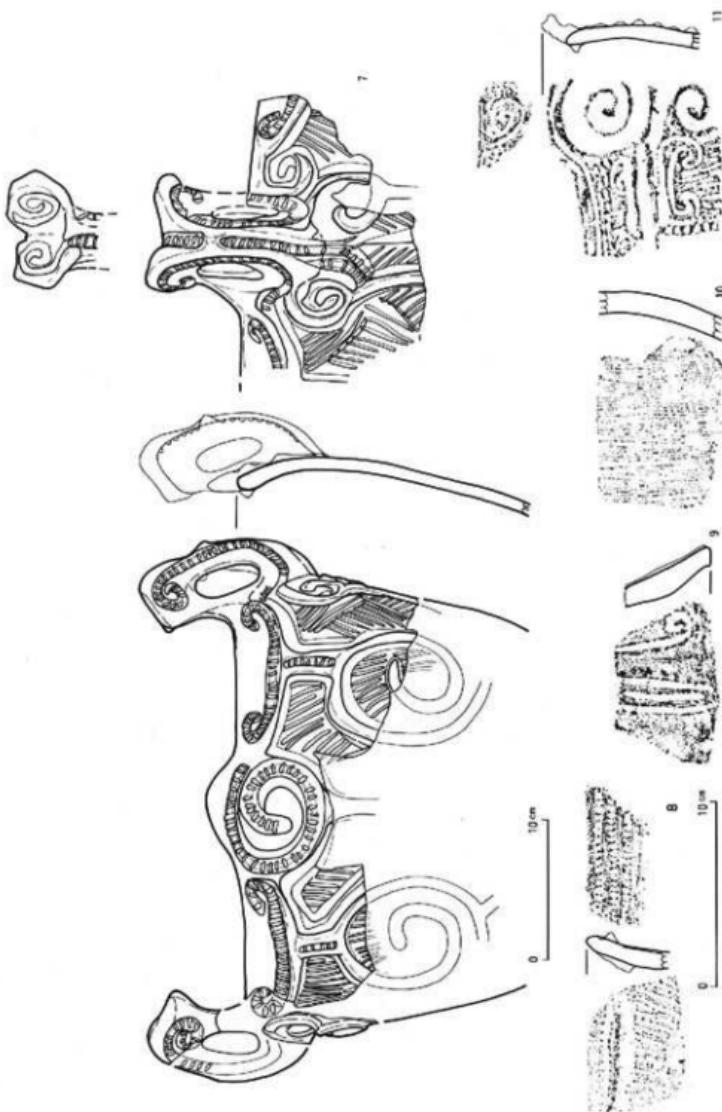
柱穴は、P2 (60×58×33cm)・P3 (84×70×49cm)・P4 (72×64×58cm)・P6 (132×84×44cm)の4穴で、約3.0m間隔の方形配列がなされる。プランはほぼ円形を呈するが、規模が他の柱穴と比べて大きく、3号住と類似する。その他に、P1 (58×46×37cm)・P5 (48×42×19cm)・P7 (48×42×41cm)のピットを検出したが、特にP1・P7は柱穴と同じく底面が敵き締められており、柱穴としての可能性が強いが、出入口部に近接するためそれに関連性のあるピットとしても考えられよう。

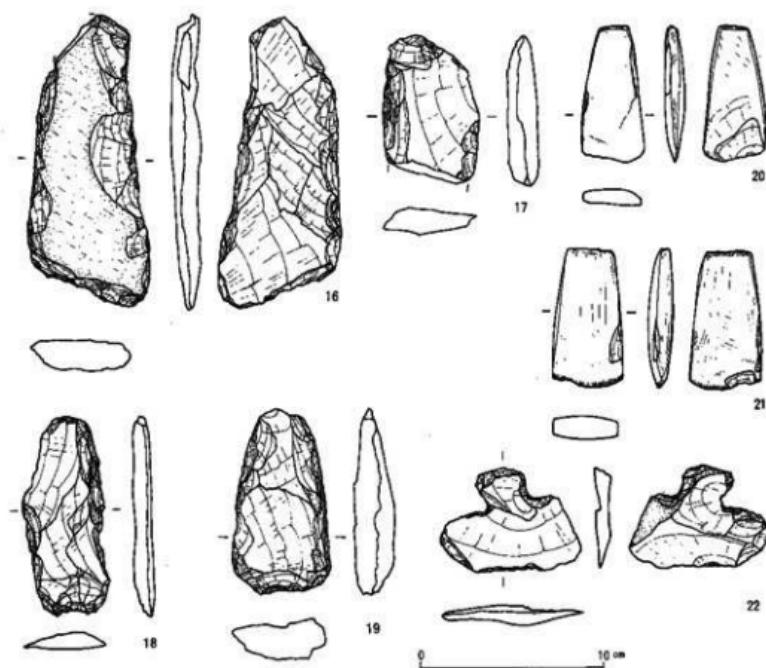
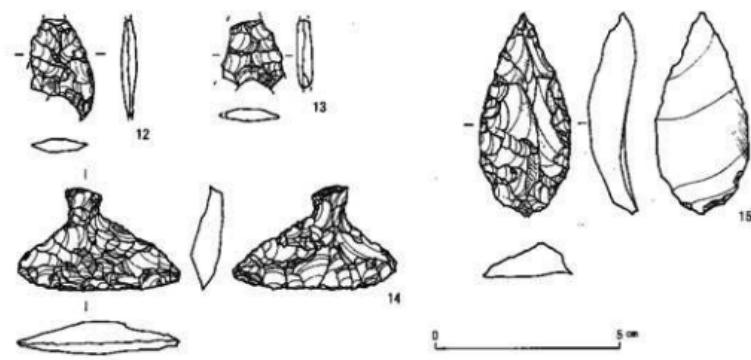
炉は、出入口に対して中央よりやや奥まった所に位置する石組炉である。長軸182cmの短軸



第31図 10号住居址出土遺物実測図1

第32圖 10号住居址出土遺物實測圖2





第33图 10号住居址出土遗物实测图3

132cmで深さ51cmの規模を有し、楕円形を呈し摺鉢状で二段に堀り込まれる。又、住居址の主軸と短軸がほぼ一致する。炉を構成する石材が奥壁に残っているものの、他は抜かれたり内部に落ち込んでいるようだ。しかし、二段に掘り込まれた段に石材が取り付けられていたことを考慮すると、それが全城に及ばないことからして、奥壁を中心として「L」字型を呈していたとの考え方もできよう。尚、炉の使用状況を観察すると、火焼部にみられる焼土の広がりと厚みが認められ、使用期間と使用頻度の激しさを感じた。

遺物（第31～33図） 土器は、深鉢（1～3・5～8・10・11）と台付土器（4・9）が、石器は、石鎌（12・13）、石匙（14・22）、スクレイバー（15）、打製石斧（16～19）、磨製石斧（20・21）が出土している。出土量は多く、そのほとんどが覆土中からであった。

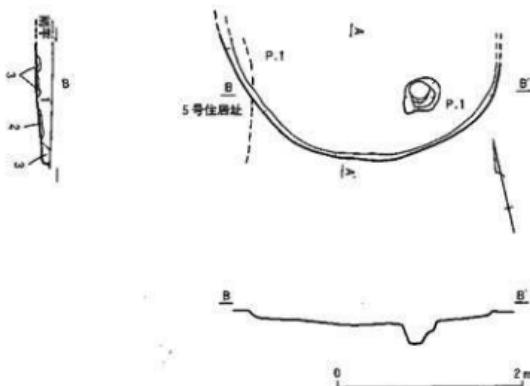
1は、樽形を呈し、唐草隆線文と縦位蛇行沈線文による文様構成を行い、櫛状工具による縦位細線文を地文としている。炉石の下に埋め込まれて、炉壁をなしていたものである。2は、2単位の把手が付く樽形で、唐草+縦位蛇行隆線と縦位沈線文を施す。3は、やや不規則に施される「ハ」の字状沈線文の小型品でP1の上部で出土している。4は、2単位からなる把手を有する台付土器で、唐草隆線文と縦位沈線による文様構成をなしている。また、P3上部に落ち込んでいた。7は、2単位からなる把手が付き波状口縁を呈する樽型の深鉢で、唐草隆線文及び沈線文を施し間を沈線で充填する。又、唐草沈線文内部には、連続する刻みを施す。5は、地文に繩文を施し、縦位に蛇行沈線と平行沈線を施す。6は、地文に繩文を施し、渦巻隆線文を口縁部に施すもので「加曾利E式土器」に類似性を感じさせる。横位沈線文内に列点文を施す文様帯が口縁部内面にみられる。9は、台付土器の脚部である。10は、櫛状工具による縦位細線文が施される。

石鎌は、12・13とも回基無茎石鎌で、欠損品である。14の石匙は、両面調整による丁寧な作出を行う横形である。15は、片面調整により木の葉形に作出しているが、連続する丁寧な調整は認められない。打製石斧は、撥形（16・19）と短冊形（17・18）とに分けられる。16は、片面に自然面を残し、刃部は斜めではあるが直刃を呈する。18は、刃部の後退が認められる。磨製石斧は、20・21共、小型の定角式磨製石斧である。22の石匙は、つまみを作出するのに鋭い抉りが入る横形で、一次加工によって隔離された側縁を刃部として使用し、使用痕と思われる細かな剥離痕が認められる。石質は、12～15が黒曜石、16が粘板岩、17が砂岩、19が緑泥岩、18・20～22が頁岩である。

本住居址は、土器を中心とする出土遺物から、縄文時代中期後葉に位置づけられよう。

11号住居址

遺構（第34図） 調査区の中央部、D-9グリットに位置する。5号住居址の東側一部を切って構築しているものの、開田による削平でそのほとんどが破壊され、全体の約30%のみの検



第34図 11号住居址実測図

出であった。そして、検出した残存部から推測すると、直径3.3mの規模で円形を呈すると思われる。又、出入口や主軸は不明である。

覆土は、3層に分層された。1層は、暗茶褐色土でロームブロックと炭化物を疎らに含んでいる。2層は、黒褐色土でローム粒子を疎らに含んでいる。3層は、黄褐色土でローム粒子を多く含んでいる。又、3層とも締りは強く、粘性も若干感じられた。

床は、他の住居址と比べて硬さではなく、軟弱であった。壁高は16cmで、壁下の周溝はなかった。尚、床面での標高は、714.14mであった。

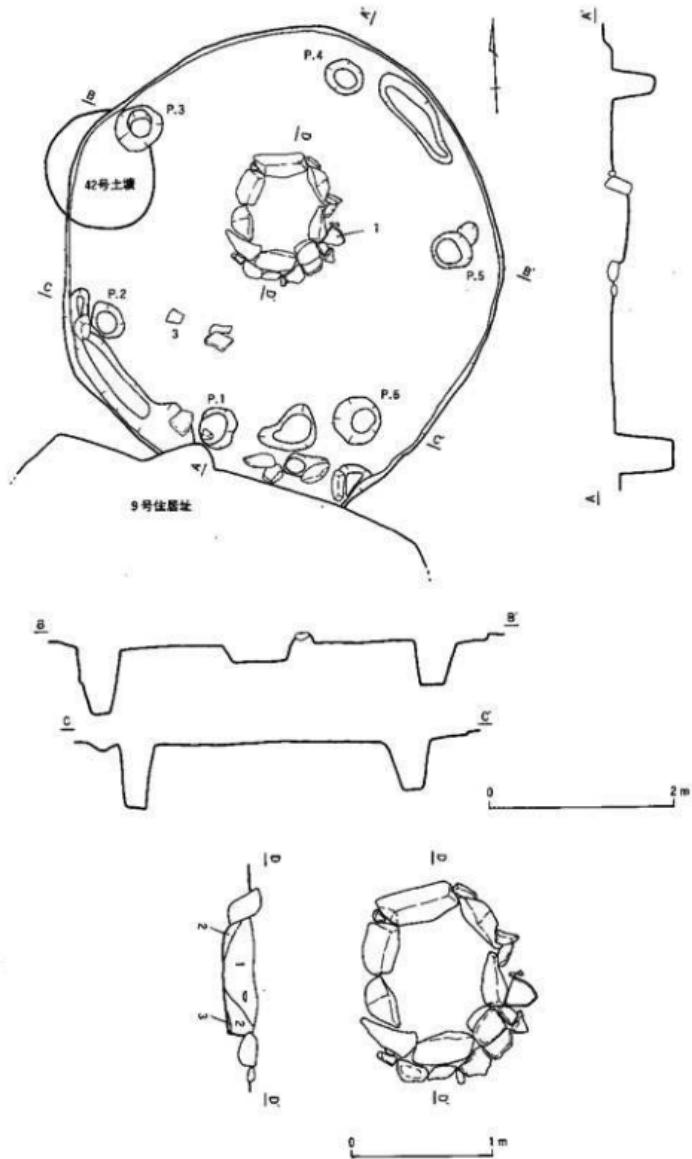
柱穴と思われるものは、P1 (38×36×23cm) の1穴だけで、円形プランで深さはやや深いものの、柱穴の1つであろう。

炉は、確認されなかった。

遺物 本住居址からは、出土量そのものが少なく、個体となるものはおろか図化できるものも出土しなかった。又、覆土中より縄文時代中期後葉の土器片が疎らに出土してはいるものの、本住居址の時期を推定するには出土遺物が乏しい。

12号住居址

遺構（第35図） 調査区のほぼ中央部、C-7・8、D-7・8グリットに位置する。本住居址の南側の一部を9号住居址に切られ、P3から壁際に位置している42号土壙を切って構築している。直径4.9mの規模で、円形を呈する形状である。又、炉の位置と方向及び柱穴の配置から考えて、出入口は南側の9号住居址との重複部であろう。よって主軸は、N-10°-Eである。



第35図 12号住居址実測図

覆土は、上部が大きく削平されているので、床面から3～5cmしか残っておらず縛りが強く炭化物を疎らに含む暗茶褐色土の単層のみが確認できた。

床は、全体的に硬く敲き締められており、42号土壤と重複する部分は貼床になっていた。壁高は、上記の通り3～5cmと浅かった。又壁下には、P1からP2にかけてと、P4からP5にかけて周溝と思われる溝が部分的ではあるが認められた。尚、床面中央部で標高714.08mを測った。

柱穴は、P1(44×38×68cm)・P2(40×30×67cm)・P3(52×48×71cm)・P4(72×64×48cm)・P5(42×38×68cm)・P6(52×48×54cm)の6穴で、プランは円形を呈し1.8～2.1mの等間隔で配置される。又、出入口付近に円形の緩やかな落込みが認められるが、柱穴やピットとするには浅すぎた。

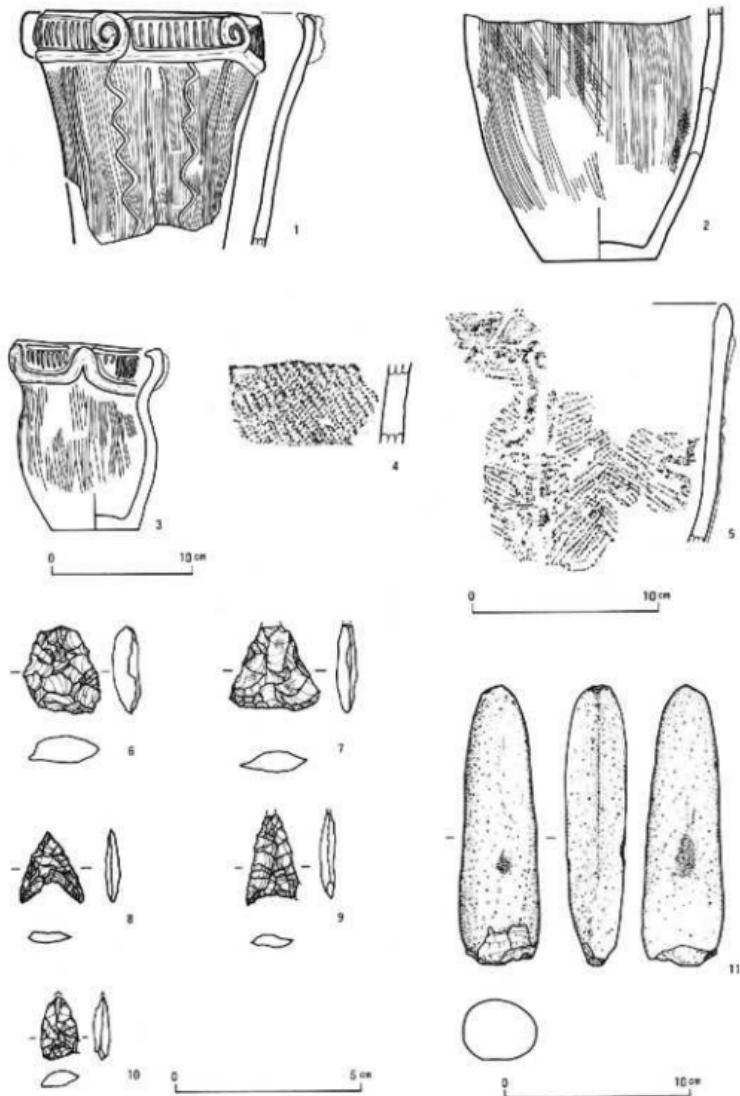
炉は、出入口に対し中央よりやや奥まった所に位置している。長軸140cmの短軸120cmの規模で精円形を呈する石組炉で、深さは床面より19cm掘り込まれて底面はほぼ平坦である。炉の位置は、住居址の主軸と炉の長軸方向が一致するように築かれている。炉を構成する石は、拳大から人頭大よりやや大型の自然石を用いており、特に大型の石は平坦な面のあるものを選んでそれを炉の壁面にして、小型の石で裏止めを行っている。又、前方部においては、中型の平石を利用して二ないし三段の小口積みを行い、更にその後にも二重に石を打ち付けている。覆土は3層に分層された。1層は、炭化物を疎らに含む暗茶褐色土で、2層は、茶褐色土と共に縛りは強い。3層は、黄褐色土で焼土を疎らに含む。尚、内部の火焼状況を観察すると、底面にやや焼土が認められたものの、石も火焼による変色や脆さはなく、使用頻度は少ない。

遺物（第36図） 土器は、深鉢（1～5）が、石器は、石鏃（6～10）と磨製石斧（11）が出土している。又、出土量は少なかった。

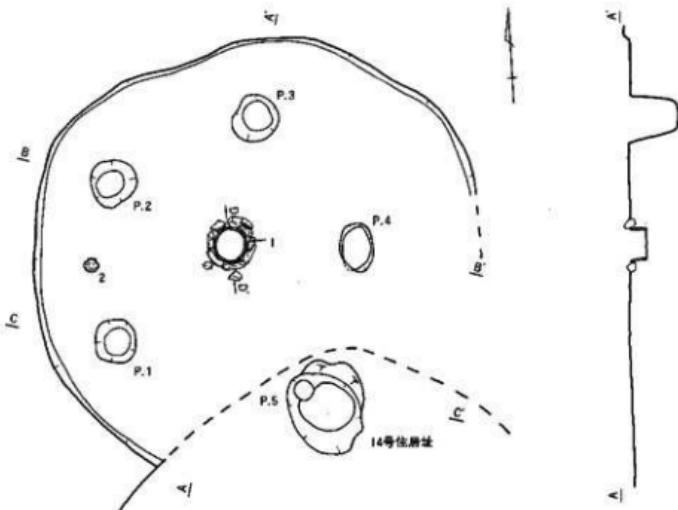
1は、頭部が緩やかにくびれるキャリバー型を呈し、口縁部は渦巻文により文様区画され、同部は櫛状工具による縦位細線文を充填し、一定間隔を置いて蛇行沈線文と平行沈線文が縦走する。2は、同部が緩やかに膨らむ形状で、櫛状工具による縦位細線文を充填する。3は、キャリバー型を呈する小型品で、口縁部は隆線文による文様区画され、同部は櫛状工具による縦位細線文を施す。4は、短節R L縄文を施す副部である。5は、ほぼまっすぐ立ち上がる口縁部を呈し、縦位隆線文区画「ハ」の字状沈線文を施す。

石鏃は、6及び10は製作中のものか形状がはっきりしない。7は、平基無茎石鏃で、8・9が回基無茎石鏃に属する。11は、乳棒状磨製石斧で調整痕と思われる打痕が側面にみられ、刃部の後退が認められる。又、表裏面に1ヶ所づつ、敲打による凹痕が残されている。なお石質は、6～8・10が黒曜石で、9がチャート、11が綠泥岩である。

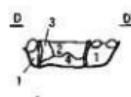
上記の土器を中心とする出土遺物から判断して本住居址は縄文時代中期後葉に位置づけられよう。



第36図 12号住居址出土遺物実測図



0 2 m



第37图 13号住居址实测图

13号住居址

造構（第37図） 調査区の東側、F-5・6、G-5・6グリットに位置する。上部の削平による破壊と14号住居址に切られているためか、住居址の南東側のプランの確認ができなかつた。しかし、確認できたわずかな壁の立ち上がりと柱穴の位置から、直径4.9mの規模で円形を呈す形状がわかつた。出入口は、P1とP5の柱穴の間隔が他よりも長いことから、P1とP5の間隔が妥当であると思われる。よって主軸は、N-11°-Eである。

覆土は、暗茶褐色土の単層のみが確認できた。

床は、全体的に硬かったものの、その広がりでプラン不明の箇所を追つてみたが、部分的に搅乱されていて確認できなかつた。壁は、確認できた所で7~10cmあり、周溝はない。

柱穴は、P1(50×50×61cm)・P2(50×48×70cm)・P3(50×50×53cm)・P4(52×38×44cm)の4穴と14号住居址の柱穴と重複するP5(規模・形状は不明×56cm)の5穴で構成され、P1とP5間を除き、1.6~1.7cmの間隔で配置される。また、プランは円形である。

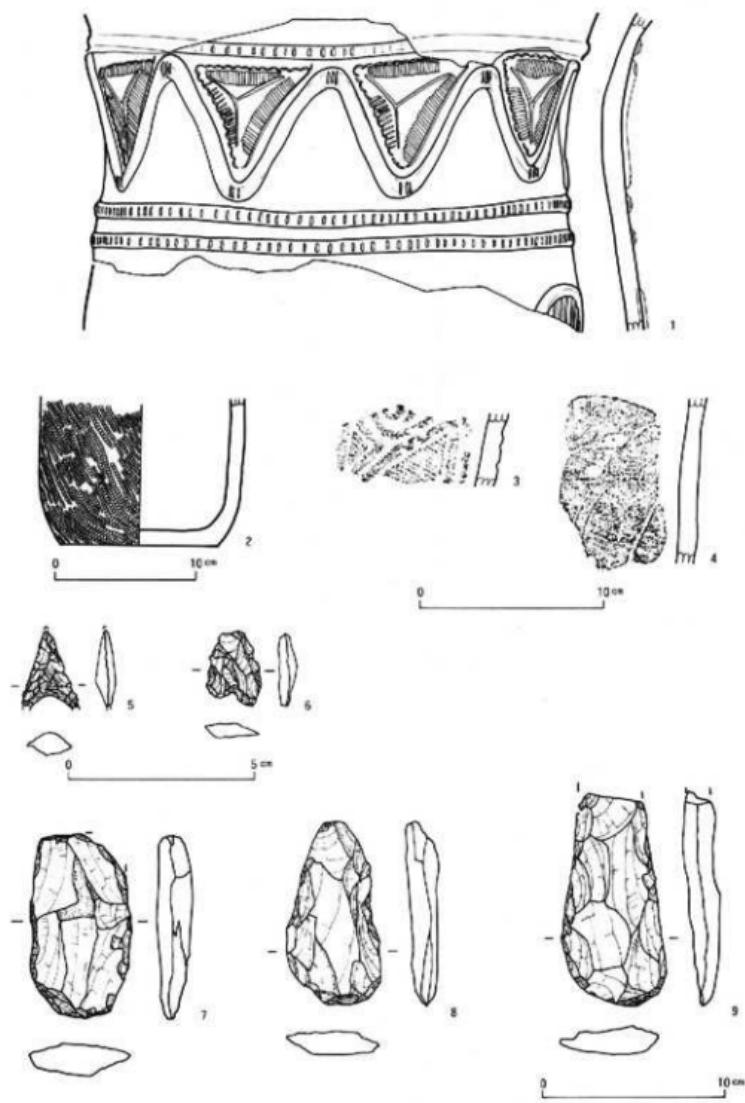
炉は、石圓みによる埋焼炉で、住居址のほぼ中央に位置している。炉に使用されている土器は、口縁部と胴下半部を欠いたものを用いており、直径102cmで深さ27cmに掘り込んだ小穴の中にそれを埋め込んで、拳大の転石11個を用いて押さえている。埋土は、炭化物とローム粒子をまばらに含む茶褐色土の単層(1層)で締りは強い。炉の内部覆土は、ローム粒子をまばらに含む暗茶褐色土(2層)と黄褐色土(3層)およびローム粒子を多く含む暗茶褐色土(4層)の3層に分層できた。また、3層とも炭化物をまばらに含むが、焼土はあまり含んではいなかつた。尚、本炉址の火焼状況を観察すると、底面にはほとんど焼土はみられないものの、土器の内面は火焼により施くはげ落ちた部分も認められた。

遺物（第38図） 土器は、深鉢(1~4)が、石器は石鎚(5・6)と打製石斧(7~9)が出土しているが、出土量は少なかつた。

1は、炉址に使用されていた大型の深鉢で、連続する刻みを持つ隆線文により横位に文様区分され、その内部を横位に山形隆線文を施して逆三角形となる中に、半截竹管状工具による沈線文を施している。2は、器面にR L繩文を充填する深鉢の底部から胴下半部のみで、床面に立った状態で出土しており、上部は削平により削られたと考えられる。3は、繩文を地文とし、立体的な隆線文による文様構成である。4は、半截竹管状工具による細い沈線を施すもので「平出Ⅲ類A土器」であろう。

石鎚は、5・6とも凹基無茎石鎚で一部分欠損する。打製石斧は、短冊形(7)と撥形(8・9)とに分けられ、7は、頂基部とも使い方の激しさからか摩滅が認められる。石質は、5・6が黒曜石で、7・8は粘板岩、9は砂岩である。

尚、上記の出土遺物から本住居址は、繩文時代中期中葉に位置づけられよう。



第38図 13号住居址出土遺物実測図

14号住居址

遺物（第39図） 調査区の東側、F-6・7、G-6・7グリットに位置する。北側は13号住居址を切り、東側は7号住居址に切られている。上部の削平による破壊が著しいため、全体の3分の1で北側のプランがはっきりとしなかったが、柱穴P5の確認によっておよその規模・形状が判明した。それは、直径5.4mでやや不整形ではあるが、円形を呈するものと考えられる。尚、埋甕のある南壁際が出入り口と想定すれば、主軸はN-8°-Eを示す。しかし、他の住居址と対比すると、柱穴と思われるピットの配置に規則性がみられず、炉の改築（P9）も考えられることから、間隔のあくP3とP5の間も出入り口としての可能性があり、埋甕のある位置へ何らかの理由によって移動したとも推測されよう。

覆土は、暗茶褐色土の単層のみが確認できた。

床は、埋甕周辺部は硬かったが、他はやや軟弱であった。壁は確認できるところで8~15cmであった。また、周溝はなかった。尚、床面のほぼ中央部で標高713.98mを測る。

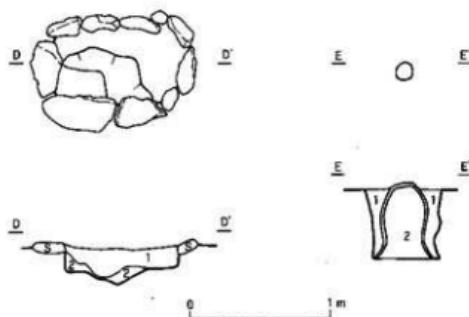
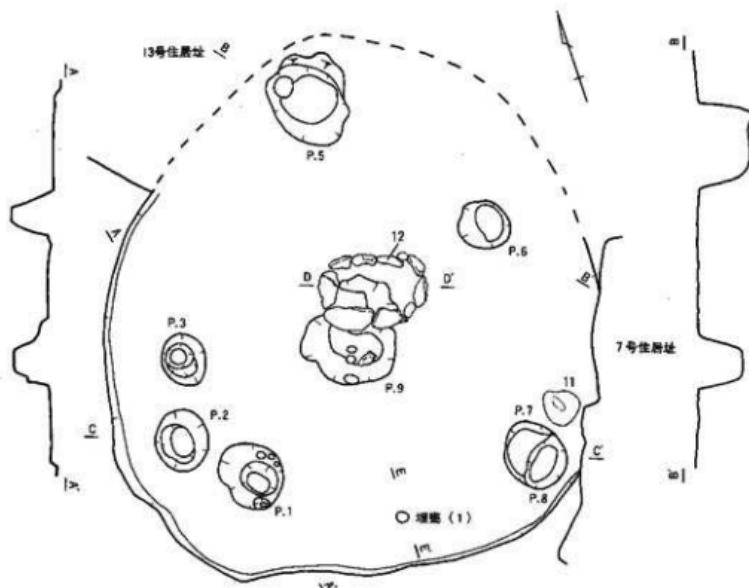
柱穴は、P2(62×60×63cm)・P5(98×96×55cm)・P6(56×53×48cm)・P8(60×40×59cm)の4穴が有力であるが他の、P1(72×66×40cm)・P3(56×50×44cm)・P7(66×40×30cm)も改築があったとすれば柱穴の可能性もある。

炉は、120×80cmの長方形を呈する石組み炉で、深さは14cmで底面は平坦である。炉を構成する石は、人頭大よりやや小型の平たい石を用いており、平面を炉壁としている。また中には、欠損した石皿(12)も利用されている。火焼状況を観察すると平面にはほとんど焼土はみられないが、花崗岩を中心とする炉の石が火焼によって風化しているのが認められた。覆土は、ローム粒子をまばらに含む暗茶褐色土(1層)と黄褐色土(2層)の2層に分けられるが、共に縦りではなく炭化物や焼土も含まれなかつた。尚、底面にみられる落込みがP9とながっており、火焼状況こそ認められなかつたが、現存する炉を構築する前にあった炉の可能性が考えられる。

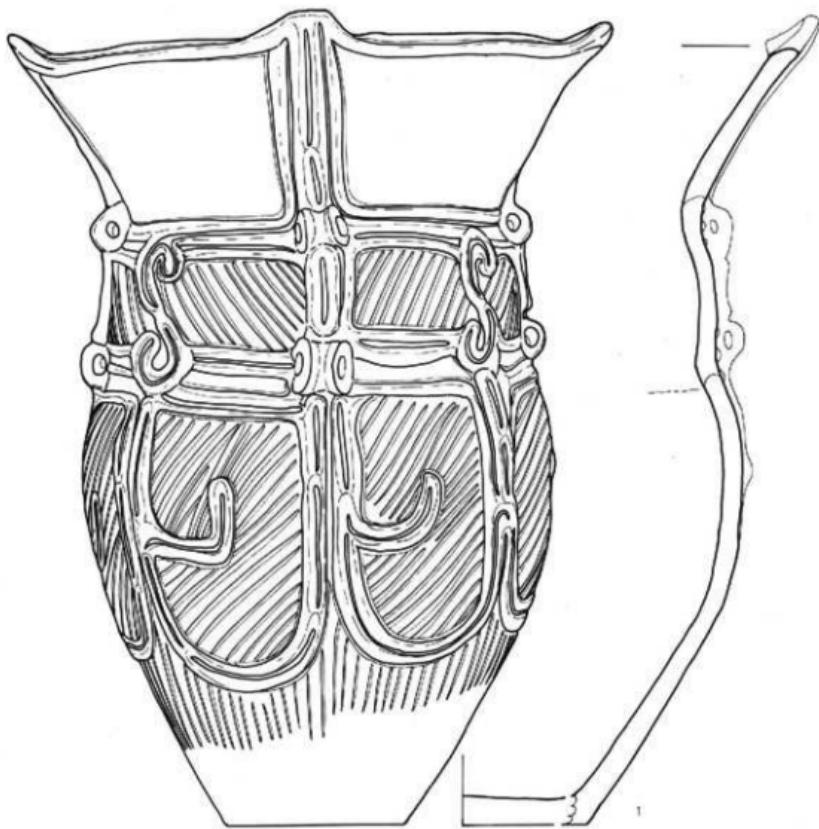
施設としては、出入り口とされる床下で逆位に埋設された埋甕が検出された。底部の一部が欠損するものの、完形品が用いられている。埋土は、暗茶褐色土で縦りは強く(1層)、内部覆土は、黄褐色で縦りは弱かつた(2層)。

遺物（第40・41図） 土器は、深鉢(1~4)が、石器は石鏃(5・6)、石錐(7)、及び使用痕のある剥片石器(8)、打製石斧(9)、横刃形石器(10)、石皿(11・12)が出土している。しかし出土量はあまり多くなかつた。

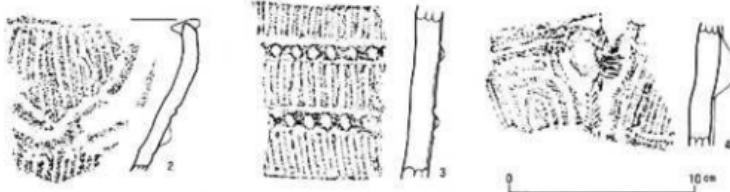
1は、埋甕に用いられていた大型の深鉢で、口縁部はラッパ状に大きく外反し、頸部は二段に括れ、胴部は球状に膨らみをみせる。文様は鎖状隆線文で縦位に4区画され、更に横位に3区画される。縦位の隆線文には二段に括れる頸部にそれぞれ穿孔する突起を有し、口縁部は無文で頸・胴部は縦走沈線文を充填する。2は、口縁部に櫛形文を施すキャリバー形のものである。3は、横位隆線文区画でその中を縦位沈線文を施す。4は、立体的な隆線文で文様構成を



第39図 14号住居址実測図

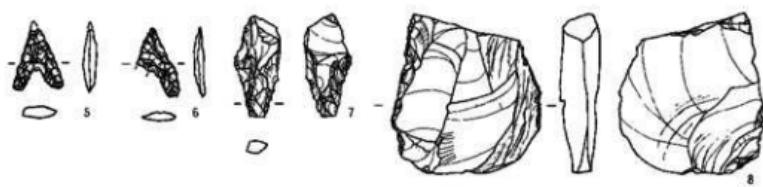


0 5 cm

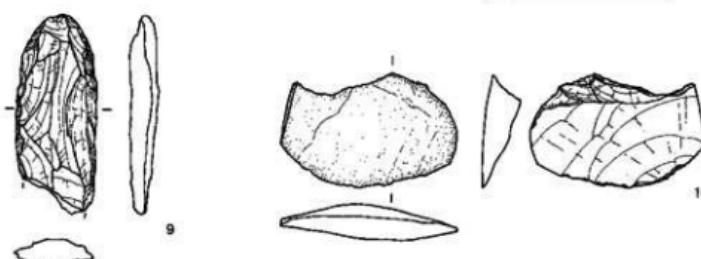


0 10 cm

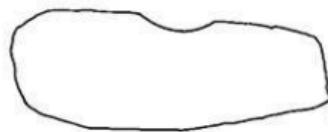
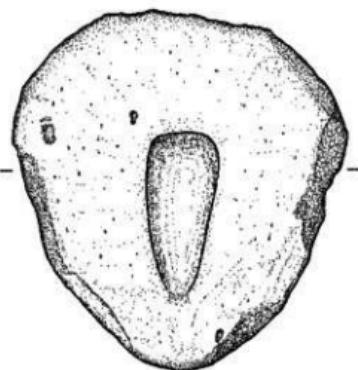
第40図 14号住居址出土遺物実測図1



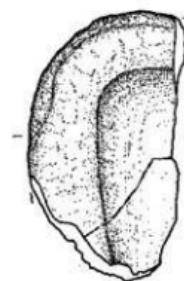
0 5 cm



0 10 cm



11



12

0 20 cm

第41図 14号住居址出土遺物実測図2

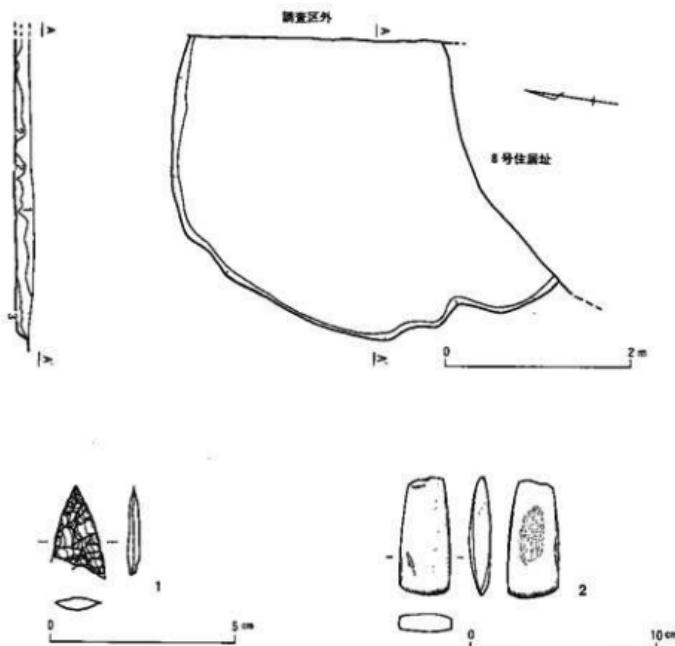
をするもので流入品と思われる。

石鎌は、5・6とも凹基無茎石鎌で鉗形を呈する。7の石鎌は頂・先端部を欠損する。8は、一側縁に調整痕を残すが、使用痕と思われる細かな剥離を残す。9の打製石斧は短冊形で刃部を欠損する。10は、第一次調整によってできた鋭い一側縁部を刃部として使用する横刃形石器である。11の石皿は、P7・P8の脇の床面に座った状態であったもので、使用途中のものであろう。12の石皿は、炉の石として使用されていた。尚石質は、5～8が黒曜石、9は頁岩、10は砂岩、11・12は花崗岩である。

以上のような出土遺物、特に埋甕を中心として、本住居址は縄文時代中期後期葉に位置づけられよう。

15号住居址

遺構（第42図） 調査区の北東部、I-4・5グリットに位置し、南側は8号住居址に切られ、東側は調査区外のため未調査である。形状はやや不整形ではあるが、直径およそ5.2mの円



第42図 15号住居址実測図・出土遺物実測図

形を呈すると思われる。

覆土は3分層された。1層は暗茶褐色土、2層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土であり、共に締りはある。3層は、締りがあまりない黄褐色土である。

壁はなだらかで、直に掘り込まれてはおらず、床も軟弱で敲き締められた形跡はない。そして、全体的にレンズ状に掘り込まれている。また、柱穴や炉も検出されなかった。このように、住居址となる条件はほとんどなく、竪穴状遺構として捕らえるのが妥当であろうか。

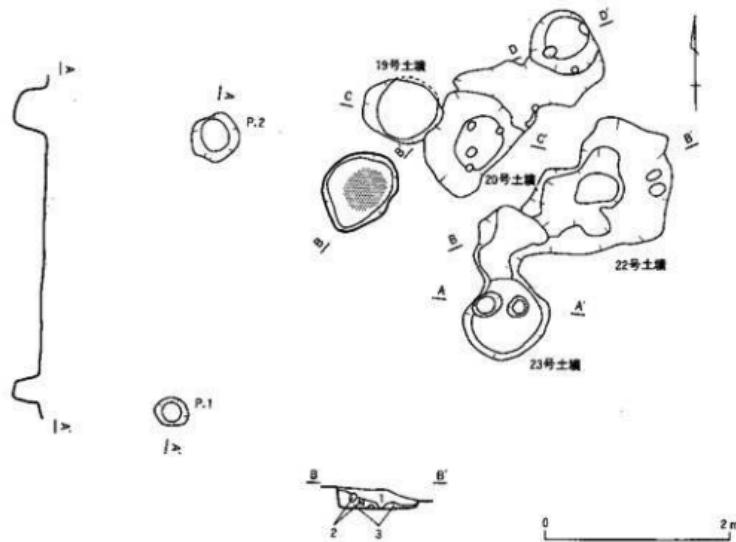
遺構（第42図） 土器は、すべて深鉢の破片のみで図化できなかつたが、縄文時代中期初頭及び中葉の土器片が、覆土中より出土している。しかし、出土量は少なかつた。

石器は、1の凹基無茎石錐と2の定角式磨製石斧が出土している。また石質は、1が黒曜石で、2が頁岩である。

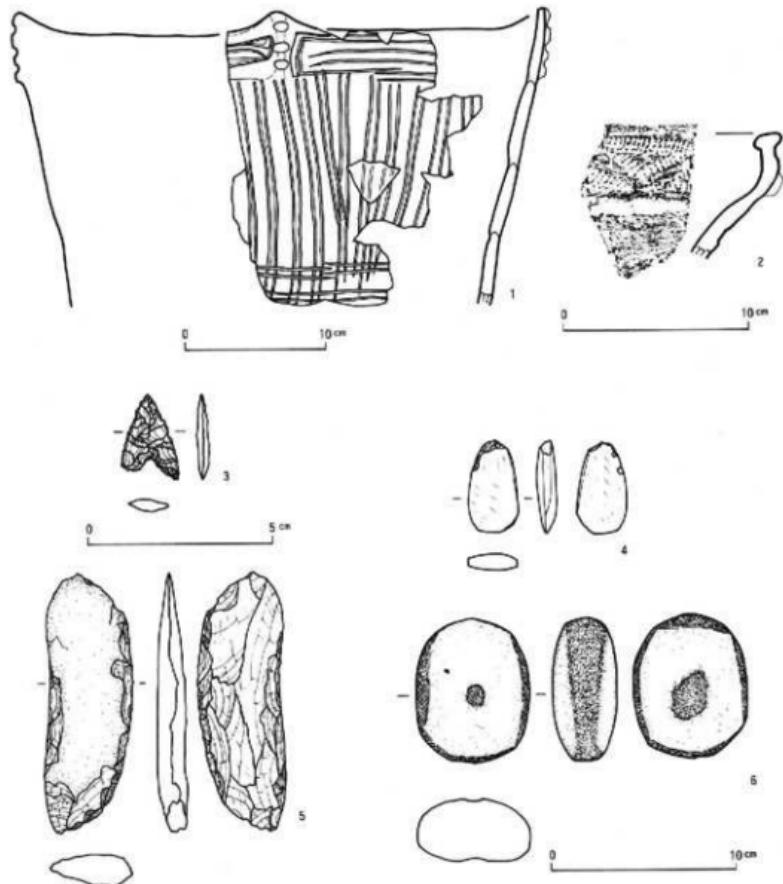
尚、本住居址は時期を推定できるまとまった出土土器が無いため、築造時期についてははつきりしない。しかし、8号住居址に切られているということは、それよりも古い時期には位置づけられよう。

16号住居址

遺構（第43図） 調査区の北側、D-4・5、E-4・5グリットに位置する。既に住居址



第43図 16号住居址実測図



第44図 16号住居址出土遺物実測図

の床まで削られていて、破壊の状況が著しかった。そのため、規模・形状は不明で、かろうじて炉の下部や柱穴と思われるP1・P2が検出できた。また、19～23号土壙が重複していた。

柱穴と思われるピットはP1 ($36 \times 30 \times 30\text{cm}$) ・ P2 ($50 \times 50 \times 36\text{cm}$) の2穴を検出したものその他は検出できなかった。

炉は、 $90 \times 70\text{cm}$ の規模でやや不整形な円形であり、深さは 13cm を測った。覆土は、3層に分層できた。1層は炭化物をまばらに含む暗茶褐色土で、2層はロームブロックである。3層は焼土をまばらに含む黄褐色土である。共に締りは強い。尚、底面は著しい火焼状況を示している。

遺物(第44図) 土器は、深鉢(1)と浅鉢(2)が、石器は、石鏃(3)と打製石斧(5)と磨製石斧(4)と打痕磨痕を有する凹石(6)が炉内部より出土している。

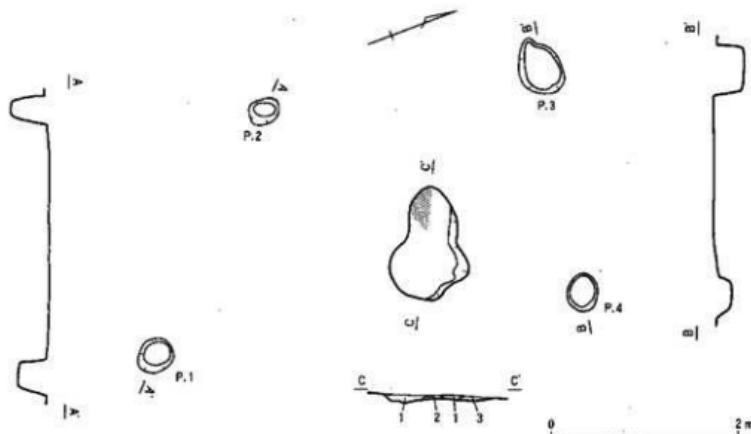
1は、やや内湾ぎみに開く口縁部を有し、半截竹管状工具により横位・縦位に平行沈線を施すもので、「平出Ⅲ類A土器」の特徴を顕著に示す。2は、「く」字状に内湾する口縁部で、連続する三角隆線文に爪形文を施す。

3は、基部に鋭い抉りが入る凹基無茎石鏃である。4は、小型の定角式、磨製石斧で使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。5は、片面に自然を残し側縁部に細かな調整痕の作出を行なう短冊形打製石斧である。6は、両側面に凹痕と磨痕を残し、側縁部は敲打による打痕が残る多機能を有している。尚石質は、3が黒曜石、4がチャート、5が緑泥岩、6が砂岩である。

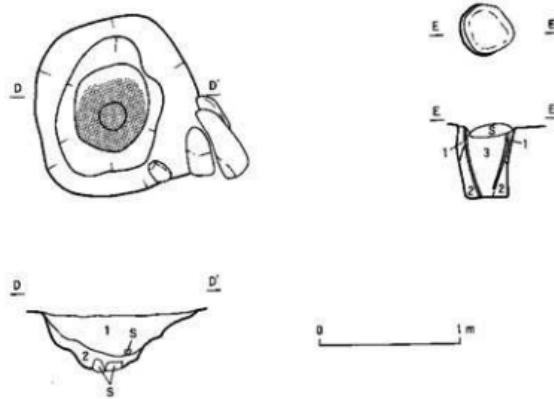
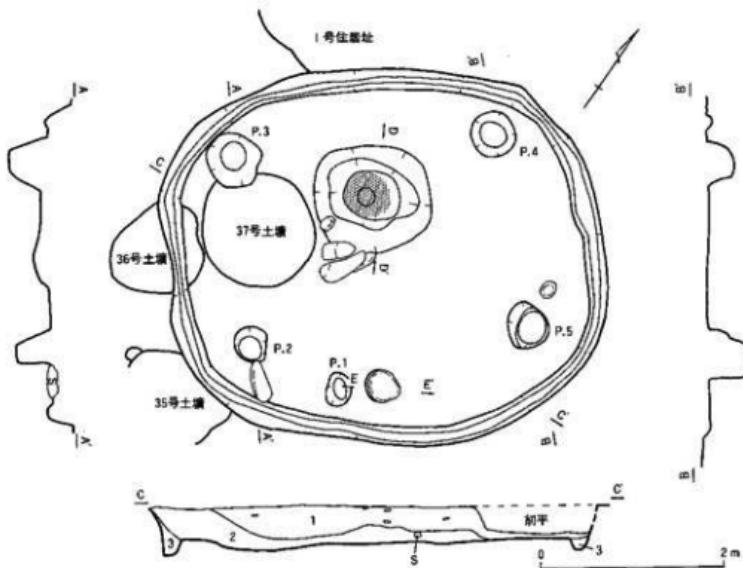
上記の出土土器は、縄文時代中期中葉に属するものであるが、これのみで本住居址の時期を決めるることはできない。

17号住居址

遺構(第15図) 調査区北西、C-3・4グリットに位置する。本住居址も16号住居址同様に床まで削られており、規模・形状は不明であり、炉や柱穴と考えられるピットが存在する。炉は、 $122 \times 86\text{cm}$ の不整円形で、深さは5cmであった。覆土は、1層が暗茶褐色土で2層が黄茶褐色土。3層は焼土を多く含む赤褐色土の3層に分層できた。柱穴と思われるピットは、P1($38 \times 36 \times 20\text{cm}$)・P2($32 \times 32 \times 24\text{cm}$)・P3($64 \times 46 \times 19\text{cm}$)・P4($40 \times 32 \times 9\text{cm}$)の4穴である。尚、出土遺物はなく本住居址の時期は不明である。



第45図 17号住居址実測図



第46図 18号住居址実測図

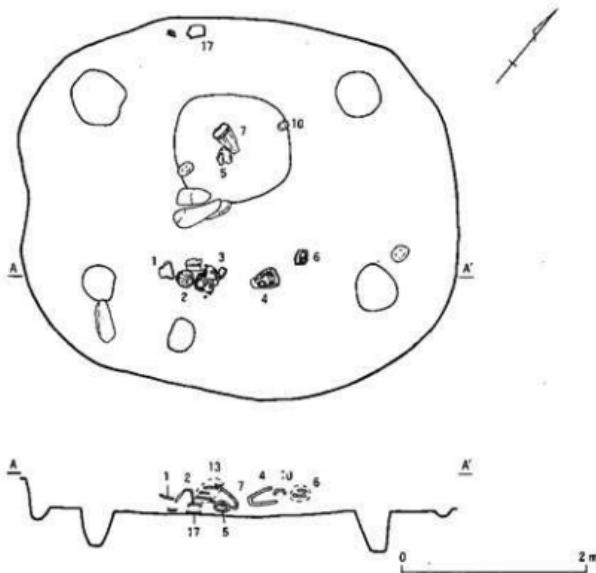
18号住居址

造構（第46図） 調査区の西側、A-8・9、B-8・9グリットに位置する。住居址検出面はⅡ層下部で、覆土の一部は1号掘立建物址に切られている。又北側は、1号住居址を切り、東側は開田時に削り取られていた。又、35～37号土壤も切っている。長軸が4.7m・短軸4.0mの規模で、楕円形を呈している。P2とP5の中間点の壁際に埋甕があり、ここを出入口と考えるとN-40°-Wが主軸となり、住居址の短軸方向とほぼ一致する。

覆土は3分層される。1層は、土器片及び炭化物を多く含む暗茶褐色土。2層は、炭化物を疎らに含む茶褐色土で、個体となる土器はこの層の下部から出土する。3層は、黄褐色土で、おもに周溝内に認められた。尚、1・3層に対し、2層の縮りは強かった。

床は、ほぼ全域に硬く敲き締められており、37号土壤の上部はロームによる貼床をしている。壁高は、残りのよい所で30～32cmを測る。又、壁下には周溝がみられ、切れ目なく一周している。尚、床面は中央部での標高は、714.19であった。

柱穴は、P2 (40×34×37cm)・P3 (62×60×74cm)・P4 (50×48×29cm)・P5 (50×44×43cm) の4穴で、形状は円形を呈するが深さに均一性が認められない。



第47図 18号住居址遺物出土状況図

炉は、出入口に対して中央よりやや奥まった所に位置し、長軸128cmの短軸116cmで梢円形を呈し、短軸方向が住居址の主軸とほぼ一致する。深さは47cmを測り、二段で摺鉢状に掘り込まれる。覆土は2層から成り、1層は、炭化物及びローム粒子を疎らに含む暗茶褐色土で、2層は、焼土・炭化物・ローム粒子を疎らに含む暗茶褐色土で焼けた転石もみられる。尚、本炉址は石組炉であったと思われるが、石材は取り除かれてしまっている。また火焼部は、著しい火焼状況を示していた（スクリーントーン表示）。

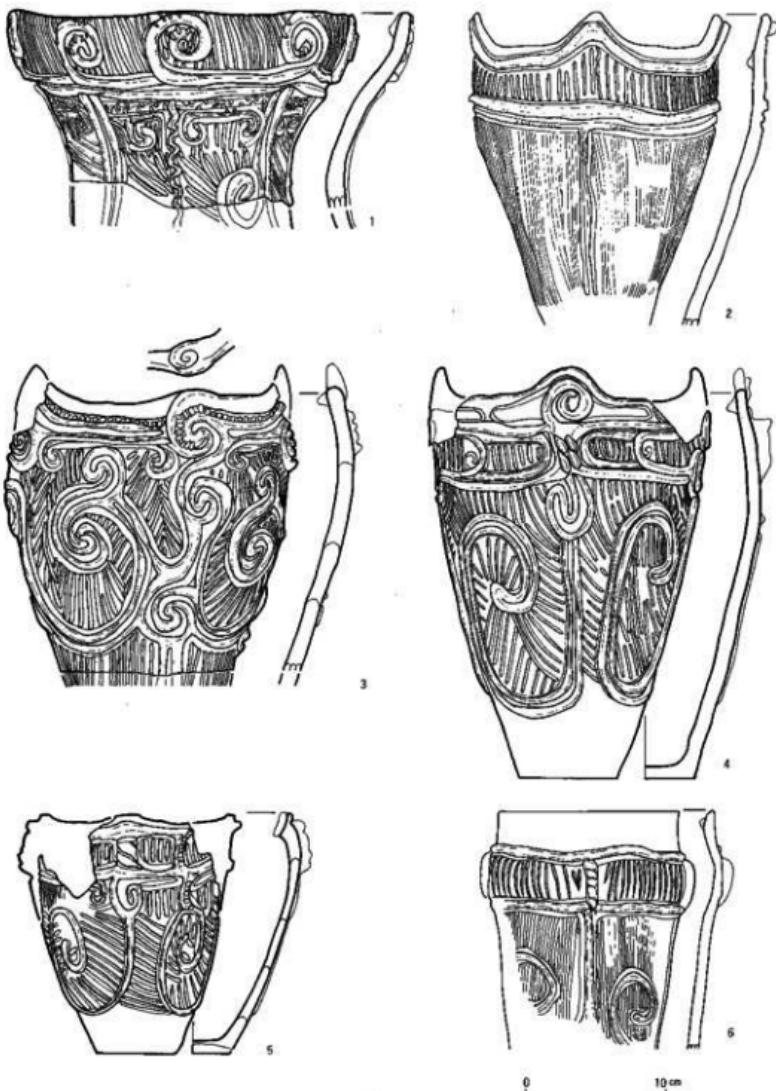
埋甕は、口縁部が一部欠損しているものの正位で埋設され、平たい石蓋付のものであった。埋土は2層に分けられ、1層は、縊りのない黄褐色土で、2層は、縊りがややみられる茶褐色土であった。また覆土は、縊りのない黄褐色土であった（3層）。

遺物（第47～52図） 土器は、深鉢（1～17）が、石器は、石鎌（18）・ビエスエスキーユ（19）・使用痕のある剥片石器（20・21）・打製石斧（22～24）・磨製石斧（25）・凹石（26）・横刃形石器（27）がみられ、又土製品では、土偶（28）が出土した。

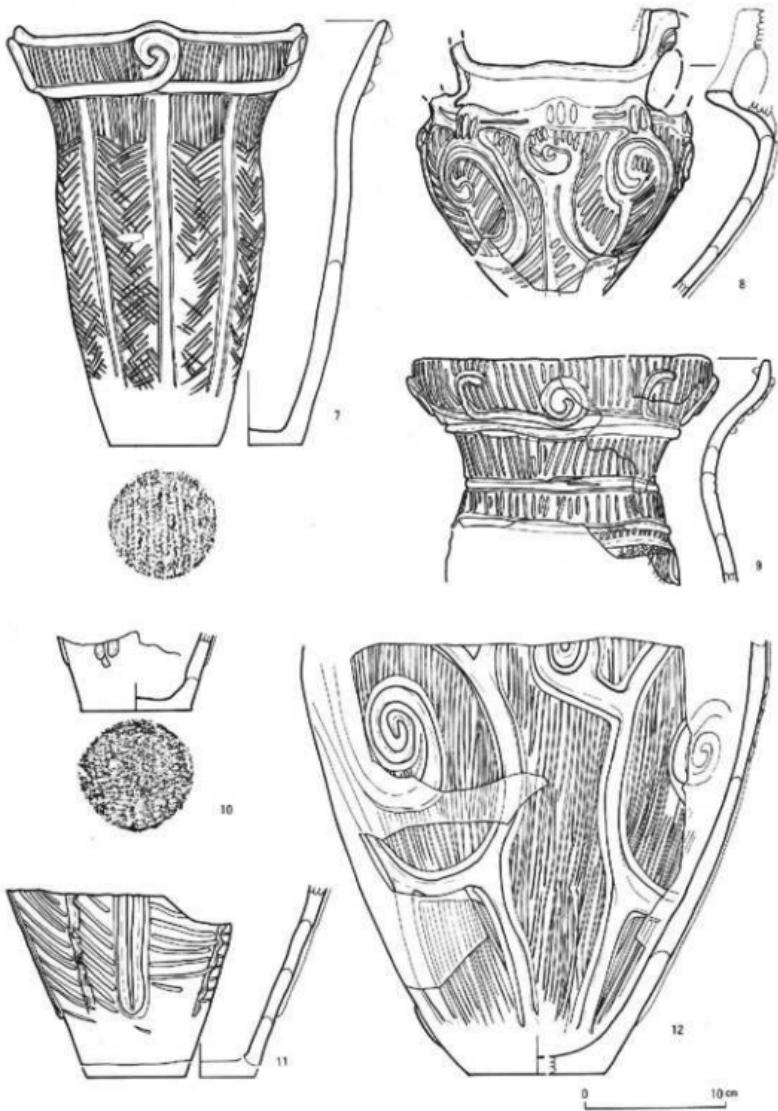
1・9・16・17は、キャリバー形を呈し頭部は緩やかに括れ、胴部が膨らむ形状をするもので、口縁部は間隔をおいて渦巻隆線文を施し、胴部は横位ないし縊位に隆線文区画をして、沈線文で充填する。2は、4単位からなる波状口縁を呈する樽形で、口縁部は隆線文区画の縊位沈線文を施し、胴部は櫛状工具による縊位細線文を施している。3～5は、4単位からなる波状口縁を呈する樽形で、唐草隆線文と斜走沈線文による文様構成をしている。6は、円筒形を呈し、口縁部は無文帯で頭部は隆線文区画の縊位沈線文、胴部は唐草隆線文と櫛状工具による縊位細線文を施している。7は、4単位からなる緩やかな波状口縁を呈するキャリバー形で、口縁部は渦巻及び横位隆線文区画で縊位沈線文を施し、胴部は縊位平行隆線文区画により、逆「ハ」の字状沈線文を充填する。8は、2単位の把手を有し肩部が大きく膨らむ形状をするもので、唐草隆線文と斜走沈線文による文様構成である。12はやや大振りの唐草隆線文と太めの櫛状工具による縊位細線文を施す。13は、埋甕として使用されていた樽形の土器で、縊位平行・唐草隆線文区画で、斜走・唐草沈線文を充填する。

18は、凹基無茎石鎌でP3の底面より出土している。19のビエスエスキーユは、頂・基部とも片面より打撃が加わっている。20は断面が三角形を呈する剥片の一側縁を刃部として使用している。21は、不定形の側縁部を刃部として使用している。打製石斧は、短冊形（22）・撥形（23）・分銅形（24）のいずれも検出している。25は、刃部のみ磨痕のみられる局部磨製石斧である。26は、両面に凹痕を残している。27は、剥片の一側縁を刃部として使用している。尚石質は、18～21が黒曜石、22・23・27が頁岩、24が粘板岩、25が緑泥岩、26が砂岩である。

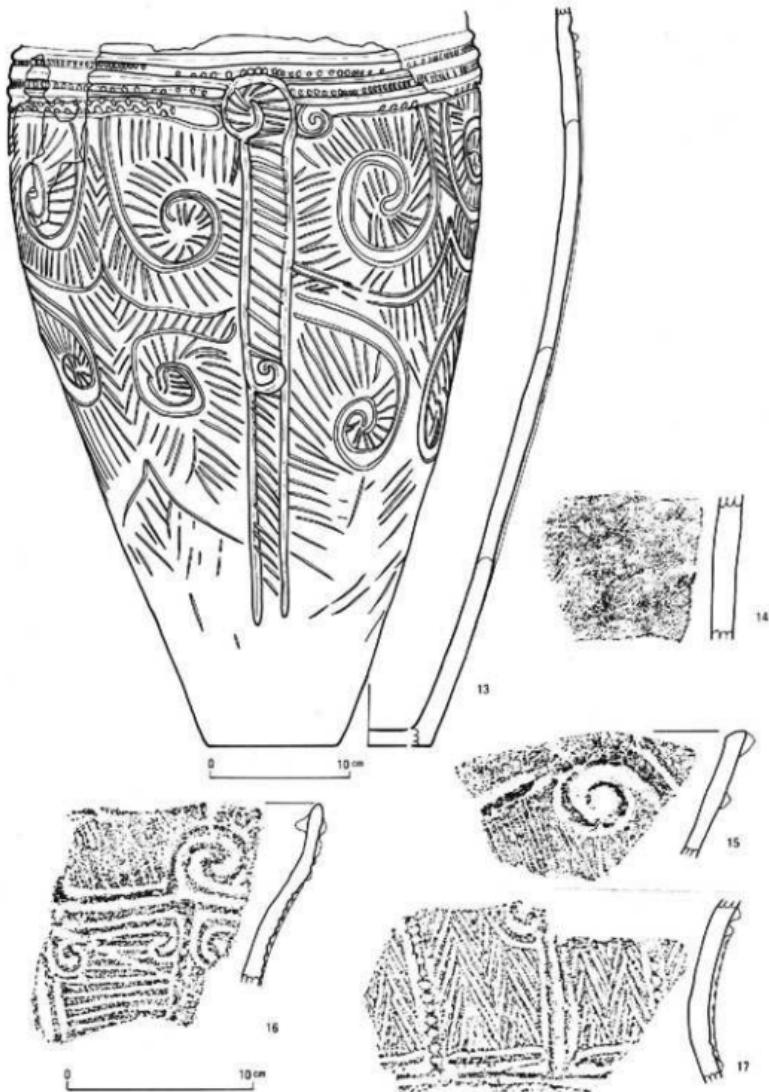
上記の土器を中心とする出土遺物から、本住居址は縄文時代中期後葉に位置づけられよう。尚、本調査で唯一の土偶の脚部が出土している（28）ことに注目できる。



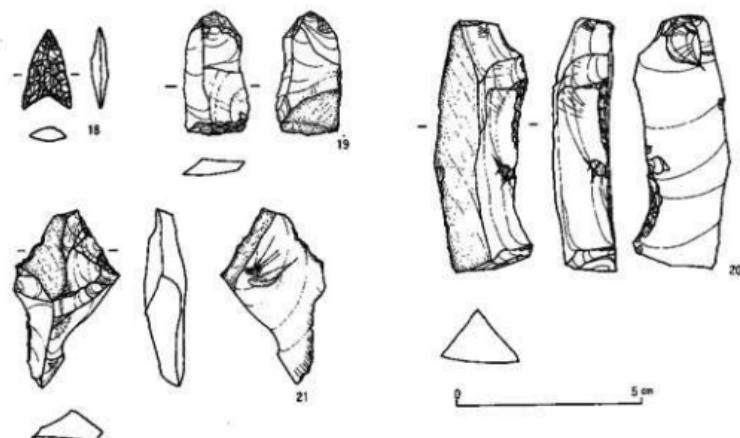
第48图 18号住居址出土遗物实测图1



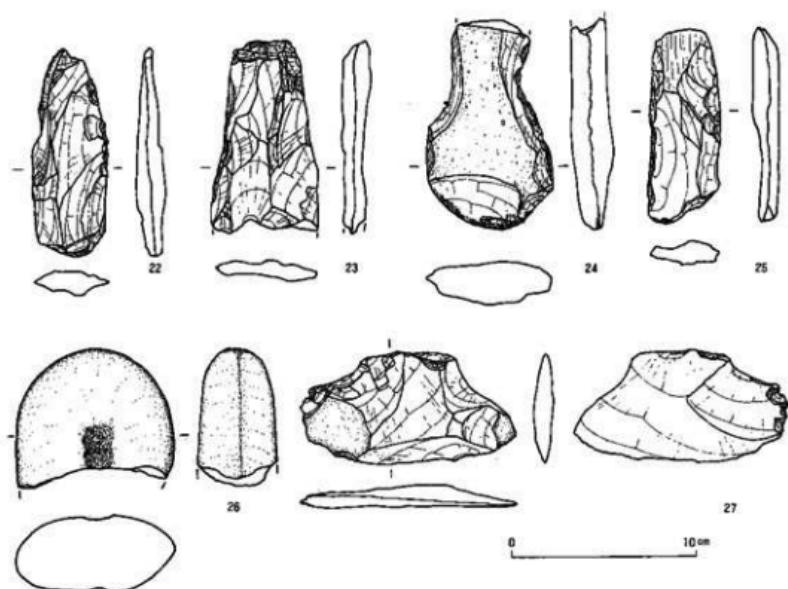
第49図 18号住居址出土遺物実測図2



第50圖 18號住居址出土遺物實測圖3

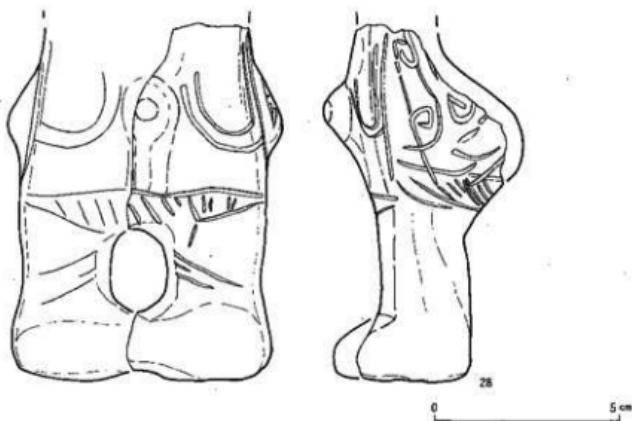


0 5 cm



0 10 cm

第51圖 18號住居址出土遺物實測圖4



第52図 18号住居址出土遺物実測図5

19号住居址

遺構（第53図） 調査区の東側、A-10、B-10グリットに位置し、29~34号土壌を切って構築され、西側は削平され、東端は調査区外のために埋没している。ほぼ円形を呈する形状と思われるが、はっきりとした規模、形状は不明である。

覆土は、4分層された。1層は、炭化物やローム粒子・土器片を疎らに含む暗茶褐色土で、2層は、炭化物を疎らに含む暗茶褐色土。3層は、焼土を疎らに含む横褐色土で、4層はローム粒子と土器片を多く含む明茶褐色土である。又すべて縞りが認められた。

床は、やや軟弱で貼床は認められない。又柱穴と思われるピットの所在がつかめなかった。尚、炉は検出できなかったものの、焼土の検出でその可能性を残した。

遺物（第54図） 土器は、深鉢（1~3）が、石器は、石錐（4）、石匙（5）磨製石斧（6）の出土がみられた。

1は、キャリバー形を呈する形状で、縱位隆線文に交差する貼付け隆線文を施す。2は、半裁竹管状工具による平行沈線文を施すもので「平出Ⅲ類A土器」の特徴を示す。

4の石錐は、連続性のある調整による作出をしている。5は、つまみと刃部の位置から横形を呈していない。6は頂部に打痕を有し、刃部は後退している。石質は、4が黒曜石、5が頁岩、6が緑泥岩である。

上記の出土遺物から、本住居址は、縄文時代中期後葉のそれも初段階に位置づけられようが、出土量が少ないと、完掘でないことで断定することはできない。

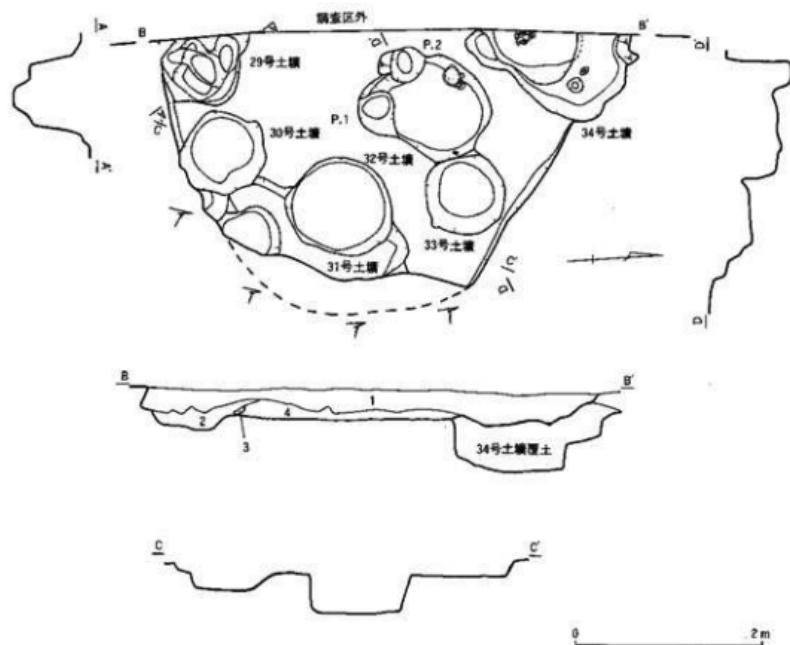
20号住居址

遺構（第55図） 調査区の南東部、H-12~14、I-13・14グリットに位置し、開田時に床まで削られていた。そのため、炉・柱穴・埋甕の検出で住居址と判明した。埋甕の位置を出入口とするならば、住居址の主軸はN-45°-Wを示す。

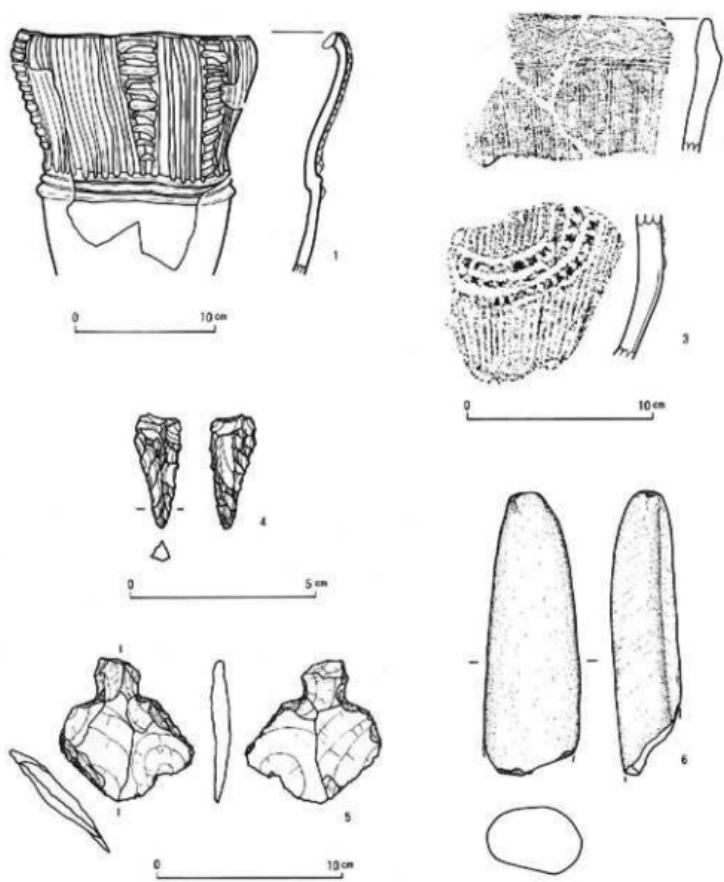
柱穴は、P1 (60×56×24cm)・P3 (72×56×35cm)・P4 (66×66×45cm)の4穴で、ほぼ等間隔に配置される。

炉は、長軸100cmの短軸74cmで楕円形を呈し、短軸方向が主軸とほぼ一致する。深さは18cm残り、底面は著しい火焼状況を示していた。覆土は、明茶褐色土（1層）と焼土を多く含む茶褐色土（2層）に2分層された。

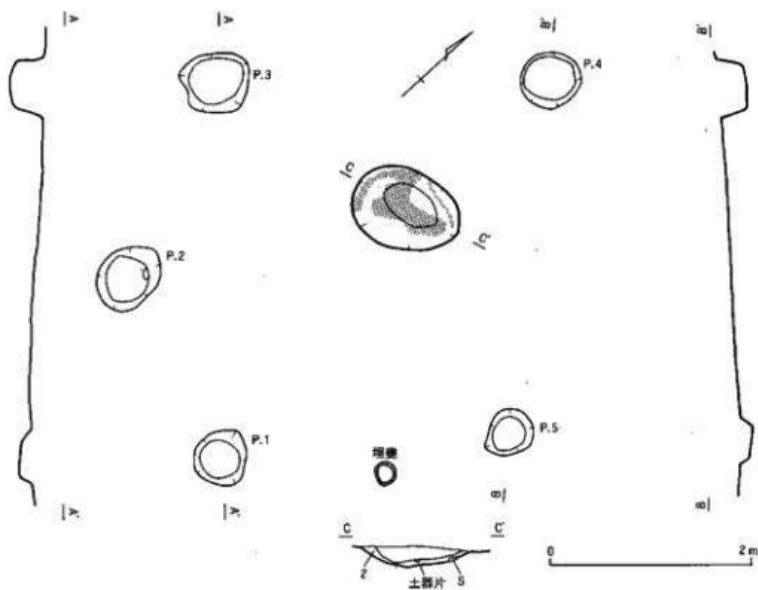
遺物（第55図） 土器は、1の深鉢が埋甕として埋設されていた。縦位平行隆線文と縦位蛇行沈線文及び櫛状工具による網線文による文様構成を行うもので、縄文時代中期後葉に位置づけられよう。



第53図 19号住居址実測図



第54図 19号住居址出土遺物実測図



第55図 20号住居址実測図・出土遺物実測図

2 土壙

2号土壙（第56図）

B-10グリットに位置する。規模は $0.5m \times 0.4m$ の円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は台形。3号土壙を切っている。

3・4号土壙（第56図）

B-10グリットに位置するが切り合っているためプランはわからないが合わせた長軸は1.5mでそれぞれの短軸は0.6m、深さは0.2m。4号土壙の底面から平石が検出された。

5号土壙（第56図）

B-10グリットに位置する。 $0.9m \times 0.7m$ の楕円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は台形。4号土壙を切っている。2～5号土壙から縄文時代中期後葉等の土器片が出土しているが、縄文時代の住居址（19住）を切っていることや、掘立建物址・奈良・平安住居址と同様の遺構検出面で確認されていることから、2～5号土壙は奈良・平安時代の土壙と思われる。

6号土壙（第56図）

H-8グリットに位置する。 $2.1m \times 1.6m$ の隅丸長方形のプランを呈し、深さ0.2m。断面は四角形。覆土は2分層される。1層は茶褐色土。2層は茶褐色土にロームが混じる。両層とも締りがあり、粘性もややある。全土壙のうち最大のものだが、遺物はない。

9号土壙（第56図）

F-9グリットに位置する。 $2.2m \times 1.0m$ の楕円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は半円形。5号住を切っている。覆土は2分層される。1層は暗褐色土で炭化物をやや含み、締り・粘性ともにある。2層は黄褐色土。締り・粘性ともにある。遺物は縄文時代中期中葉の土器片が1層中より出土している。又、くさび形の小型定角式磨製石斧（62-13）が出土した。欠損品で石質は頁岩。

10号土壙（第56図）

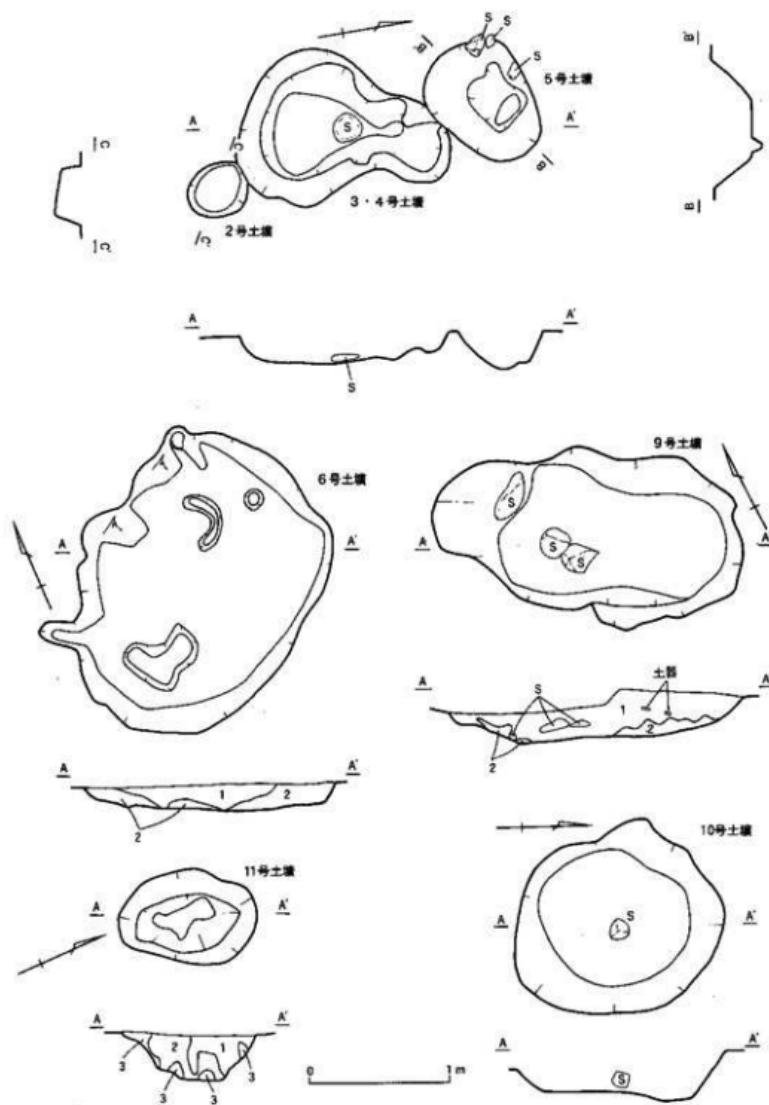
F-8グリットに位置する。規模は $1.5m \times 1.2m$ の円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は半円形。床面中央に12cm大の石が出土した。5号住の北側隅の壁を切っている。遺物は縄文時代中期後葉の土器片が出土している。

11号土壙（第56図）

F-7グリットに位置する。26号土壙を切って造られている。規模は $1.0m \times 0.7m$ の楕円形プランで、深さ0.3m。覆土は3分層される。1層は暗茶褐色土で締り・粘性ともにある。2層は黒褐色土。3層はローム粒子の混じる暗茶褐色土で締り・粘性ともにある。遺物はない。

12号土壙（第56図）

C-6グリットに位置する。規模は $1.1m \times 0.9m$ の楕円形で、深さ0.6m。断面は長軸の南壁



第56図 土壤実測図1

が一部袋状だが、ほぼ四角形。又、床中央部に落込みがみられる。覆土は2分層される。1層は暗茶褐色土で締り・粘性ともにある。2層はロームを含む茶褐色土で締り・粘性ともある。遺物は縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

13号土壙（第57図）

C-5グリットに位置する。0.6m×0.6mの円形プランを呈し、深さ0.1m。断面は四角形。遺物はない。

14号土壙（第57図）

C-6グリットに位置する。1.0m×0.9mの円形プランを呈し、深さ0.09m。断面は四角形。遺物はない。

15号土壙（第57図）

C-6グリットに位置する。0.9m×0.7mの椭円形プランを呈し、深さ0.1m。断面は半円形。遺物はない。

16号土壙（第57図）

B-6グリットに位置する。0.7m×0.7mの円形プランを呈し、深さ0.08m。断面は四角形。遺物はない。

17号土壙（第57図）

C-5グリットに位置する。0.9m×0.9mの円形プランを呈し、深さ0.1m。断面は四角形。遺物はない。

18号土壙（第57図）

B-3グリットに位置する。0.8m×0.7mの円形プランを呈し、深さ0.5m。断面は西壁が袋状のほぼ四角形。遺物はない。

19号土壙（第57図）

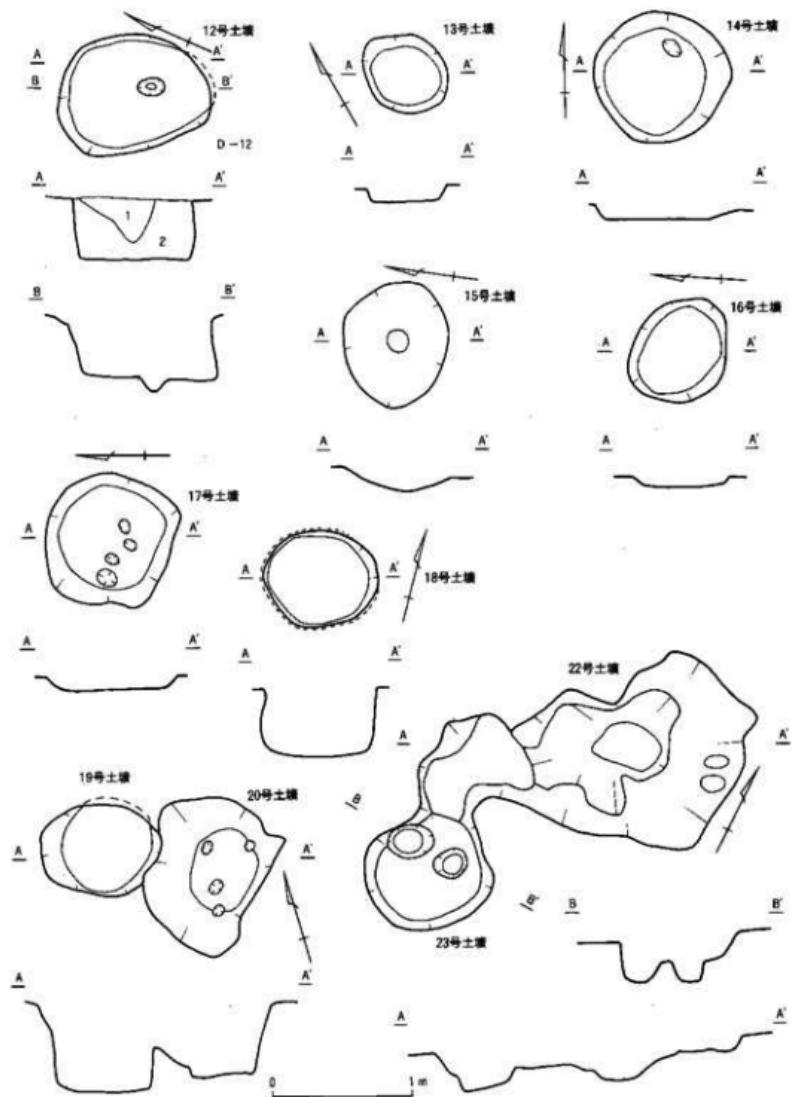
D-4グリットに位置する。0.9m×0.7mの椭円形プランを呈し、断面は台形。20号土壙と切り合う。北壁が一部袋状になっている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片（61-2-3）が出土している。

20号土壙（第57図）

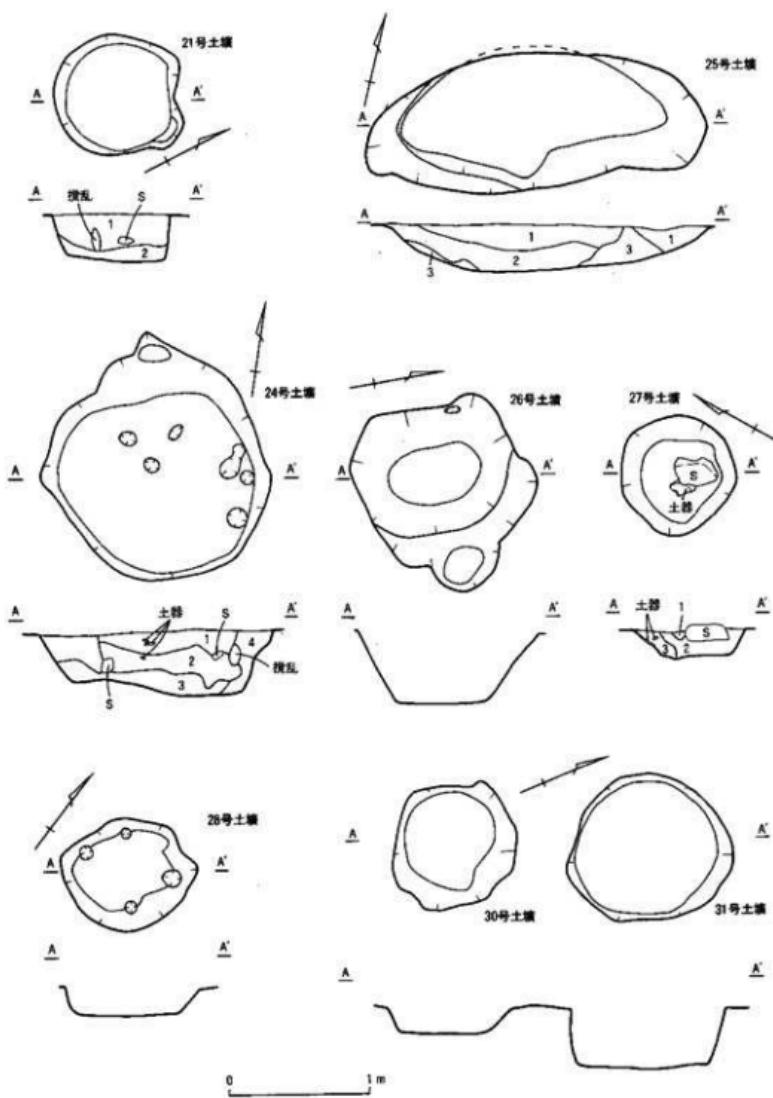
E-4グリットに位置する。1.0m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.5m。断面は台形。19号土壙と切り合う。遺物はない。

21号土壙（第58図）

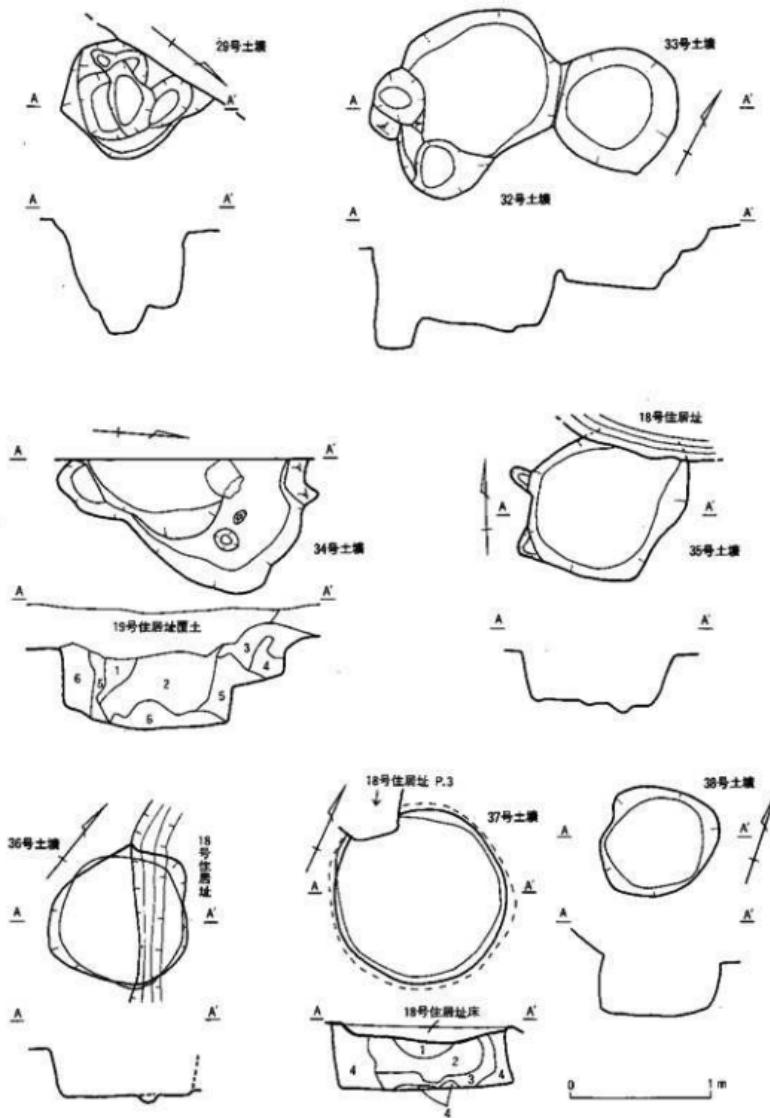
D-8グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は台形。覆土は2分層される。1層は炭化物を含む暗茶褐色土で締りはなく粘性はある。2層は暗茶褐色土で僅かに炭化物が含まれる。締り・粘性ともにややある。遺物は縄文時代中期中葉の土器片が出土している。



第57图 土壤实测图 2



第58図 土壤実測図3



第59図 土壤実測図4

22号土壤 (第57図)

E-4グリットに位置する。2.3m×1.0mの不整精円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は台形に近い。23号土壤と切り合う。遺物は縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

23号土壤 (第57図)

E-5グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は二段構造。22号土壤と切り合う。遺物はない。

24号土壤 (第58図)

E-8グリットに位置する。1.7m×1.6mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は台形。覆土は4分層される。1層は茶褐色土で縮り・粘性ともにある。2層は暗茶褐色土で縮り・粘性ともにある。3層はロームが混じる暗茶褐色土で縮り・粘性ともにある。1～3層とも炭化物が僅かに含まれる。4層は黄褐色土で縮り・粘性がある。遺物は縄文時代の土器片が1・2層中から出土している。

25号土壤 (第58図)

G-3グリットに位置する。2.4m×1.0mの精円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は半円形。覆土は3分層される。1層は茶褐色土で縮り・粘性ともにある。2層は小石混じりの暗茶褐色土で縮り・粘性がある。3層は黄褐色土で粘性は少しあるが、縮りはない。遺物はない。

26号土壤 (第58図)

F-7グリットに位置する。1.3m×1.1mの精円形プランを呈し、深さ0.5m。断面は台形。11号土壤に切られる。遺物はない。

27号土壤 (第58図)

G-6グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は台形。覆土は3分層される。1層は暗茶褐色土で縮り・粘性ともになし。2層はロームと炭化物の混じる茶褐色土で縮り・粘性ともない。3層は黄褐色土で縮り・粘性ともにある。遺物は縄文時代中期中葉の土器片(61-4・5)が出土している。上部に人頭大の石があったが、流れ込みかはわからない。

28号土壤 (第58図)

F-7グリットに位置する。1.0m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は台形。遺物は縄文時代中期後葉の土器片(61-6)が出土している。

29号土壤 (第59図)

A-10グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.8m。断面は、二段構造を成す。19号住居内に存在するため、同住居の柱穴を切っているとも考えられる。遺物は縄文時代中期初頭の土器片が出土している。

30号土壤 (第58図)

A-10グリットに位置する。0.9m×0.9mの円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は台形。
19号住居址を切っている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片（61-7・8）が出土している。

31号土壤（第58図）

B-10グリットに位置する。1.2m×1.0mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は四角形。
19号住居址を切っている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片（61-9・10）が出土している。

32号土壤（第59図）

A-10グリットに位置する。1.4m×1.0mの楕円形プランを呈し、深さ0.6m。断面は二段構造を成す。19号住居を切っている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片と乳棒状磨製石斧（62-12）が出土している。石質は緑泥岩で頂部・基部に使用痕と思われる摩滅がみられる。33号土壤と切り合う。

33号土壤（第59図）

B-10グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は二段構造を成す。19号住居を切っている。遺物は縄文時代中期初頭の土器片（61-11）が出土している。
32号土壤と切り合う。

34号土壤（第59図）

A-10グリットに位置する。一部が調査区外にかかっているためプランの確認はできなかつたが長軸は1.7mの楕円形プランと思われ、深さは0.6m。断面は二段構造を成す。覆土は6分層される。1層は暗茶褐色土で焼土と炭化物を含む。締り・粘性ともにある。2層は暗茶褐色土で炭化物をわずかに含む。締り・粘性ともにある。3層はローム粒子を僅かに含む茶褐色土で締り粘性ともにある。4層はローム粒子を多く含む黄褐色土で締り・粘性ともにある。5層は炭化物・ローム粒子を僅かに含む茶褐色土で締り・粘性ともにある。6層は炭化物を僅かに含む黄褐色土で締り・粘性ともにある。19号住に切られる。遺物は縄文時代中期初頭～後葉の土器片と石皿（62-14）が出土している。石質は花崗岩。

35号土壤（第59図）

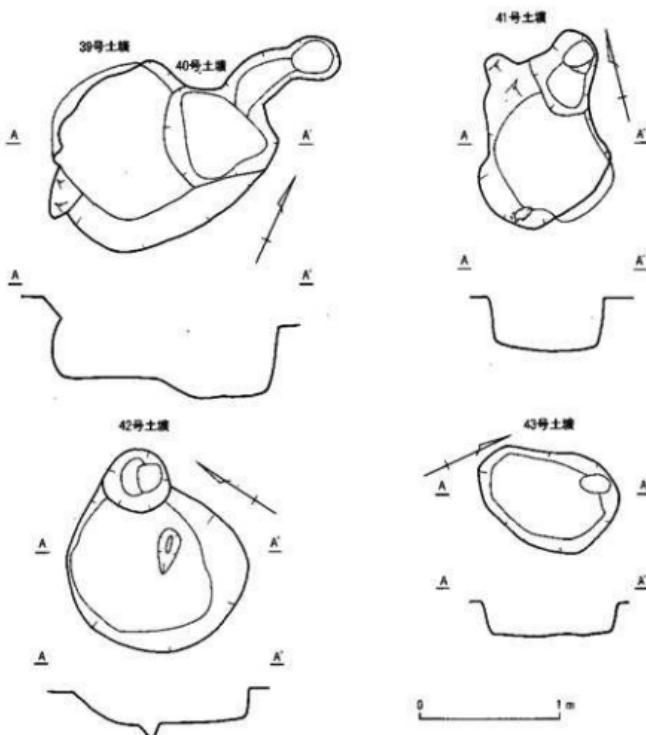
B-9グリットに位置する。1.0m×0.9mの楕円形プランを呈し、深さ0.3m。18号住に切られる。遺物は縄文時代中期の土器片が出土。

36号土壤（第59図）

A-9グリットに位置する。1.0m×1.0mの円形プランを呈し、深さ0.3m。断面は四角形。
18号住に切られる。遺物はない。

37号土壤（第57図）

A-9、B-9グリットにかけて位置する。1.2m×1.2mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は四角形。覆土は4分層される。1層は黒褐色土。2層は暗茶褐色土。両層とも締り・粘性はない。3層はロームの混じる暗茶褐色土。4層は暗黄褐色土。両層とも締りはなく粘性は



第60図 土壤実測図5

ある。又、炭化物が含まれる。18号住に切られる。遺物はない。

38号土壤（第59図）

A-8グリットに位置する。0.8m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は四角形。

1号住を切る。遺物はない。

39号土壤（第60図）

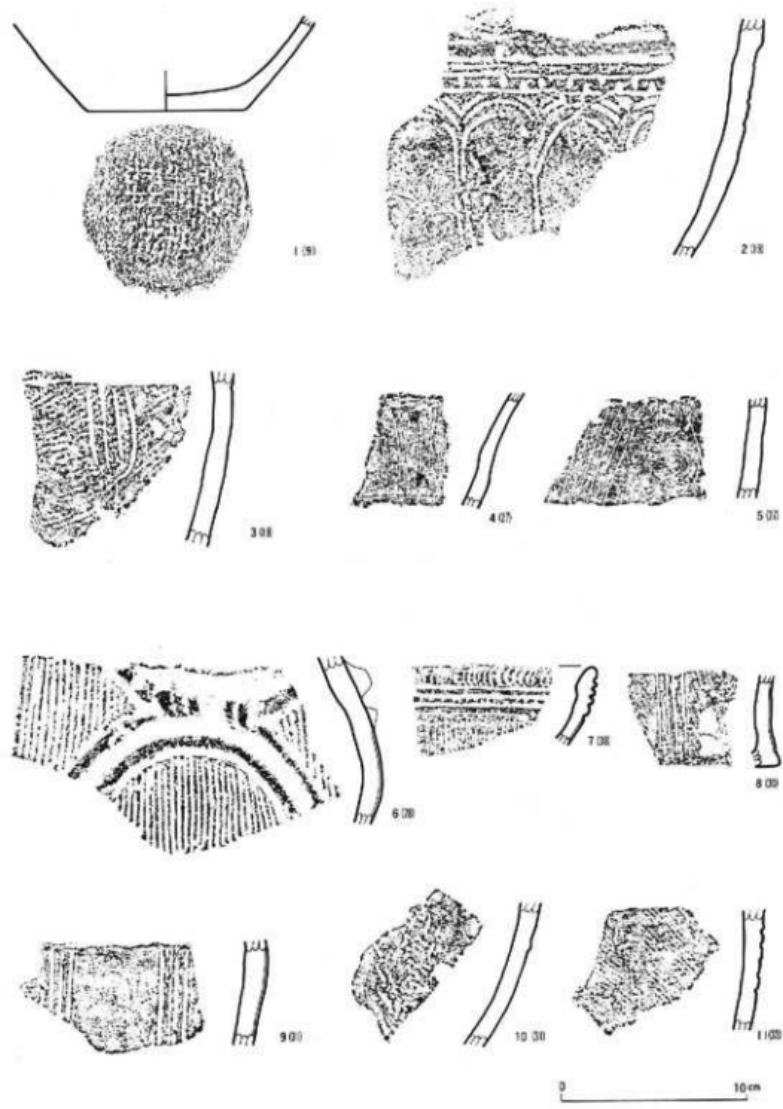
A-8グリットに位置する。1.3m×1.0mの円形プランを呈し、深さ0.4m。断面は一部袋状の四角形。40号土壤に切られる。遺物はない。

40号土壤（第60図）

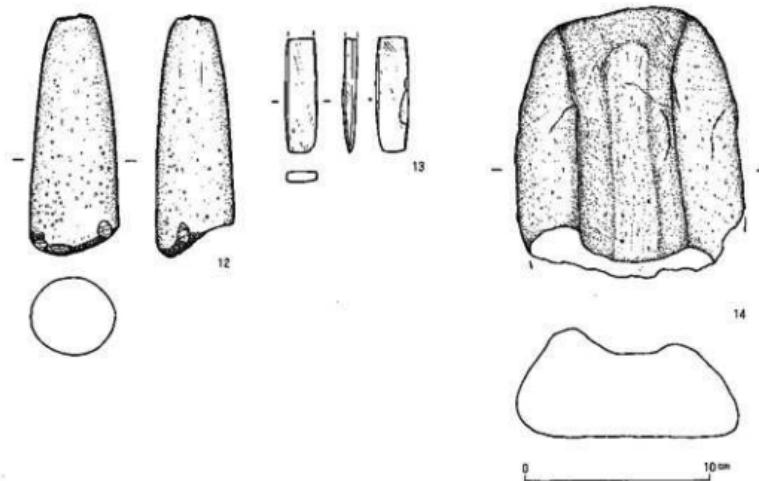
A-7・8グリットに位置する。0.9m×0.8mの円形プランを呈し、深さ0.5m。断面は四角形。39号土壤を切る。遺物はない。

41号土壤（第60図）

B-8グリットに位置する。1.2m×0.8mを呈し、深さ0.4m。断面は四角形。遺物はない。



第61図 土壤出土遺物実測図1 ()内の番号は土壤番号を示す)



第62図 土出土遺物実測図2

42号土壤 (第60図)

C-7グリットに位置する。1.3m×1.2mの円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は四角形。遺物は縄文時代中期の土器片が出土している。12号住に切られる。

43号土壤 (第60図)

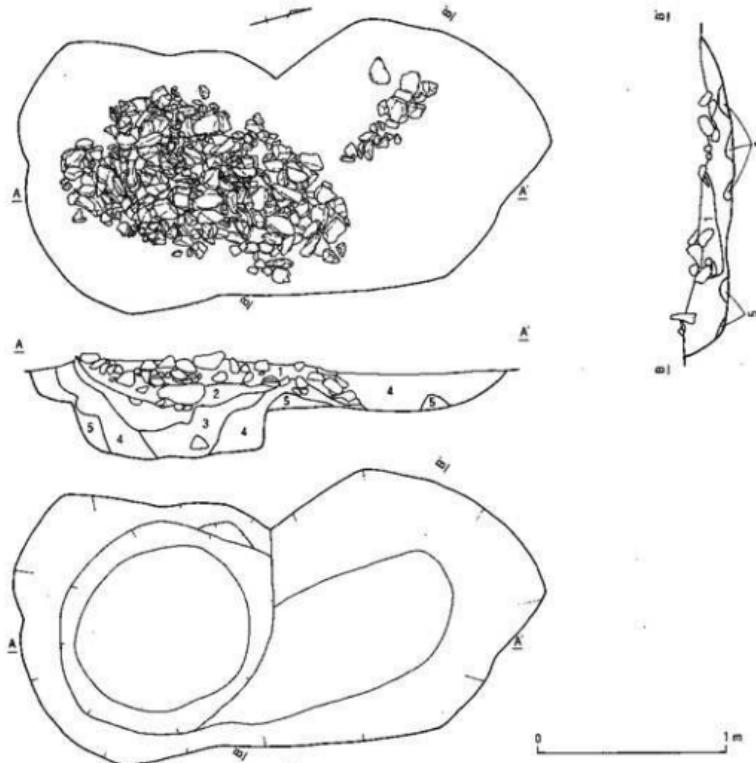
G-6グリットに位置する。1.0m×0.7mの楕円形プランを呈し、深さ0.2m。断面は四角形。遺物はない。

3 集 石

1号集石

遺構 (第63図) 調査区の北東部、H-4グリットに位置する。長軸280cmの短軸145cmの規模で、楕円形を呈しているが、掘込みが二段構造となっていることとそれに伴う覆土の堆積状況に違いがみられることから、遺構の重複の可能性がある。深さは円形の土坑状の底面で49cm、浅い椭円坑で17cmを測る。尚、出土した石はその9割以上が、焼けて脆くなっていた。

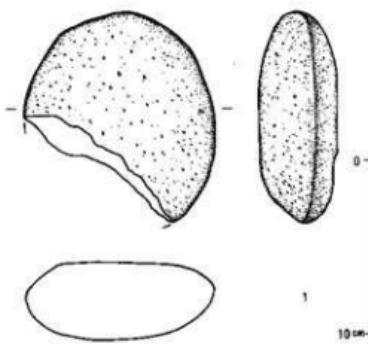
覆土は、5分層される。1層は、炭化物を多く含む黒褐色土で、おもに焼石のほとんどが含まれている。2層は、焼土を多く炭化物を疎らに含む黒褐色土で、焼石を疎らに含んでいる。3層は、炭化物を多く、ローム粒子を疎らに含む黒褐色土で、火燒を受けていない人頭大の軽石を含んでいた。4層は、ロームブロックと炭化物を疎らに含む暗茶褐色土である。5層は、ローム粒子を多く含む茶褐色土である。又、全体的にやや締りは感じられたが、特に1、2の



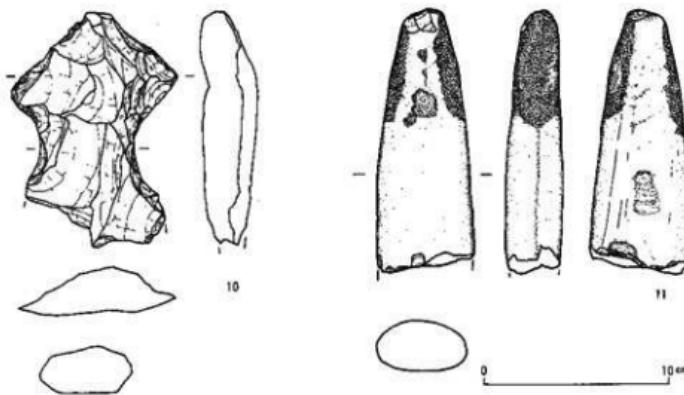
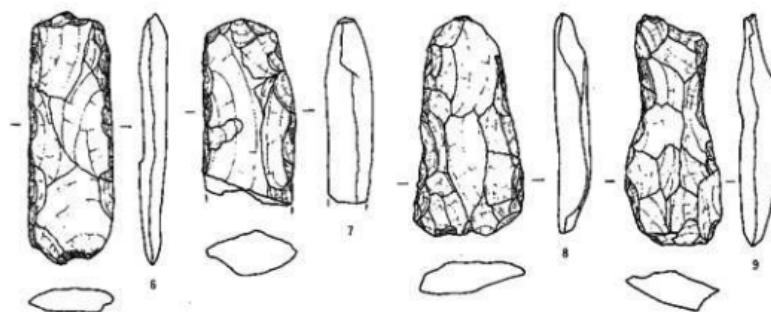
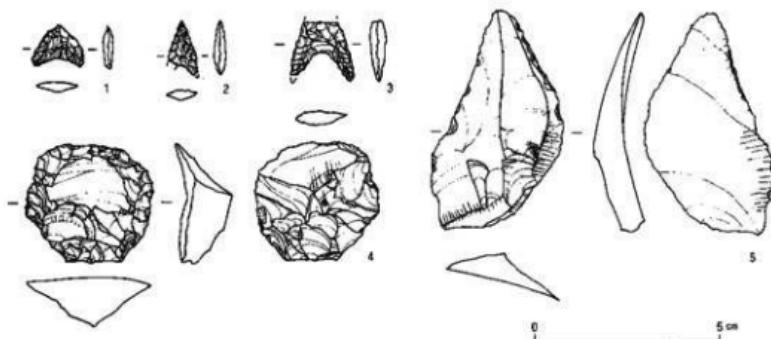
粘性は強かった。

石は、主に砂岩・礫岩・粘板岩であり、その他石英閃緑岩・花崗岩・黒雲母粘板岩・チャート・安山岩・石灰岩などもみられた。これらは、すべて桑沢川や天竜川などの河川から運び上げたと思う円礫で、特別な石質を選んでいるとは考えられない。大きさは、人頭大のものも含まれるが、ほとんどが拳大のもので、およそ500個ほどで構成されていた。

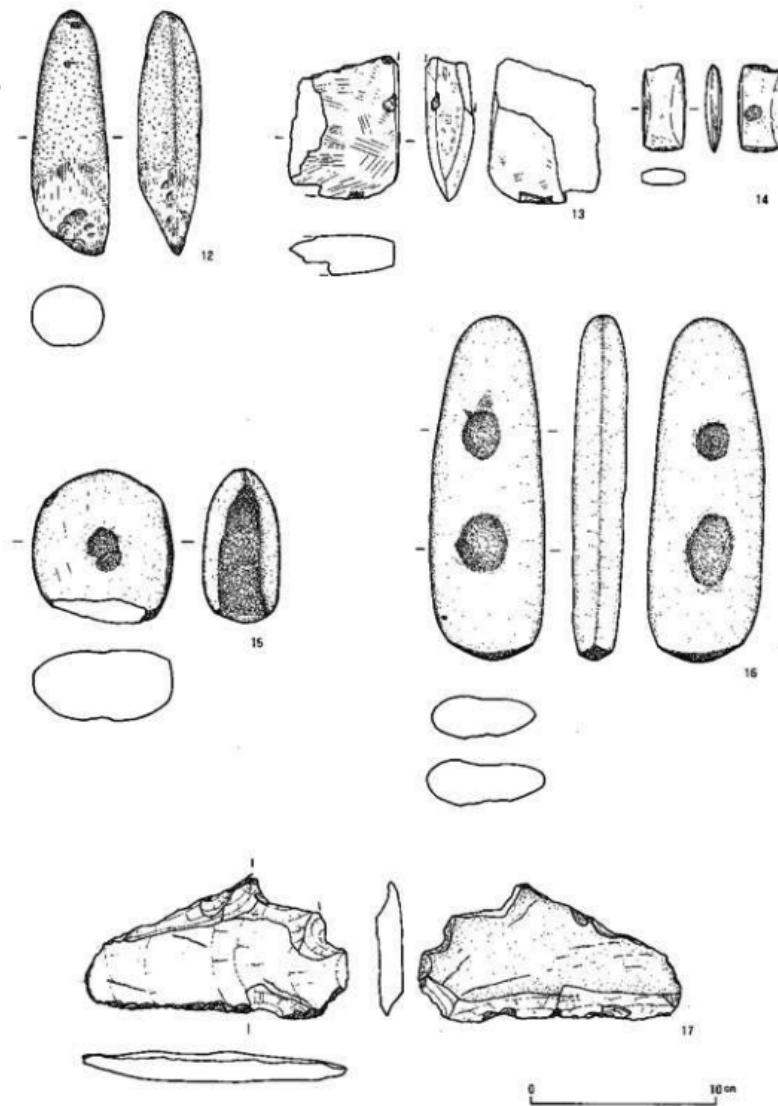
遺物（第63図） 3層中より、1の溶岩質



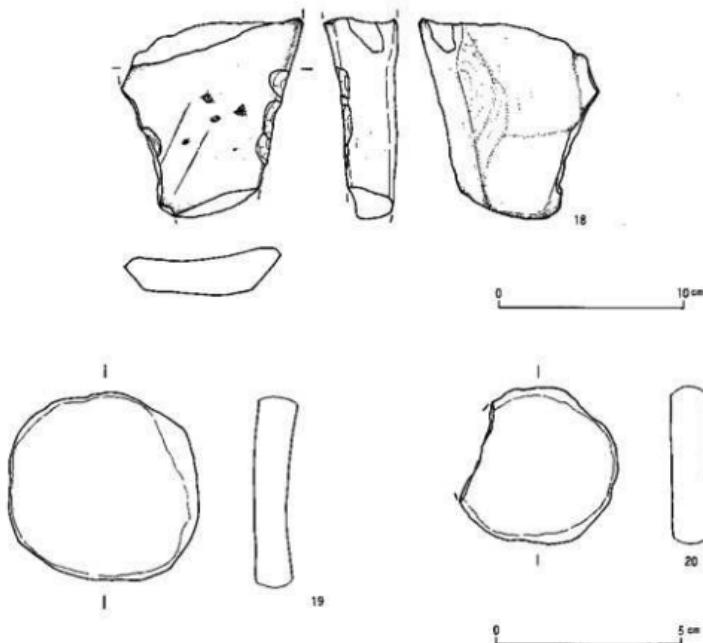
第63図 集石実測図・出土遺物実測図



第64図 漢構外出土遺物実測図 1



第65図 遺構外出土遺物実測図 2



第66図 遺構外出土遺物実測図3

の磨石が1個出土している。一部欠損するが、両面とも風化が進んでいるものの、磨面として使用されていたと考えられる。

上記の状況から、本集石は集石炉としての捉え方が妥当であろう。しかし使用時期については不明である。

4 遺構外出土遺物

遺構確認作業において出土したものや、表面採集によって得られた、実測可能な石器と土製品を取り上げた。

1～3は、すべて凹基無茎石錐に属するもので、特に1は広幅のもので1点のみの出土であった。4は、両面調整による刃部を作出しているスクレイパーで、円形に整えている。5は、剥片の側縁部使用痕を残す剥片石器である。打製石斧は、短冊形（6・7）と撮形（8）と分銅形（9・10）がみられ、特に10は、両側縁部中央に鋭い抉りを入れている。磨製石斧は、乳棒状（11・12）と定角式（13・14）とに分けられる。11は、上部の両側縁部に細かな打痕を残し、

表裏面中央部に傷状の凹痕をみせる。15は、凹・敵・磨の各痕跡を残す多機能石器であり、16は、表裏面に各2個づつの凹痕を残し基部に打痕を有している。17は、つまみ部の欠損した石匙である。18は、表裏側面に磨痕を残す砥石である。石質は、1~5が黒曜石、6~10・15~18が砂岩、11・12が緑泥岩、13がチャート、14が頁岩である。尚、19・20は、土器片の周縁を二次加工した土製円盤である。

第2節 奈良・平安時代

1 住居址

2号住居址

遺構（第67図） 調査区の東側、A-11、B-11グリットに位置し、II層検出面が、遺構確認面であった。住居址の東側は調査予定地外のため埋没し、西側は削平により破壊されている。南北に3.4mを測り、これを一辺とする方形を呈する形状と考えられる。カマド及び柱穴は、検出された範囲内では認められなかった。また、土坑状の落ち込みが内部より検出されたが、別の遺構の可能性もあるものの、覆土や粘土を用いて貼り床を行っている。尚、床面の標高は714.31mであった。

遺物（第67図） 土師器及び須恵器の出土がみられたが、すべて器形の判別が出来ない破片のみで、時期の確定は出来なかった。また、土坑状の落ち込みの上部より、ほぼ完形に近い1の刃子が出土している。刀身はほぼまっすぐで、茎には一部木質が残っている。

7号住居址

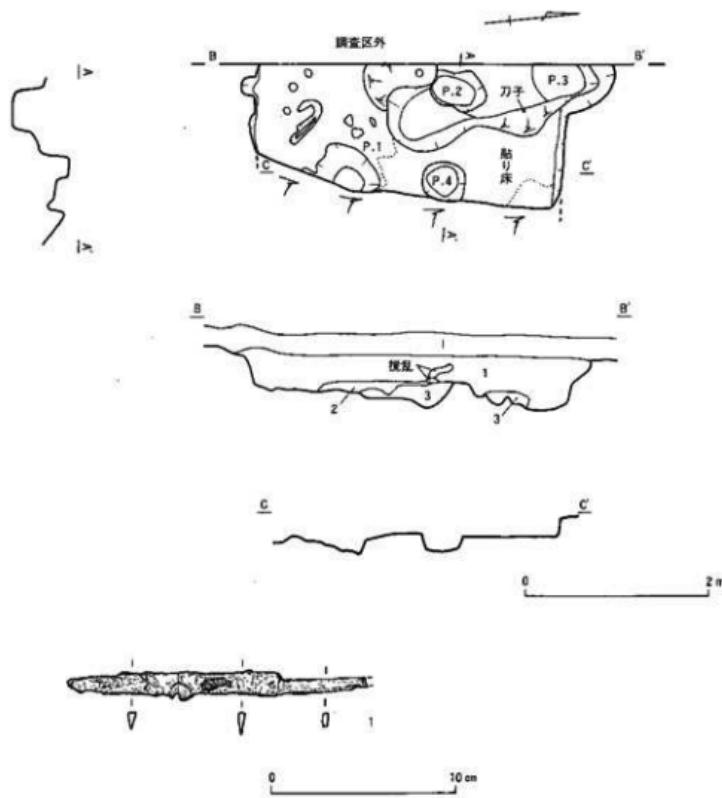
遺構（第68図） 調査区の中央部よりやや東側、G-6・7、H-6・7グリットに位置する。遺構確認面は、III層検出面であった。住居址は、6・14号住居址をもって構築している。3.8×3.0mの規模で、やや偏平ではあるが方形を呈する形状である。主軸は、N-80°-Wを示し、西壁のはば中央部にカマドを築き、左脇には貯蔵穴と思われる土坑状の施設を有する。柱穴は、それと考えられるものは検出されなかった。床は、全域的に軟弱で、6号住居址との重複部には特に貼り床らしきものは認められなかった。尚、床面の標高は713.86mであった。

カマドは、既に半壊状態にあり、片袖の一部が残存していただけであった。袖は、3層からなる土や粘土（4-ローム、5-黄褐色土、6-黒褐色土）で被覆していた。また覆土は、1層が焼土も多く炭化物もまばらに含む赤褐色土、2層が炭化物を多く含む黒褐色土、3層がローム粒子が多く含む黄褐色土である。

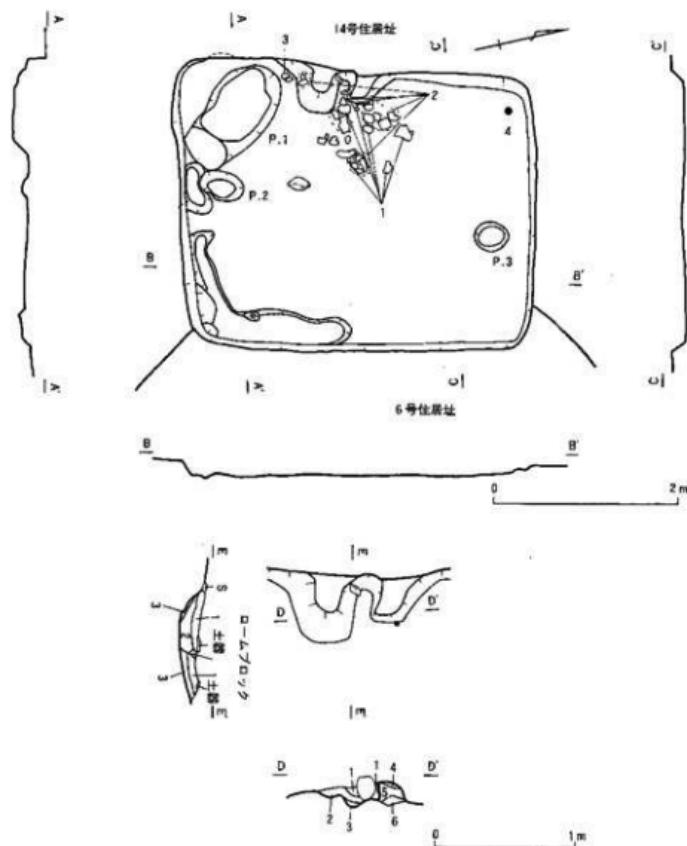
遺物（第69図） 土師器は、甕（1・2）が須恵器は、壺（3）がみられ、鉄製品では刀子（4）が出土している。また、流れ込みと考えられる石鐵（5・6）も認められた。尚、1・

2を含む3個体の甕と、3の須恵器の坏は、カマドの前方部及び周辺部よりまとまって出土していた。

1は、頸部が緩やかにくびれて、口縁部がほぼまっすぐに立ち上がる形状の長胴甕である。調整をみると、外面は、口縁部ヨコナデをし、腹部は上から下へとヘラナデを行っている。内面は、口縁部ヨコナデを行い、胸部はナデ及びハケによるものである。2は頸部が「く」の字状に屈折して短い口縁部を有する長胴甕である。調整は、内外共腹部には縦位ないし斜方形に



第67図 2号住居址実測図・出土遺物実測図



第68図 7号住居址実測図

に、台部を取り付けている。4の刀子は、柄はやや長く刀身はやや湾曲ぎみである。木質部はほとんど認められない。5は、凹基無茎石錐で基部は「V」字状に抉りが入る。6は、中央より下半部が欠損する石錐である。石質は、共に黒曜石である。

出土土師器及び須恵器からみて、ほぼ8世紀の中頃から終わりにかけての所産と考えられるよう。

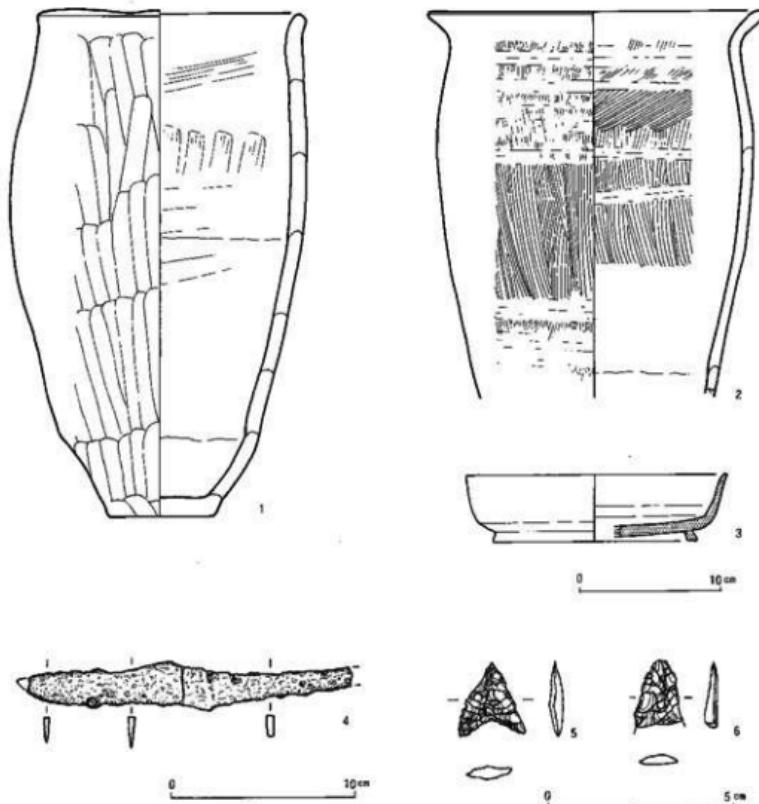
9号住居址

遺構（第70図） 調査区の中央よりやや西側で、C-8・9、D-8・9グリットに位置す

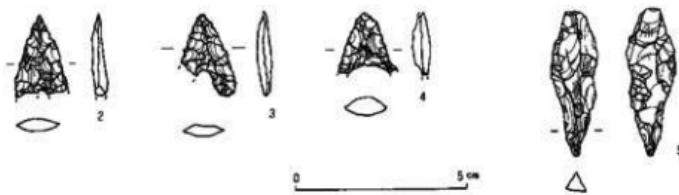
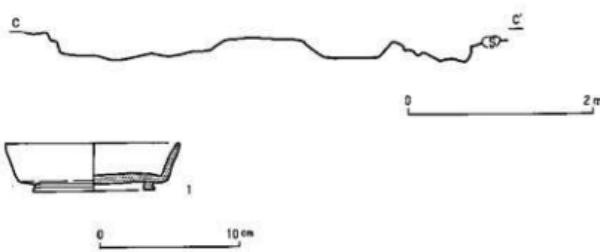
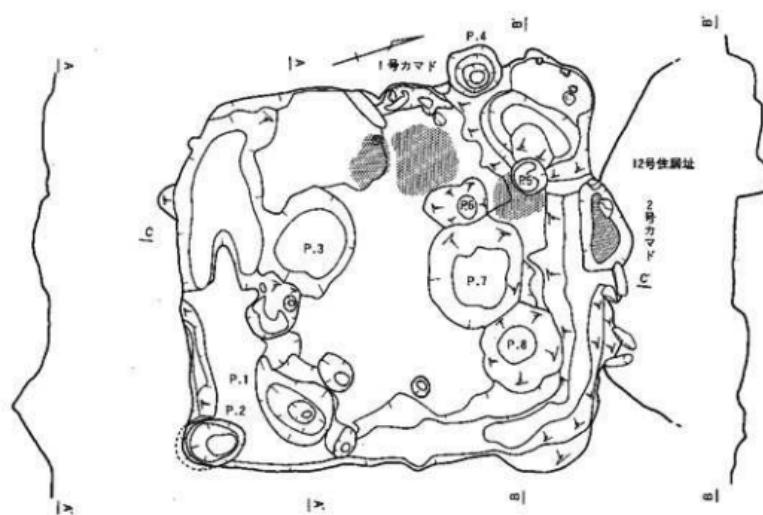
る。検出面は、Ⅲ層面確認であり、やはり削平されていて確認面から床面迄の覆土は8cm足らずであった。また、住居址は、12号住居址の一部を切って構築されている。規模は4.5×4.1mで、ほぼ方形を呈している。カマドと思われるものは2ヶ所（1・2号カマド）検出し、古いと判断したカマド（1号）を基準としたならば、主軸はN-83°-Wを示している。

覆土は、黒褐色土の単層であった。

柱穴は、P5 (40×34×42cm) のみが柱穴として考えられるが、他に、それと考えられるものは認められなかった。床は、残存するところは硬く敲き締められているものの、土坑状の落ち込み（P1・P3・P6～P8）が床面にみられるが、貼り床は行っていなかった。また、壁下に



第69図 7号住居址出土遺物実測図



第70図 9号住居址実測図・出土遺物実測図

は周溝がほぼ一周し、北東コーナーには貯藏穴とされる土坑状施設を有している。尚、床面の標高は714.17mであった。

カマドは、西壁中央部に1号カマドが、北壁中央部に2号カマドが存在する。1号カマドは、ほとんど破壊状態にあり、火焼部と思われる焼土の検出が認められただけであった。2号カマドは、周溝を切って構築しており、ピット状の落ち込みの底面に火焼状況が認められた。よって本住居址においては、1号カマドから2号カマドへの移動があったと判断されよう。

遺物（第70図） 土師器は甕が、須恵器は壺（1）が出土しており、流れ込みと思われる石縫（2～4）と石錐（5）が出土している。

土師器は、固化できなかったが、薄手で荒いハケ調整の長胴甕が出土している。1の高台付壺は、底部回転ヘラ切り後台部を取り付けている。

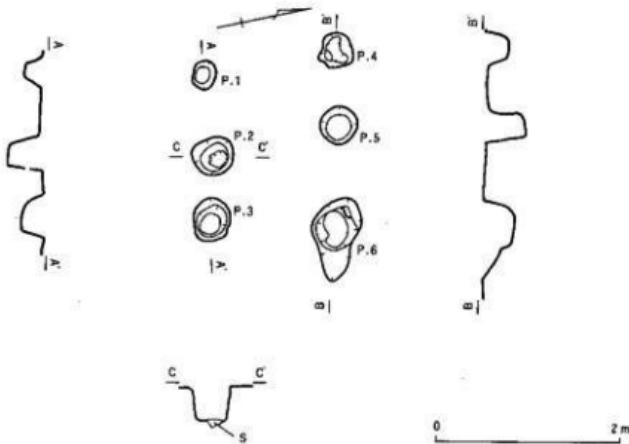
石縫は、2～4すべて凹基無形石縫に属するものである。5は、断面三角形を呈し、細かな調整はあまり認められない。石質は、2～5すべて黒曜石である。

尚、遺物の出土量がやや乏しいが、ほぼ8世紀代の所産物と考えよう。

2 挖立建物址

1号掘立建物址

遺構（第71図） 調査区の西側、B-9グリットに位置し、II層確認面が遺構検出面であった。2間×1間（2.1×1.4m）で主軸はN-80°-Wを示す。柱間は、南北列1.4mの東西列



第71図 1号掘立建物址実測図

0.8mを測った。柱穴は、P1 (32×26×18cm)・P2 (44×40×34cm)・P3 (46×40×26cm) P4 (36×34×23cm)・P5 (42×40×40cm)・P6 (56×52×32cm)の6穴で、ほぼ円形を呈し、P2は特に底面に柱根を支える平石が認められた。

尚、本址より遺物の出土は認められなかった。



第72図 遺構外出土遺実測図

3 遺構外出土遺物

1の刀子が、遺構上面確認の際に出土している。刀身のみで柄と先端は欠損している。残存部からは、ほぼまっすぐに刃を作出している。尚、注目すべき点は、鉄板を「コ」の字状に折り曲げて作出した柄と考えられるものが刀身を覆っていたということである。

第V章 まとめ

国道153号線・箕輪バイパス建設に伴う発掘調査は、今回の丸山遺跡とその南側に位置する熊野上遺跡の二遺跡をもってほぼ終了する。丸山遺跡においては、調査以前より多くの遺構・遺物の出土が予想されていた。結果としては縄文時代と奈良・平安時代の集落址の一端を探ることができ、大きな成果であったといえよう。本章では、前章で述べてきたそれらの内容について問題点を提起し、若干の考察を加えてまとめとしたい。

縄文時代

縄文時代に属する遺構は、住居址17軒、土壙35基、集石1基である。

住居址については17軒のうち、住居址として考えるにはやや疑わしい15号住居址と、遺物の出土量が少なくその性格について不明の点が多い16・17号住居址を除外して考えてみたい。まず、各住居址より出土した土器を概観した結果、今回の調査範囲内においては、縄文時代中期中葉から後葉へと継続して集落が営まれていたことがわかった。

中期中葉期においては、6・8・13号住居址が本期に当たり、藤内から井戸尻期にかけての位置づけができるよう。しかし、ここで取り上げる大きな問題点は、埋甕炉として使用されている土器と、床直上ないし覆土中より出土した一括土器との間に、時間的差異を感じられることである。8号住居址は炉に使用されていた土器（第28図10）が、山椒魚文と呼ばれる抽象文が施されるもので、新道式ないし藤内I式に位置づけられようが、その他の出土土器は、藤内II式から井戸尻I・II式の様相を示している。特に、顔面把手付土器（第27図1）出土状況をみると、覆土中ではあるが、床面よりかなり上部から出土したことを考慮すれば、混入物との見方も可能であろう。しかし個体としてのまとまり方をしていることや、他の土器の出土したレベルと比べても、さほど大きな差はないことからして、一括土器として考えるのが妥当と思われる。よって、先学の研究による土器編年を添うならば、本住居址出土の土器間に時間的なずれが生じることになるが、それは同時期に使用したものと考えるのか、または、後に土器廃棄の場と化したものなのかは、不明と言わざるを得ないだろう。約2分の1の調査であったため、今後完掘できる調査結果を待って再度検討をして行きたいと思う。又更に、本住居址からは、幅広の貼付け隆帯に、幅広の連続する爪形文を施す土器（第27図3）が出土している。このような爪形文を施す手法は、近畿地方の縄文時代前期にみられる「北白川下層様式」や、中國・四国地方の縄文時代中期にみられる「船元・里木式」の流れを汲む可能性が考えられる。しかし、他に類例も少なく、これも今後の研究課題となろう。次に、多量の土器を出土した6号住居址であるが、出土した土器の大半が井戸尻I・II式に属するものと言えよう。しかし、ここでも炉址使用土器（第21図4）が、他の土器よりも若干古い様相が感じられるものの、

8号住居址ほどの差は認められない。最後に13号住居址については、土器の出土量に恵まれなかったものの、炉使用土器（第38図1）のみについて考えてみると、横位山形隆線文が連続する逆三角形を構成しており、8号住居址の炉使用土器（第21図4）とほぼ併行するものと言えよう。

統いて縄文時代中期後葉期になると、1・3～5・10・12・14・18～20号の10軒の住居址が確認された。この中においても、中期中葉の文様構成を継承する後葉の初段階とされる時期のものと、大型の土器を埋設する埋甕を行い、土器組成中に唐草文系土器が多く占めるようになる時期とに更に2分されよう。まず前者であるが、1、19号住居址出土土器がこれに当たる。良好な一括土器が出土している1号についてみると、器形的にはキャリバー形を呈する口縁部で、頸部は括れ、副部はやや膨らみをみせるもの（第7図4）や、樽形を呈するもの（第7図3）、円筒形を呈するもの（第7図2、5）も認められる。文様は、隆線文を主体としており、隆線を交差させて貼付するもの（第8図6）や、重弧文（第7図4）、波状隆線文を施すもの（第8図9）もみられる。また、中期中葉を継承するものとして、連続する櫛形文を施文するもの（第7図4）も認められる。このような特徴から、松本・諏訪・上伊那を中心に分布する梨久保B式土器（註1）と呼ばれる土器群として考えるのが妥当かと思われる。從来の曾利式土器編年には添うならば、曾利I式として捉えることができよう。次に後者についてであるが、3～5・10・12・14・18・20号住居址が本期に属するものである。そのうち6軒の住居址が、出入口と考えられる壁下に、埋甕を設けていた。その内容は、正位に土器を埋め込むもの（3～5・18・20号住居址）がほとんどで、逆位に埋め込むもの（14号住居址）も1例みられた。正位に埋め込むものの中でも、2個体の土器を埋め込むもの（3号住居址）や、石蓋をするもの（18号住居址）も認められた。しかし、ほぼ同時期に存在したと考えられる住居址間にあって埋甕を埋設しない10・12号住居址も含まれており、必ずしも埋甕を設けるとは限らないようである。それは、個々の住居址より出土した土器資料の細分による分析等で、住居址毎に新旧の差があることは、十分に可能性のあることである。主に出土した土器を概観してみると、器形的にはキャリバー形を呈するものと、樽形を呈するものにはほぼ2分されるが、文様的には唐草文をモチーフとする唐草文形土器群が圧倒的に多かったのである。中南信地方における縄文時代中期後葉の土器編年は、曾利式土器編年を基準に行われてきたが、近年における資料の増加もあってか、各地域の土器編年はその全てが曾利式土器の細分型式に対応できるとは限らない（註2）との指摘もされている。又、唐草文形土器群が、諏訪・松本・上伊那を中心に分布するのに対し、八ヶ岳西麓地帯を中心とする曾利式土器とは形式的特徴を異にする別の土器である（註3）ことが、少しづつ明らかになってきてている。しかし、今回住居址毎に出土した良好な一括資料は、中期中葉のものも含め、今後土器編年研究を行って行く上での一例に過ぎないのである。よって本文では、これらの資料だけでの細分は行わず、唐草文形土器群を中心とする縄文時代

中期後葉の一時期としてまず捉えておくこととし、今後の研究課題としておこう。

尚、ほぼ同時期と思われる住居址間での集落構成については、広い面積が予測される遺跡の東端部のみの調査であり、また既に開田等による破壊を受けている点などを考慮すれば、今回の調査結果だけでは、明らかにされなかつたと言えよう。

次に、本時代に属すると思われる35基の土壙についてであるが、円形ないし稍円形を呈し形状的には整ったものが多かったものの、伴出する遺物にあまりまとまつたものもみられなかつたせいか、性格はおろか時期的なものも不明な点が多かつた。しかし、出土遺物から判断して、中期初頭に属するもの9基、中葉に属するもの3基、後葉に属するもの2基が確認できた。今回の調査範囲内で検出された住居址は、中期中葉のものが最も古いものであったが、土壙における最古段階のものが中期初頭であるという結果から推測して、中期初頭期の集落の存在が、調査の行われていない遺跡範囲内にある可能性を十分に示しているのである。

奈良・平安時代

縄文時代の遺構と重複する形で、住居址3軒、土壙5基、掘立建物址1棟が検出している。検出された3軒の住居址は、方形ないし方形を呈していると考えられるものであり主軸方向はほぼ東西方向と一致している。しかし、遺存状態も悪かつたせいか、良好な出土遺物に恵まれなかつた。そのため、集落を構えていた時期があまりはつきりとしないが、ほぼ8世紀の中ごろから後半にかけての位置づけが考えられよう。調査以前の段階では、本遺跡においてこれらの時代の遺構の存在が、まったく知られていないかったと言ってよいであろう。だが、今回の調査結果によって、奈良・平安時代の集落の存在が明らかになったことは、大きな成果であったと言えよう。

そして次に、土壙及び掘立建物址であるが、出土遺物等で本時代に属する決定的な証拠は得られなかつたものの、住居址とほぼ同一の黒褐色の櫻土を有する点とⅡ層上部を掘り込んで構築している点で、同時代と捉えておくこととした。

調査期間中におきましては、箕輪北・東小学校、婦人会をはじめ、一般の方々も含めました多くの皆様に見学していただくことができました。今後とも、埋蔵文化財に対する关心と深いご理解をいただけるためにも、今回に限らず多くの方々に見学していただけるよう努力して参りたいと思います。更に、調査終了後、箕輪北小学校東側にあります復元住居の中に、12号住居址の石組炉を移転・復元することができました。本事業に付きましては、学校関係者の方々のご理解とご協力によるものであり、ここに改めて感謝申し上げたいと思います。

尚、「顔面把手付土器」の復元に關しましては、町教育委員会と復元者が協議を持ちまして一部推定復元を行いました。多くの報道機関によって本土器の紹介がされました。若干誤報もありましたので、ここに改めて申し添えておきたいと思います。

末筆ではありますが、調査の進行に当たり深いご理解とご協力をいただきました沢区を始め、長野県伊那建設事務所、北陽実業、そして直接調査に従事された団員の方々に厚くお礼申し上げます。

註1　岡谷市教育委員会 1972 『梨久保遺跡－第3・4時発掘調査報告』

註2　野村一寿 1988 「II時代と編年、(1) 繩文時代－中期後葉土器」『長野県史考古資料編、全一巻 (四) 遺跡・遺物』

註3　三上徹也 1988 唐草文土器様式 『縄文土器大観3 中期II』

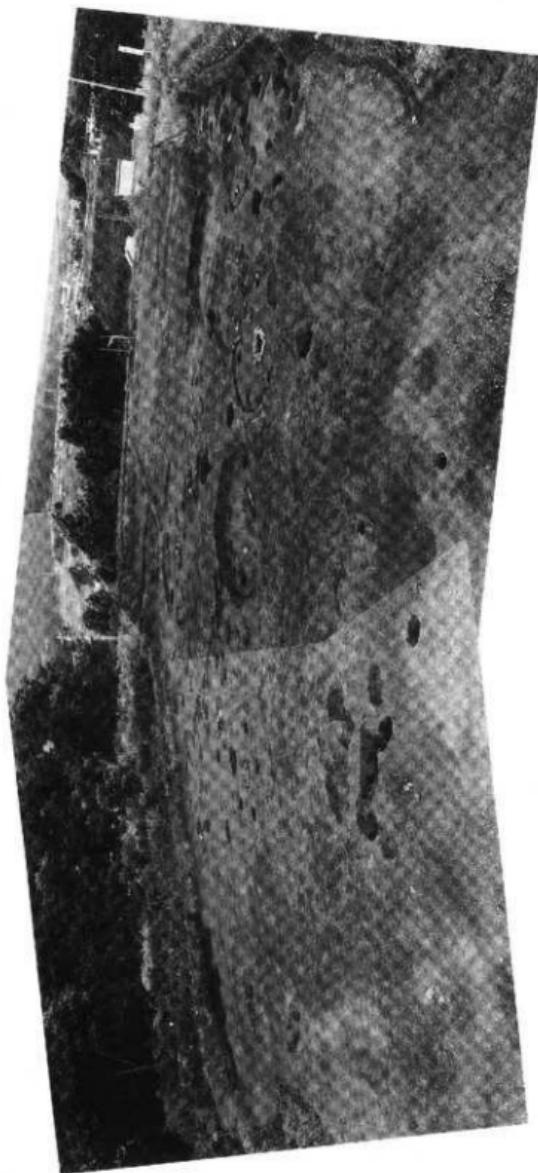
図 版



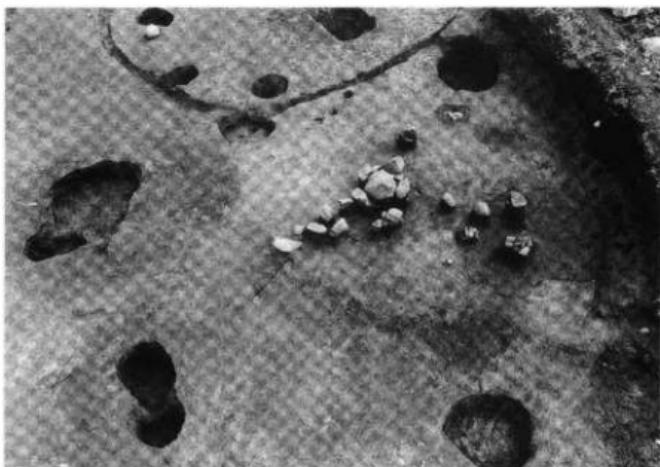
遺跡地遠景（東方より）



調査地近景（南西より）



調査地全景（北西より）



1号住居址



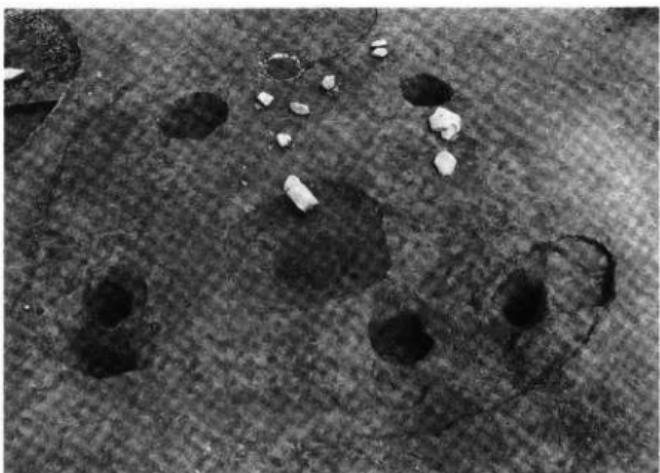
1号住居址遗物出土状况



3号住居址



3号住居址埋甕埋設状況



4号住居址



4号住居址埋甕埋設状况